

平

和

市津摂

はじめに

先の大戦から 70 年という年月が経ちました。

太平洋戦争においては、日本の各地が焦土と化し、広島や長崎に原爆が投下されるなど、多大な被害を受けました。

摂津市においても、戦闘機が飛来し、爆弾の投下や、機銃掃射等を受けています。しかし、現在、戦争を体験した方々が減少し、その体験を語り継ぐことが困難になっています。

この冊子は、昭和 60 年、戦後 40 年の折に発行した市民の皆さんの戦争体験集『平和』をもとに作成いたしました。当時の状況や想いを記された貴重な体験集を、次世代に引き継いでいきたいと思います。

この冊子を多くの方に読んでいただき、戦争の悲惨さと平和の尊さについて、家族で、あるいは職場や地域で、語り合い、そして心に刻んでいただければ幸いです。

平成 27 年 12 月
摂津市長 森山一正

《 閲読上の注意 》

内容については、当時の文章をそのまま忠実に復刻することを心がけ、次の点に注意しつつ作成しました。

(1)誤字・脱字、句読点のないもの、誤記であると思われるもの、軍隊用語や戦時中の言葉、当時の土地名等現代の呼称や標記と違うもの等もすべて原文のままにしています。※用語に一部不適切な表現があるかもしれませんが、原文のまま表記しています。

(2)活字については、現在使われていないものは常用漢字で表記しています。

(3)筆者やその家族の名前についてはイニシャルで表記し、生年月日や住所は一部省略しています。

※なお、原文にある写真資料等は返却されているため、省略しています。

空襲・疎開

そして終戦

恒久平和の旗の下に……………	H・T	2
私の戦争体験 ―平和を祈って―……………	A・Y	5
空襲警報発令……………	Y・T	8
戦争の思い出……………	K・H	10
私の戦争体験……………	S・S	11
暗闇とまっ赤な空と……………	H・K	14
戦争体験より学んだこと……………	G・M	16
家屋疎開と父の死……………	O・S	18
平和について……………	B・M	20
戦争体験……………	I・A	21
空襲の思い出……………	I・T	24
学童疎開の歌……………	N・K	27
短 歌……………	K・M	31
小学生の見た戦争……………	M・T	32
ごはんと芋のつる……………	N・T	35
子供の目で見た終戦……………	K・I	38
千人針……………	O・H	41
戦争の傷痕……………	E・N	42

うん婆の一人芝居……………	S・A	49
空襲と戦災 ―戦争中の日記より―……………	H・Y	52
信仰と繁栄……………	H・N	56
思い出は哀し……………	B・T	57
十才の時の戦争体験談……………	N・K	59
平和を！……………	I・M	63
心に平和の砦を築こう……………	D・K	65
―母から聞いた戦争、そして平和の尊さ―		

戦 場

生と死の狭間

この戦場の地獄の真実……………	Y・K	70
サイパン島での戦闘体験……………	T・H	73
戦艦大和……………	S・R	77
沖縄戦線に想う……………	K・K	79
今も忘れじ……………	K・S	82
生と死と歳月と平和と……………	M・O	83
石の中に産んだ女たち……………	N・S	86
死へのさすらい ―マニラ東方山岳戦の記録―……………	O・K	87
戦旅のうた ―侵略の日々―……………	T・O	91
私が体験した戦争と平和 ―フィリピン戦線―……………	I・I	93
軍使 ―ビルマ戦線―……………	N・S	96

太平洋戦争戦域図 ― 年表――	98		T・A	135
だいじな平和	100			138
兵営生活	101			
ソ満国境について	104			
銃後の和歌、俳句	106			
至烈部隊歌 ― 中支にて――	108			
捕虜の一日	109			
戦争から平和へ！	112			
――私の体験三話と平和感謝合掌の今――	115			
早春譜	115			
外地での体験				
引き揚げ				
忘れ得ぬ日々 ― 私の戦争体験記――	118			
私の生きた戦中戦後	120			
母の体験	123			
赤い夕日の大陸に捧げる鎮魂の詩	126			
遅い春	127			
戦後の苦難体験	129			
ノーマア原爆				
きのこ雲				
原子爆弾投下時、広島、長崎	134			
二度と許すまじ原爆を ― 原爆体験の記ひろしま――	135			
原爆に遭って	138			
原爆被爆者				
二冊の絵本にみる戦争と平和	141			
被爆直後の思い出	144			
詩	146			
平和	147			
核と雑炊	148			
一瞬にして地獄絵 ― 長崎の女学校時代――	151			
長崎での戦争体験記	153			
被爆する	155			
戦争と原子爆弾が私の一生を狂わせた	156			
私自身が感じた平和について	159			
今と違いすぎる私の子供の頃	161			
戦争中の想い出	163			
戦争はやめて下さい	166			
憲法を守り人間を尊重する平和都市宣言（全文）	168			

空襲・疎開

そして終戦

恒久平和の旗の下に

H・Tさん 77歳

摂津市正雀本町

昭和九年春のひと日、大阪第四師団司令部は妙に華やぎ、ざわついていった。それは、この日初めて、建国間もない満州国の青年将校達と日本の娘等の集団見合が開かれたためだった。

亡父は官位とは別に私の妹もその会に連れていった。十六才の妹は何の会合ともわからぬまま、その頃男装の麗人とうたわれた川島芳子の美男振りに圧倒され、余興に新満州国歌を唄ったことのみ印象に残して帰宅した。無論いっさい極秘裡だった。

今にして想えば、その頃からすでに太平洋戦争は台頭の兆しがあつたらしい。同七年、満州国建国以来、柳條溝・蘆溝橋などのいまわしい事件に引き続き国際連盟脱退の後、米・英両国のA

BCラインと称する経済封鎖に日本は喉元をしめられ、わが非の部分を棚上げし戦争に突入した。不拡大方針の隠れ蓑により中国全土の大半に戦域は拡大した。

同十六年十二月八日のハワイ真珠湾奇襲攻撃ですでに後へは引けなくなつた。思い返せば五年前十一年二月二十六日早朝、帝都は一部軍人の反乱のため、大不祥事が起こつた。同日、亡父の従弟H・K君は勇躍入営したのだった。めずらしく大阪の空は雪が舞い万歳の声も凍えた。彼は武漢三鎮攻略にも参加し、終に二十年八月終戦を待たず高千穂落下傘部隊の隊長としてレイテの空に散った。

後日、主人は「月に酌み月に唄ひて征きしまゝ」「十三夜待たで比島の空に散る」の二句を惜別の偲び草とした。昭和十五年は二千六百年記念祝賀に明けた。しかし初秋の頃のノモンハン事

件はウヤムヤにおわり、日本軍の敗色は被うべくもなかった。歳末には玉子の品薄が、静かながら、食糧難の浸透を暗示しているようであつた。

「キンシ騰つて拾五銭……」と記念奉祝歌のパロデーに唄われた如く、煙草を筆頭に食料、日用品等々が高騰して不足勝ちが普通となり、需要と供給のバランスが保てなくなつた。翌々十七年、三女は国民学校と呼び名の変つた味舌小の新一年生となり、梅干弁当に空腹を辛抱し、大根引き抜き唄というのを教わつたと自慢気に話すので歌わすと「この一線命の限り引き抜かん」とのこと。よく吟味すれば「この一戦、命の限り生き抜かん」だったので大笑いした。

中国戦線は大本営発表によると連戦連勝で、梅香る頃にはシンガポールも陥落し「昭南」と命名された。しかしこの辺で戦史の塗り替えが現われ始め、

ソロモン諸島などでは日増しに苦戦の色が濃くなってきた。かつて歌会初めの「海」という御題の年に、「ソロモンに続くこの海風なぎわたる鷗となりて還れ弟」という歌が入選した。弟を偲び、海辺に待つ姉の心情を余す所なく詠み得て絶妙だった。

さて十八年四月十八日の正午前、急に「火事！」と呼ぶ声がした。表へ出ると二軒西南隣りの洋服仕立業の家から防空訓練で馴れてはいるが、本物の白煙が噴きだしている。聞けばアイロンを差し込んだまま配給物を取りに行つての留守中出火だった。胆を冷したが大事に至らず消し止め得た。

その頃配給制が徹底して食品、衣料品、鍋釜の類から文房具まで国民の生活は配給制に縛られ、それらを求めるための行列は大変な時間の空費であった。同年五月末のある日、私達は大いなる悲報を信じねばならなかった。彼

の山本五十六大将が南方の空に散華されたと報ぜられたから。「海行かば」の調べがこの時ほど胸に迫ったことはなかった。国葬の後もなぜか戦果は陸海空とも低調で、弔い合戦の合言葉は空振りのように思えた。それでも勝利を願いつつ迎えた翌々二十年の正月は、配給の鮭すめひと切れと清酒一合と闇買いの鰯で、灯管制下の淋しいながら感謝の新春を祝った。姉は寒さしのぎに父の古いズボン下を穿き、靴まで男物のお古を利用したチャップリンのような姿に私は顔をそむけて涙した。姉弟妹四人が戦勝祈願に天満宮へ参拝に行つた留守に、主人といよいよ防空壕を作る具体的な話合いをした。

私が四日に山田へ青竹を貰いに親戚へ行き、五日に茨木の北部へ、寒天造りが中止になっているのでその簀+をわけて頂きに行く事に一決した。先方への話し合いは主人がつけて、私は供の

人と二人連れで寒風もものかわ勝つ為にはとの決心固く、大八車の後押しをして簀+二十枚を無事運び帰宅したのは、夜中の十二時近かった。竹は山田の親戚より届けて下さっていた。

壕は掘手一人を雇って一日で完成した。簀を敷き天井も簀で、青竹の柱は清楚で、思ったより広く、早速家財道具を運び入れた。旬日を経ずして大阪の空心町が大空襲を受けたことを知った。憶い起こせば運命の三月十四日、大阪地方の大爆撃でこの壕は表通りで地の利を得、薫英の女学生、通行人等随分大勢の方のお役に立った。その夜はこの世の最後のようにおもえて、隣りのお婆さんがとっておきの白砂糖を薬包紙ひと匙さじずつ分けて下さった。幸い夜明近く、都島方面の異様なまでの真つ赤な空を眺めつつ、我々の無事安泰を確かめ合った時は、掌を握り合って神仏に感謝した。

晩春、初夏と過ぎ、魔の八月となり、子供達の学校は勤労奉仕で夏休みを返上、毎日空腹を抱え高槻の湯浅工場やその他の工場へ通った。暑い烈日も肉弾戦の勇士を偲び苦にならぬ折柄、六日午前八時過ぎた広島に新爆弾が投下された事実を知った。我々経験の焼夷爆弾などおよばぬ恐ろしい威力の爆弾なることも聞いた。続いて九日に長崎もその洗礼を受けたとわかり、同時にそれが原子爆弾であったこと、その放射能汚染の恐ろしさは前代未聞であることも知り得た。両市の惨状も現地報告で追々鮮明となり、硫黄島・沖縄も血涙を呑んでの玉砕！遂に本土決戦の覚悟をきめた八月十五日正午、玉音放送を拝聴するようとの回覧あり、破損のひどいラジオを叩きつつ体中を耳にして聞き取ったときは悲しかった。しかしその夜からの明るい灯下での団欒^{だんらん}を思うとホッとしたことも確かであった。

あの日から四十年、陛下の終戦の詔勅は忘れることはできぬ。戦後種々の苦難に行く手を遮ぎられつつも、総ての敗戦処理を成しとげ、高度成長期を経て世界の経済国、平和実践国を誇り得るよう務めつつある平和裡の現代となれたが、軽兆浮薄が拝金主義と共に国民精神の底流をなすことが嘆かわしい。

かつて厚木飛行場に降り立ったマッカーサー元帥は、食糧の即時配給等の善政をしいた反面、3S政策により日本人の弱体化を図って見事成功した。いま目覚めねば遅い。目前に二十世紀が迫っている。全世界人類は飢餓を助け合い、皆、平等に恒久平和の旗の下に集うことを誓おう。

私の戦争体験

―平和を祈って―

A・Yさん 当時 64歳

摂津市千里丘

私が千里丘の駅へ始めて降り立ったのは、戦争もますます厳しく、末期に近い、昭和二十年二月の寒い朝でした。それまでは、大阪市内に住んでいたのですが、疎開で、一才半の長男を背に、親子共に綿入れの防空頭巾を被り、私はモンペに下駄履きでした。そんな姿を、今の若い方にはとても想像できないと思います。

それから二ヶ月後の四月十四日、私の夫は三回目の召集令状を受け取ったのです。そして翌十五日には、大阪中部二部隊に入隊、五日後には戦地へと出発したのです。

「〇〇日大阪駅より出発らしい」との事を耳にした私は、その日朝早くか

ら駅前に立ち、長時間待つてようやく隊列の中の夫を見たのはほんの一瞬でした。「これが、今生の別離か」と覚悟して。泣き叫ぶ幼児を背に、夢中で見送った悲しい思い出。

現在の国鉄大阪駅の東、阪急との間のガード下を、南北封鎖して、その中へ出征兵をいっぱい集めて、順次、列車で運んだのです。

その頃、軍隊でも物資が不足していたらしく、歩兵ですのに銃も持たず、水筒も竹筒で、竹行李たけごうりの弁当箱を背に斜に掛けて、勿論、背のうも持たない有様でした。

その兵士達を列車で西へ送り、玄海灘を三隻の輸送船で朝鮮（今の韓国）へ渡ったらしいのですが、夫の乗った真ん中の船だけが無事で、前後の二隻の船は魚雷に触れて沈没、兵士達は戦場へ出る事もなく、玄海の藻屑と消えてしまったらしいのです。

その後、国内でも空襲が激しくなり、三月の大阪、神戸の空襲に被災せず残った処も、日毎夜毎の来襲で、京都、奈良以外の都市はほとんど焼き尽くされ、千里丘でも六月頃からは、警報の度に頭上を通過する敵機が多くなり、恐ろしい毎日でした。激しい日は、一日にB 29と小型艦載機と合せて、六百五十機も来襲した事もありました。

その音だけでも、列車の通過する鉄橋の真下にいるような轟音ごうおんでした。機銃掃射の弾丸が屋根を通して、押入れの上段に積んだ布団を数枚貫いて止まっていた時もありました。今の坪井のガード下へ、苳むしろと布団を持って、子供と一緒に避難をした日もありました。

その頃は、食糧の配給もほとんど無くて、たまに小さなじゃが芋数個とか、大豆、さつま芋のつるまでが配給の食料品でした。幼児を連れ、私の胎内には長女が宿っていましたので、買出し

に行くこともできず、軒先で作った南瓜や、大豆、野草等を入れた、しゃぶしゃぶの雑炊で、やつと命をつないでいる状態でした。そんなでは、乳離れして間のない二才足らずの幼児には、不消化で無理な食べ物でした。毎日下痢がつづき、次第に痩せ細ってしまい、大阪にいた頃、生後六ヶ月には、健康優良児として表彰された子が、見る影もない程に弱っていました。高槻の医大病院へ通院し、なんとか死なせずに済みましたが、今思えば栄養失調であつたのです。

八月十五日、終戦の日の正午、詔勅のラジオの放送は病院よりの帰途、国鉄高槻駅のホームで聞きました。トギレ／＼で、その意味も充分にはわかりませんでしたが、「忍び難きを忍び」とか「時局を收拾せん」との言葉が、今も耳に奥深く残っています。

その時私は、これから先「国民の生活はどうなるのか」との気持と、戦地の人達のこと等、色々の思いが頭の中を駆けめぐり、身体中の力が一度に抜けて、打ちのめされたような虚脱感に襲われ、そのままホームの床へ、へな／＼と座り込んでしまいました。

ホームに居合せた人も、皆、言葉もなくただ呆然として黙っていました。沈黙の数分間が私にはとても長かった気がします。

それから、どこをどうして家に帰ったのやら覚えてはいません。おそらく、夢遊病者のようであつたと思います。その夜は、綿のように眠った事だけは覚えています。（警報で夜中に起こされる事がなかったのだ）

終戦のその日以後はまたヤミ屋によって物価は日々高騰し、はげしいインフレとなり、庶民の生活は苦しくなり、法

に従って、ヤミ物資を拒否すれば、餓死するよりすべのない日が来るのです。

「赤いリンゴにくちびる寄せて」とリンゴの唄が流行しましたが、その時のリンゴ一個のヤミ値が、現在のお金で約二、五〇〇円か、三、〇〇〇円位したと思います。

戦地の夫は無事帰還しましたが、戦地で落馬した時の傷が痛む時もあると申します。義弟は昭和十八年五月、アツツ島で、二十五才の若さで玉碎戦死しました。

「戦争なんて大嫌い」声を大にして叫びたい。しかし軍国主義のその頃は、私達は、言論・出版・集会・結社の自由を奪われ、大君と神のように教えこまれた天皇の名のもとに、戦争に引き込まれ、好むと好まざるにかかわらず、男子は一枚の赤紙で動員、忠君の誓いをたたきこまれ、侵略に加担してきたことの責任を痛感いたします。

戦後四十年、悲惨な過去の記憶も風化し、また戦争を知らない若い人達の多くなった今日、非核三原則も空念仏の如く、このままでは、人の手で作った核によって、人類皆殺しの恐れを感じ、子孫のために、われわれの戦争体験を語り伝えたく、拙い筆を取りました。限られた紙面では、まだ書き足りませんが、またの機会があればと思います。

現在の私達は、平和で、自由で、あり余る食物を飽食し、沢山の物資に囲まれての生活をしていますが、これだよいのでしょうか。

中国に残留された人達の肉親探しや、今も原爆の後遺症で苦しんでおられる方達には、まだ戦争は終わっていないと思います。

また、戦地や原爆等、戦争のために犠牲になられた多くの方々のご冥福を祈り、二度と悲惨な戦争を起こさぬよ

うに誓って、私達の町のように皆で力を合せて世界の平和を守りたいと思います。

空襲警報発令

Y・Tさん 当時43歳

摂津市別府

戦後の食糧難の時代もそろそろ終わりに近い昭和二十七八年頃の暖かい春の日の午後、私が兵庫県栗郡山崎町に住んでいたときのこと、私は隣の家に住む同級生のチトちゃんと菜の花を摘んでママゴト遊びをしていた。

近所の家の軒下にはお布団や洗濯物が干してある。でもわが家には家族が毎日使っている布団以外は見当らない。おかしいな、私が幼稚園に行っていた頃、私の好きだったお布団があったはずなのに、どうしたかなとふと思いついた。

縁側でつくろい物をしている母に向かって、私は「お母ちゃん、家にあっただお客様用のお布団どうしたん？」私の問いに仕事の手も休めずに、母は「あんたらが皆んな食べたんや」「え

え？お母ちゃん、お布団やで、お布団なんか食べられへんのに、裏が水色で表には紫や桃色の花が付いていたでしょう」「そおやね、あのお布団はみんなお米やイモや野菜に交換して食べたんや」「お布団だけやないで、大きなべや、オカマもお母ちゃんの着物や帯も、それに掛軸から花瓶もやで。子供らは皆ええ歯してるわ」と言いつて仕事の手を休めた。

「しつかり食べて早く大きくなっておくれ」と母はにこにこしながら言った。「子供らだけには、ひもじい思いさせられん。育ち盛りの子供に、ひもじい思いさせると心まで貧乏になったら取り返し出来んからな」

こんな話を聞いたのは今から三十年以上も昔の事だ。私は昭和十六年の開戦の数カ月前にこの世に生を受けている。終戦間近い二十年には四才で、人

間一生の内が一番に知恵を吸収する時期でもあった。

「空襲警報発令」「空襲警報発令」

とメガホンの声に、生まれて三ヵ月程の弟をおんぶした母は、私に防空頭巾と小さなリュックサック(母の帯芯で作った物)を持たせる。姉には何が入っているのか知らないが、何時も大切にしている袋を持たせ、「お母ちゃんから離れたらあかんで」と口ぐせのように言っていた母。どこに行つたのかまったく記憶にない。でも母に手を引かれ、家の外に出ると南の空が明るい事があった。「それは姫路がB 29の落とした爆弾で火事なんだ。山崎にもB 29が来たら大変な事になる」と、小学校六年生の兄が美しい夕焼けのような南の空を見て説明してくれた。その頃の事を一つだけはっきりと覚えていて。六月の終わり頃の黄昏れ時「空襲警報発令」が出て何時ものよう

にどこかに行った。しばらくしてなに事もなく解除になって帰って来ると、家の奥の台所の方で誰もいないはずなのにゴトゴトと音がしている。人影を感じたのか、兄は素早く裏口の方に外から廻った。そして母が表から奥に入ると、裏口へ逃げ出した人があった。一足早く裏に廻った兄は「ドロボォー」と大声を出した。その人は兄につかまった。足に包帯を巻いた十二、十三才の男の子が台所のオクドさんに置いてあるなべの雑炊を食べていたらしい。家族の夕食にと母が作った物で、少しのお米にサツマイモの茎や野菜の入った雑炊を半分以上食べていたのである。母は近所では見かけないその子に「どうしてこんなことをしたのか」と訳を聞いたら、その子は「ごめんなさい」と泣き出した。そして「お母さんが空襲で亡くなり、自分もケガをして病院へ行つての帰り道で、昨日から何も食

べていないので悪いと思ったが、誰もいない家に入ったら台所で食べる物を見つけ、これを食べたら死んでもええわと思い雑炊を食べた」と言った。その子を叱らなかつたお母ちゃんは、まだナベに残っている雑炊を茶碗に入れてやり、「ゆっくりおあがり」と言つて食べさせた。お腹の空いている私達はただ見ていた。その子の帰って行く後姿を見送ると、現実にかえつたように「夕食はない」。お蔭で私達の夕食は、ジャガイモを湯がきつぶして型を作り、梅干しの汁で味付けをしたジャガイモダンゴが夕食となった。あの時の味が昨日のように思い出されるのが何とも不思議である。だが私はあの男の子を憎むことはない。

いまの日本は物質的には豊かすぎる程である。だが人の心は飢えてはいないだろうか。人間にとって何が幸福な

のか、四十才を過ぎた今、私は自分にもう一度問いかけている。

戦争の思い出

K・Hさん 79歳

摂津市鳥飼八町

戦時中拍子木打ちて地下中を

火の用心と廻りし夜も

戦時中食糧不足に粉食や

粥食のみに過ごせし日の事

門前の川を舟にて幾かよい

甘藷作りし遠き思い出

亡弟と休閑地なるかの池に

米作りせし遠き日のこと

終戦の句集出して一人よむ

余寒厳しき亡弟の日に

柿剥けば又思い出ず戦時中

休閑地にて分けし味わい

一区二区と徒歩にて堤を通よいて

かの畑に麦刈りし日も

新幹線の用地となりぬ鴨の沼と

句作せし日の遠き思い出

私の戦争体験

S・Sさん 52歳

摂津市昭和園

昭和十五年四月、尋常小学校に入学した私は、昭和十六年の太平洋戦争勃発によって、いやおうなしに国民学校（小学校の名が改名された）の生徒となりました。六年生のとき終戦。それからは、歴史や修身の教科書のあちこちを墨で塗りつぶす（戦争中良いとされたことが戦後は悪いということになった）日が続いて、昭和二十一年三月終戦後のどさくさの中で、修学旅行も、卒業の記念写真も無く卒業しました。戦争中の学校制度が無くなり、昭和二十一年四月、自分の志望する旧制の女学校に入学したのも束の間、またまた制度が改正となり、本人の意向に関係なく、学区制によって強制的に決められた学校へ転校させられ、最初に志望

した学校と全然違う新制高校を卒業しました。

ふり返って見ると、私の学校生活は、戦争、終戦ということ、くるくると学校制度が変わるままだに、波にただよふ木の葉のように、あちらこちらと振り廻わされて、落着いた雰囲気などは全然無いままに終わってしまった感じで、いつも心に何かわだかまりを残しています。

しかし戦争中、そして終戦後は学校の事などは二の次で、その当時の食糧難は子供であった私にも、いまだに骨身にしみている感じです。

その頃父は鐘紡の病院医で京都の山科の社宅に住んでいましたが、社宅の前の広い公園は、いつしか畑に様変わりし、さつまいも、馬鈴薯^{しよ}は勿論のこと、食べられる物は何でも、庭にもかぼちゃ棚を作って食糧難に對していました。人の心もトゲトゲしくなり「いも」を

盗んだとか、盗まれたとかのトラブルもあって、子供の耳にもそれが聞こえてきました。最近「いもづる」を食べる催し等があつて、「おいしい」との評があると思いますが、あの頃は、油もなく、醤油もなく、砂糖もなくのないづくしで、その中の「いもづる」は決しておいしい物ではありませんでした。

そのうち、東京から姉一家が疎開して来て、我が家は、食べる口は二倍に、食糧はどんどん乏しくなっていくという有様で、その頃の母は皆に食べさせるために大変だったろうと思います。ある日の夕方だったと思います。大人達が「明日食べる食糧をどうしようか」と深刻に話し合っているのを小耳にはさんだ私は、たまらなく悲しくなりポロポロ涙が出て止まらなくなり、母をびっくりさせたこともありました。筍^{たけのこ}も旬の頃にちよつと食べるのはおいし

いものですが、主食として毎日毎日食べさせられると、かなり辛いものです。

私は大人になってからも、しばらくは筍アレルギーで、筍の匂いがいやでした。どんな物でも、母はいろいろ工夫して食べ易くしてくれましたが「ドングリの粉」が配給になった時には、さすがの母も困ったらしく、私も手伝って、すり鉢ですったり、丸めて焼いたりしましたが、手間ばかりかかってまずく、お腹が空いているのに多くは食べられませんでした。

姉婿はこの頃結核を患い、栄養が第一という病気なのに充分栄養が摂れず、父が医師であつたにも拘わらず終戦を待たず命を落としました。

終戦後も食糧難はつづきましたが、進駐軍（アメリカ軍を終戦直後はこう呼びました）からの真白い小麦粉が配給され、その粉で母が作ってくれた「蒸しパン」は、それはそれはおいし

いもので、学校から帰ってきてこの「蒸しパン」を見ると飛び上がるほどうれしかったものです。今でもその時の味が忘れられず、店に売っている「蒸しパン」を買って食べてみても、あの時のおいしさにはおよぶくもありません。

ひもじい思いの毎日でしたが、空襲も受けず、両親も揃って戦中・戦後を過ごす事のできた私は幸せでした。

私の主人は私より少し年上ですが、奈良の海軍経理学校在学中、神戸の大空襲で母さんを失い、お姉さんも大変な火傷を負われました。十六歳の多感な年頃で母親を突然亡くした気持はどんなだったろうかと思います。家を焼かれ、母を失い、火傷した姉を抱えてのその後の主人一家の苦労は大変だったようです。主人と結婚してそろそろ三十年近くになりますが、当時のことについては一番親しい私にできえ、

ときどきポツリ、ポツリと話すだけで、多くは語りません。

私のように、お腹がいつも空いていた、着る物、履く物がなかった、というような体験は年月と共に風化していくものですが、主人のように、全財産を失い、肉親を亡くした人達の心の傷は深く、いくら年月がたつても、なかなか癒やされるものではないのでしょうか。

私の叔母も満州から引揚げ、やっと内地の土を踏んだのに心身共に疲れ果て、乳のみ児と五人の子供を残して亡くなりました。姉の嫁ぎ先の義兄は、外地からの引き揚げ直前に、家族から一人引き離されて銃殺されたらしい……と聞きました。

戦争のために、私の周囲の人びとより、もっともつと辛い、悲しい運命に無念の想いをされた人々は数限りなくあるのではないのでしょうか。いま、テレビで中国残留孤児の方々の事が報道

されていますが、それを見るたびに「戦争さえなかったら……」「戦争さえなかったら……」という声にならない声で何万人、何千万人の人々が、幾度も、幾度も、つぶやかれたのではないかと思うのです。

また私は、障害を持った息子の母親ですが、戦争中のように、人間の価値を「役に立つか、立たないか」で判断するような世の中にだけは、なって欲しくない、そんな事がないようにと、念じております。

暗闇とまっ赤な空と

H・Kさん 45歳

摂津市鳥飼上

私は小さい頃、大阪市旭区に住んでいました。

おぼえている空襲の思い出にしても、カワラの落ちる音を聞いた時と、広場に逃げてまっ赤な空を見た時とがいたい同じ日なのか、別の日なのか、はっきりしません。

ただ、隣組のおじさんが死んだ時は、声をきいたすぐその後のことだったので、大変なショックを受けたことはおぼえています。

時期としては、多分昭和二十年五月頃、私が六才の時のことですので、はっきり書くことができず、頭の中に残っていることだけを、ただ文章として書いてみました。

ある夜のことです。

サイレンの音がはげしく鳴り響き、「空襲警報発令！」

という声と共にバタバタと人の走る足音がしました。

私は暗闇の中で目をさしました。

（早く防空壕へ行かなければ……）と思った私は、母を呼びましたが、シーンとした中に自分の声だけがはね返ってくるばかりです。

（早く電灯をつけよう）と、いつも電灯をつけるときに使う踏み台を手さぐりでさがしました。

すこし這って前に進むと頭をゴツンと壁にぶつけました。

右へ行っても、左へ行ってもすぐにゴツンと壁にぶつかります。

私はとうとう大声で泣きました。

その泣き声がすぐにはね返ってきこえた時、私がもう防空壕の中に居たんだということに気がつきました。

夜中にサイレンが鳴り、ぐっすり眠っ

ていた私は母に抱かれ、防空壕に移されていたのです。

そして母は弟を連れに家に引き返していました。ほんの少しの間の出来事だったのですが、私にとっては、暗闇の中でたった一人、自分の声だけしかきこえなかったこわいこわい経験でした。

そんなことがあった後も、サイレンが鳴るたびに、防空壕と家を何度も往復しました。

サイレンの音におびえながらいつものように防空壕に入って小さくなっていた時、突然バリバリと物のこわれる大きな音がしました。ドスン、ドシン、大きな地ひびきと一緒に防空壕の上にガラガラとカワラがころがり落ちてきました。

隣組の班長をしているおじさんが、「防空壕に入っているとあぶないぞ！ 焼夷弾が落ちたら、むし焼きになって

しまうから、早く出て安全なところへ逃げろ！」といって走っています。

飛行機の飛ぶ音、バリバリという音が続く中で私たちは防空壕の中で抱き合い、じつとふるえていました。

防空壕の戸をたたく音がしたので母が様子を見にいくと、近くに住んでいたおじいさん、おばあさん、おばさんたちが、

「家も防空壕もつぶれたので逃げてきた」と、みんなドロまみれになっていました。そこで防空壕にいては、あぶないので広い空地にみんなで逃げました。

草ボーボーの空地に国防色のシートをかぶってジーっとしているのです。

ゴーゴーと飛んでいる戦闘機の爆音、爆弾の落ちた時のドシンドシンという大きな地ひびき……、私は弟としっかり抱き合って、ブルブルふるえながら、シートをそつと持ち上げて外を見ました。

夕方でもないのに、空がまっ赤に焼けているのです。

たくさんの方が炎につつまれてメラメラと燃えています。

（当時、三才だった弟も、戦争の記憶として「まっ赤な空」は忘れていないといっています）

そして、しばらくすると黒い雨がザーザー降りました。

私達の家は、幸い焼けはしませんでした。天井は穴だらけ、雨もりがすごかったのを覚えています。

「防空壕の中はあぶないから逃げろ！」と私たちに知らせて走りまわっていた隣組のおじいさんが、材木工場（爆弾が落ちて何もかも吹きとばされ、広っぱのようになっています）のまん中におれて死んでいました。

そばに爆弾の落ちた跡の大きな穴がポツカリ口をあけていたのが印象的です。また、戦争は私の遊び友達をなく

しました。

姉は石川県のお寺に学童疎開しました。

仲良しのシズエちゃん、コウちゃん一家は北海道へ……近所の人達もどんな田舎へ疎開して行きました。

そして、その頃仲良くしていた鉄工所の一家は空襲の時、オート三輪で広場に逃げましたが、爆弾を落され土に埋もれてしまいました。

広場には大きな穴だけが残り、遺体も見つからなかったそうです。

戦争体験より学んだこと

G・Mさん 45歳

摂津市学園町

「憲法を守り人間を尊重する平和宣言都市摂津市」いま平和であればこそ、この体験記を後世に知らせることが我らの使命であり、語りべとして伝えていくべきだと思います。

戦争と平和、この文字は故周恩来総理は、ケンカの後には仲良しになるといわれたことがあります。アメリカと日本もそうです。子供の世界でも兄弟ゲンカといわれるように、仲がいいからケンカをするようでもあります。ケンカは、強い者が決まるまではつづくようです。また、チョコチョコでもケンカが多いようです。このケンカの大きいのが戦争と変わっていくように思います。

私は昭和十五年一月六日生まれで、

満五才位の思い出であります。当時はお母さんにつれられて、よくおしっこに行つたあとに、立つたままで東の空の空襲の状況を、映画のように見たものでした。飛行機の爆音が、いまでも小さな胸に鮮明に焼きついています。また、近くに飛行機が頭からつつこんだ現場も多く見ました。飛行機の接触事故もよくありました。いま考えても身体中がカーツと燃えてくるように、子供心に大変な刺激が強く、寝ても、母と兄と、おじいさん、おばあさんで、家の中は真つ暗の、本当に三日位は同じ夢にうなされていました。私の実家は農家でありましたが、米は全部とられて、麦ごはんなどいい方でした。あわのごはんやイモごはん、イモガユなど食べ物には農家で作っている物で金をかけないで自給自足でした。

昔と同じく、山にいつてはタキギをとって来たりして、お風呂やおくどさ

んをたいていました。また、鳥や獲物をとるためにワナをかけてはうさぎや小鳥をとったり、たぬきやキジなどもとってたべさせてもらいました。にわとりや卵はご馳走でした。山のある生活で狩りをしては食べさせてもらいました。川で魚をとってもらったのもいい味でしたので楽しく思い出されます。山のわらびやぜんまいやまつたけをはじめ、いろんな種類の「たけ」を食べさせてもらっていました。しかし、いつも空腹でありました。私は小学校に行く前には、元気になってましたが、生まれたときにはお乳が少なく栄養失調でして、黒砂糖の配給で死なずに助かったようです。

また小学校に入る頃には昭和二十一年でしたが、メンぐち、ビーロン、くぎねんぼ、コマまわし、S字遊び、なわとび、輪まわし、おにごっこ、竹馬（雪足し）、竹トンボ、おしくらまんじゆ

う、きもだめし、カンけりで遊び、それに上級生が下級生をつかまえて、ケンカをよくやらされました。すもうなど金のかからん身体で覚えさせられる遊びが多くありました。村の祭りにしても、田畑でできたものが賞品になっていました。そんなときだから木の実、柿やいちじくやミカンや栗などがよく盗難にあっていました。

草でもたべられるものは、田舎ではしんとう、すかんぽ、ギシギシなどいろんな呼び方がありますが、塩をつけて、胃やけや胸やけ止めの薬としていました。梅なんかは少し早い位にたべて、疫痢^{えきり}になって死んだ子供もありました。食べ物といったら進駐軍のジープを追いまわしながら、カンヰメをもった外人さんにサンキュウ・ベルマツチ、グッド・モーニングなんかいってカンヰメの中味をもらって食べたことがあります。中からカタパンやコーヒー

やシュガーやなんかがでてきて外人さんもやさしい人がおりました。

やはり、盆と正月の思い出はお頭つきのイワシが良かったし、米のごはんがあつたときが一番うれしかったです。それとおじいさんが仲人をやったら、かけん魚といって、大きなブリが家の中にぶらさがっておりまして。それを少しづつ切って、おしょうゆに、にくにくの葉っぱをつけて白い米のごはんにかけてくれたときのうれしさは忘れることができません。

以上は戦争後の思い出にもなったようですが、戦争によって発生する人の心のすさみはどうすることもできないと思います。人が人を殺し合う、こんな悲惨な戦争だけは絶対にあつてはならないし、起こさせてもなりません。日本は世界の中の唯一の被爆国として、今後は核の問題に対しても、世界のどここの国からも第三番目の核を、地球上

のどこにも落させてはなりません。

人類願望の平和を考えながら、いま私は摂津市の被爆者の会といっしょになつて被爆者の健康増進と福祉の向上につとめています。

被爆者の会が年とともに風化していく中で北摂から大阪府へと平和の鐘を、そしてさらに世界へと広げていく。その使命を深く感じ、その礎となっていく覚悟であります。

家屋疎開と父の死

O・Sさん 59歳

摂津市東正雀

戦争、という文字を見たり、言葉を聞いたりすると、私の頭には、恐かったこと、辛かったこと、悲しかったことがつぎつぎと浮んできますが、しかし、年と共にその記憶も薄れてきます。

当時、私達四人姉妹は両親と大阪市北区に住んでいました。戦争が激しくなり、家の近くに大阪駅とダイハツの軍需工場があるという理由から、五日間による強制家屋疎開の通知があり、立ち退く事になりました。どのようにして父が探して来たか分かりませんが、一家は住吉へ疎開することになりました。運送の車などなく女ばかりで、父も大変だったと思います。大八車に家財を積み、私達は父の後押しをして出発しました。

梅田から御堂筋を難波、そして堺の方へ、日頃、「女の子ばかりでお国の役に立てない」と嘆いていた父は、これもお国のためと車を引いていましたが、とても辛かった一日でした。でも、その晩の星空がとても綺麗だったのを覚えています。きっと下界の愚かな戦争を悲しんでおられたのでは……。

父は疎開して間もなく、腎臓病にかかり寝込むようになりました。顔や手足がむくんできました。戦時中のことです。母は、食事、安静等十分できませんでした。母は、腎臓病には西瓜が良いと聞き、農家へ着物と交換に、西瓜を求めて出かけました。帰途、何度も空襲警報にあい、防空壕に避難、お米はなくなりましたが、西瓜だけは死んでも離さない、と持ち帰りました。父が美味しそうに食べるのを見ていて、母が泣き、私達も泣きました。しかし、父は回復せず、昭和二十年八月、終戦を聞き、

もう壕へは入らなくても良いんだな、とホッとしたのか、敗戦から二週間後の八月末に亡くなりました。病気の父にとって、防空壕への避難は苦痛だったらしく、「もう畳の上で死んでも良いから」と嫌がっておりました。

父の死、それからが大変でした。日本中が敗戦で混乱していて、お葬式がなかなか出せなかったのです。焼場へ行っても燃料が無いので、「誰かもうお一人なくなったら車を出します」との返事。考えられない霊柩車の相乗りなのです。「仏様を焼く薪割りもして下さい。もしできないのでしたら、薪割りをして貰う人のお金を払って下さい」とのこと、女ばかりでとても困りました。真夏のことですから仏様も放っておけません。頼んで頼んでやっとう亡父一人の車を廻して貰い、薪割りもお金を出しました。ドライアイスなど勿論なく、仏様は四日も五日もその

ままだったので、お棺に納めた後、ふとんを通して畳まで汚れていました。いま考えても亡父の最後が哀れでなりません。

私は平和の尊さを、なくなった人達と共に訴えていきたい。

葬儀場には、赤ちゃんや子供さんはミカン箱などに納められ、自転車やリヤカーで運んで来られた方もあり、遺族は泣くことより、お葬式を出せるか、どうかのことで走り廻っておられたのだと思います。

戦争で多くの人びとの尊い生命が奪われましたが、海軍軍人だった叔父、それに級友もそのなかの一人です。私は、病死とはいえ、亡父も戦争の犠牲者だと思っています。苦勞した母もなくなりました。「戦争さえなかったら、お父さんはもつと長生きできたはず、戦争がお父さんの命を縮めた」といつも嘆いていた母。母の心には、あの時の西瓜を食べていた亡父が、焼きついていたのではないでしょうか。

平和について

B・Mさん 30歳

摂津市鳥飼西

手を取り合って、平和を謳歌できる

そんな真の平和が一日も早く来ることを

望みたい

マスクを通して、親に聞いて、或いは

映画でしか、

戦争の悲惨さを知らない我ら世代よ

明日の希望を奪い、生きる望みさえも見

失った父母の呻きを

耳にするたび、私は戦争を憎み、平和で

あることの尊さを噛みしめたい

人類がお互い嘘み合うことなく、互いに

戦争体験

I・Aさん 60歳

摂津市南別府町

昭和二十年六月一日大阪大空襲のあった日、私は大阪市港区の某軍需工場で女子挺身隊として働いておりました。

当時は一億総動員で青年男子は勿論のこと、婦女子も旧制中学生も女学生までも学徒動員され「撃ちてしやまん」「欲しがりません勝つまでは」と今で言う、スローガンのもとに、連日の空襲や食糧不足にもめげず、お国のため一生懸命銃後を守っておりました。さて、六月一日午前九時警戒警報が発令され、サイレンがまだ鳴りやまぬうちに、もう空にはあの重苦しいB 29の引きずるような爆音が唸っています。

「偵察機かなあ」と言いながら課長が社外に出て行くと、二、三人の営業部の人が後につづいたので私も毎夜苦

しめるB 29を一目見ようと外に出て見ると、一機又一機がキラキラ美しく、青空に輝きながら頭上に差しかかってきます。誰かが「あれは高度七、八千米位かなあ」「いや、一万米はあるで」と口ぐちに見とれていると、突如「空襲警報」のサイレンが鳴り響き「待避せよ」の命令「待避」!!「待避」!!と、いままで見とれていた者達は慌てふためいて分散しました。私も素早く女子防空壕へと走りました。早や壕内には防空頭巾を真深かに被り小さく身を寄せあつて、ほとんどの人が待避していました。外は慌ただしく異状な空気がヒシヒシとせまり、何か大声で叫んでいる様子でした。

やがてものすごい爆音と共に、この地球がひっくり返ったのかと思えるほどの大音響、ドードードードンと地鳴りがすると同時にものすごい砂塵が

壕内にザーザツと吹き込み入口の戸がバババンとふっ飛びました。

「お母ちゃん!!お母ちゃん!!」「助けて!!」皆が口々に騒ぎ出しました。

「静かに、静かに」「落ついて、落ついて」となだめる者やそれはそれは大へんなものでした。

その時、警防団員が慌ただしく、入口で「みんなここは危い、隣の壕までもう燃えてるぞ!!」「早く、ここを出ろ」の叫び声に一瞬みんな我に返りつぎつぎに壕を飛び出し、運河に繋がれていた石炭船に飛び乗りました。私も乗ろうとすると「もう危い、これ以上乗ると船が転覆するぞ!」の大声に仕方なく、川べり伝いに走りに走りました。船に乗らなかつた者、乗り切れなかつた人びとは一生懸命火の海を逃れようと群をなして逃げ惑いました。

あの青空は真暗闇となり、爆音と爆弾の破裂するバンバンの金属音に泣き

叫ぶ声が入混って、さながら戦争映画そのものでした。ああ、これが戦争というものか、いつ上陸してくるかも知れぬとみんな覚悟だけはしていたけれど、実際にこんな恐ろしい目に遭遇し、初めて戦争の恐ろしさ、こわさをしみじみと体験した瞬間でした。後日分かったことですが船に乗った者は全員焼夷弾の直撃を受け、あたら若い命を無残にも犠牲になったとのこと、死の寸前まで同じ壕にいた同僚やご両親に対し、何ともいたたまれぬ思いで胸かきむしられ悔悟の念にかられるのです。「ああ、もうこれ以上逃げることはできない」前は海、どす黒い異様な匂いがただよった海水が牙をむけていました。

どこから集まってきたのか大勢の避難者が真っ黒な煤^{すす}けた顔で目だけギョロギョロさせていたことをはっきりと憶えています。あの恐ろしい、地獄の火の海をくぐりぬけてきたのでしょうか。

幼児や学童は大半疎開していたので子供の姿はあまり見られませんでした。中には母親に背負われた赤ん坊、手を繋がれた子なども見ました。なん時経ったでしょうか、ようやく空襲警報、つづいて警戒警報が解除され張りつめていた緊張が解けると、皆へタへタとその場に坐り込んでしまった。誰かが後の方で「これで大阪も全滅や」と言う声に振りむくと、今まで立ち並んでいた工場や民家が跡形もなく一望に見渡され、何一つもなく黒煙が上がり、まだブスブスとあちこちで火の手があり、あたりは熱気で地面はムンムンとしており、空襲のはげしさを、まざまざと見せつけられました。

当時、母は弟妹を連れて疎開しており、父と二人で家を守っておりましたが、二、三日前より体調をくずし何も食べていなかった父が、逃げ遅れて焼死したかも知れないと急に心配になり

家の方向へ向かいましたが、何の目標もなくっており、分からぬままに人の歩いていく後についてどんどんと歩きました。両側には真っ黒こげになり、手足が短く縮んでキューピー人形をひっくりかえしたような形の死体、あるいは直撃を受けたのであろうか、母親の傍でゴソゴソはっている赤ん坊の側で、祖父らしい人が泣きくずれている姿をまのあたりに見、思わず目をそむけてしまったことなど、それはそれは筆舌に尽くし難く、四十年経過した今も決して忘れることはできません。夜明け近くになって、父が無事避難していることを人づてに聞き、やっと再会できたのは翌日の夕方近くだったのです。二人は抱き合って無事を確かめ、声を出して父も私もオイオイと泣きましました。父は私を、私は父を探し合いながら、混乱のさ中それは長い一日でした。最近、中国残留孤児が肉親捜しに祖国

を訪れ、運よく再会でき、その喜びを肩を取り合って泣いている様子をテレビで見るとき、とてもいたたまれず、涙が溢れて画面が見えなくなります。たった一日逢うことができなくても、その欲求をおさえることはできません。ましてや四十年もの長い間、これまでお互いに耐えてこられた方がたに対し感無量、なんとお慰めしてよいやらその言葉もありません。これも戦争のためです。

いま振り返って二度と戦争は嫌です。人間と人間との殺し合い、これほど恐ろしくて悲惨なことはありません。もうこのような犠牲者、被害者は出たくありません。私ども世代の者は男子は勿論、女・子供・幼児に至るまでの苦しみに耐えて参りました。戦争を知らない世代が半数に近い時代となった今日でも、戦争の傷跡は完全に消え去ることなく、原爆症でつぎつぎに命を失

い、いまなお苦しんでおられる方々が沢山おられることでもよく分かります。私の拙い一編で戦争の恐ろしさ、痛ましが少しでもお分かり頂けたらと、ペンを取った次第でございます。

空襲の思い出

I・Tさん 66歳

摂津市正雀

私は昭和二十年六月、神戸で被災した。ブーブーフウー、あつ空襲警報だ！警戒警報は約二十分前に出されていたが、まさかここが空襲に遭おうとは思ってもなかった。

早速、防空頭布をかぶるや否やザッツ、ザッツ（焼夷弾の落下間近の音）。

この近くに落ちると思い、早速家の下に防空壕を掘っていたので、父と二人で飛び込み両手で耳をおおってしゃがんでいた。と同時に何か光るものを感じた。ドカーン、ガチャガチャ（焼夷弾が落ちてその振動でガラス障子がこわれた。私の家は薬局を経営していたので表は大きなガラス障子になっていた。）

「ああ、もうだめだ」ふと首を伸ばして裏の方を見ると台所付近に焰ほのおの影が

見えた。やられたと思った。瞬間、表通りで「みんな早う出てこんと死んでしまうぞ」とどなっている兄の声（兄は私の家の向かいで写真館を経営していた。）急に元気が出て父と私はとび出した。そこには兄が立っていた。ふと見ると四つ角の八百屋さんがえんえんと燃えている。そのうちに兄嫁が一人の幼児を肩に背おい一人の幼な子の手を引いてでてきた。あちらからもこちらからも人々が出て来た。道路に造った防空壕から出てくる人もいた。

「どこへ逃げよう」「電車道は広いからよいだろう」「いや電線があつてあぶない」と言っているうちに八百屋さんは焼失した。その間もB 29は頭上をとんでゆく。「敵に見られると機銃掃射をうけるかもわからんぞ」と人びとは口ぐちに叫んでいる。B 29の姿が見えると、みな焼け残りのヒサシの下に身をちぢめ両耳を手でおさえてい

た。ふと見ると私の家も火がついて燃えている。焼け残りの家の軒下に立つてしばらく茫然と見ていたが、私の家ももうおしまいかと思うと、ポトリポトリと大粒の涙が頬を伝う。

しかしそんな感傷に浸っていることはできない。早く逃げなければこどもも燃えてくる。「海岸へ行こう、もう海しか行く所はない」（海岸までは二丁程の距離）「そうだなあ」と言って兄と兄嫁（一人の幼児はおんぶし一人の幼な子の手を引いて）と私と父が横列になって六人が海岸を指して走り出した。しばらく走ると眼前の家が燃えかけている。といって引き返すこともできない。「仕方がない、あの燃えている所でも走って通り抜けねば逃げ場はない」「そうだなあ、できるだけ体を低くして通り抜けよう。そしたら海まで行けるだろう」と言って六人が焰の端を通り抜けて、やっと海岸へ着いた。

もうすでに沢山の人が来ていた。そして後から後からと被災者がやってくる。その間にも B 29 は編隊をなして飛んでゆく。そのたびに砂浜に置かれている漁船の下にもぐりこんだ。「ああ早く解除になってくれるといいのに」と思い、生きた心地はしなかった。やつのことで解除になった。ぞくぞくと海へのがれて来ていた人の山ができた。兄嫁のおんぶされていた児は口の下が少し火傷していた。

「もう若宮町は全滅や（若宮町はこの市電で三つ位西方の所）。一軒も残っていない。ここまで来るのがやっとだった。防空壕の中でも沢山死んでいた」と言っただけ切った様子だった。また他の人は「腕をやられた」と言っただけ流している人、またモンペの布がボロボロに穴があき「足をやけどした」と言う人などさまざまだった。

私達はお蔭でまあ無事に避難できたと思った。

しかし今からどうすればいいのだ。帰る家は焼土と化し食糧はごく僅かで、貴重品カバンに入っているだけだ。みんな不安と恐怖のいりまじった顔でいっぱいだ。そのうちに叔父（母の弟だが母はすでに早く病没し、叔父は空襲がはげしくなる二年程前に病没している）で一人暮らしだった）が「うわさを聞いてかけつけて来たがやはり家が焼けていたので、どこへ行ったのかと思ってあちこち歩いていると、大勢の人が海岸へ行っているのを見に来た」とのこと。よくまあこの混雑している中で会えたものだと思うて感謝した。そのうちに「焼け出された人は長樂小学校へ来て下さい」とのことだったので、みんなぞくぞくと歩いて行った。私達も叔父も人の群れにしがたがった。「そこで証明書を貰い、

行くところのない人は学校で一時落ち着くように」とのことだった。叔父は「うちへ来ませんか」とのことで皆世話になることになった。（叔父の家はこの学校から徒歩一時間位北方に当たる湊川町に住んでいた）

翌日何か残っていないかと、父と二人で焼け跡を来て見たが道を歩いても熱く、土など熱くてとてもさわれない。二日位は土が熱いのだと人から聞いた。やっと三日目にまだ土はぬくもりがあるが、ほじくりまわす位はできた。しかし何も残っていなかったが、不思議に水を入れていた鍋だけはひしゃげてはいたが残っていた。はっきり覚えていないが、三日位して証明書があれば何かくれると言うので加納町まで小さな小さなおにぎりを一個ずつ非常袋に入れて肩にかけ、防空頭布を持ち父はゲートルをまいて、貴重カバンを肩にかけ防空頭布をもって加納町まで出か

けた。加納町の方はまだひどかった。電線は落ちてツタツタになっており、大きな馬が道路上で横倒しになって死んでいた。そのそばでは、石の上に座らせてハンカチらしい物をかけて、しきりに泣きながら押んでいる両親らしい人を見た。多分、子供さんを亡くしたのだろう。涙なくしては見られない光景である。

やがて目的の場所へ来ると長い長い列をつくって何かをもらいにきていた。その間にも警戒警報はひっきりなしに鳴らされる。

ほんとうに不安と恐怖心で胸中はドキドキしている。それはもうこわくて両親の里の徳島（父は市内だが、母はさらに二里程山の方へ入った所で、三方山に囲まれきれいな水が流れている川のあるのどかな山村）へ一時避難することになった。

学童疎開の歌

N・Kさん 51歳

摂津市正雀本町

学童疎開の思い出を書きたいと思い、
ペンを走らせました。五年生のことです
から、あまりよく憶えていない面も
あります。嬉しかったこと、悲しかっ
たこと位で日常生活は楽しいものであ
りました。

お寺の奥様が寮母さんであり、私達
のお世話もよくしてくださいましたの
で、私達は幸福だったと思います。夜
尿症で、毎日ふとんをぬらす子供がい
て先生や寮母さんも大変困っておられ
たり、おやつがないので村の薬局で
“わかもと”を買って来ておやつがわ
りに食べている子供が何人もおりました。

今年で（今冬）四十年になります。
いまの豊富な食べ物に比べれば、戦争

中は何もかも不足不足の我慢の時代で
した。

一、口まだ乳のにほえども

国の為とて勇みたち

父母の膝元離れゆく

我等は疎開学童ぞく

二、自然を友に日を暮らし

ちりの都をよそにみて

木の芽のごとく育ちゆく

我等は疎開学童ぞく

三、いつも待つのは父母の

便りやおやつ早くこい

勝つまで断じて頑張るぞ

我等は疎開学童ぞく

この歌は、私達学童疎開の子供達の
ために、当時の香川県石田村のお医者
さんが作って下さいました。私達はよ
く歌っていましたので今でも憶えてい
ます。

曲は愛国の花の曲です。

一、“ましろき富士のけだかさを”

こころのつよい楯として

御国につくすおみならば

かがやく御代の山ざくら

“地に咲き匂う国の花”

この歌の曲に合わせて作って下さっ
たものです。今でもよく口ずさみます。

学童疎開から終戦にかけて

昭和十九年九月十六日、雨の降る朝まだ暗いうちに学校に集合し、駅までの道中を父兄や近所の人達に見送られて、遠く香川県大川郡石田村へと学童疎開に旅立ちました。その時は五年生で、親元を離れてゆくのにあまり不安もなく、遠足のような気持で汽車に乗り、宇高連絡船の船上より島々を眺めて楽しそうに行つたのをおぼえています。

高德線造田駅に下車すると、石田村の国民学校の生徒さんのお出迎えをうけて、私達各一人一人につきそつて宿舎の徳勝寺まで送り届けて下さつたのが、とても感激しました。

お寺の庭には、私達学童疎開の子供達を歓迎するかのように萩の花が、大きな円形に二カ所植えられて満開に咲いており、うつとりしたものでした。

大阪の親元をはなれ、遠い四国のお寺につき学友四十数人と先生と寮母さん、お寺の家族との生活でした。お寺での生活はものめずらしいものばかりでした。

当時は水道もなく井戸水をつるべくみ上げて、洗顔したり洗濯したりしていました。近くの小川で洗濯したこともありました。

風呂は五衛門風呂といって鉄の風呂でした。最初はとつてもこわかったです。板がちゃんとしずまなくて困りました。食事の時も、塗りのとつてもくさいどんぶり位の大きい食器でした。慣れるまでつらかったです。

私は鶏肉が嫌いなため、御飯に入っていると大変困りました。一口か二口しか食べられず友達に食べてもらっていました。当時は食べるものがなく、本当にいまの生活を見ると考えられない時代でした。おやつもなく、ときど

き大阪の親がどこかで探しては、小包で送ってくれるおやつを、先生が集めて皆にわけてくれていたようです。

当時は先生もとってもきびしく、便所をうっかりよごす人がいて、翌日、先生が誰かと皆に聞くのですが、皆が黙っていると先生はおこつて全員に罰として、両手を高くあげさせ足を曲げさせて、しばらくそのまゝの姿勢にさせていました。自分が便所をよごして悪かったと思う人は、先生の所まで申し出なさいと言うことです。私も半年しかいませんでしたが、全員の責任と言って罰をする、これが一番いやでした。

軍国主義の最中だったからと思いますが、お寺の中でも規律正しい生活でした。でもそのような厳しい中にも楽しいこともありました。夜などは皆で順番に歌を唄ったり浪曲をする人が二人おり、とっても上手でした。なにも

できない子は、三回廻ってワンと言わ
されたりして楽しい一時をすごしてい
ました。

学童疎開のうちで、一番嬉しかった
のは面会に父兄が来てくれるときでし
た。三人位順番にきて二晩泊まってお
寺の生活や学校での勉強を見ていたよ
うです。学校も石田村の学校の教室を
借りていました。六年生女子と私達の
五年生女子が、石田村の国民学校の友
達の仲間入りをさせてもらって、運動
会や珠算大会をしました。隣り村の富
田村や長尾町にも同校の下級生達や上
級生が、学童疎開としてきていました。
十月の秋祭りには四人ずつ、村の農家
に招待されて、おすしや甘酒等をご馳
走して下さり、帰りにはいろいろな手
づくりのおみやげをいただいて帰りま
した。当時はおやつもない時だけにとっ
ても皆で喜びました。秋の稲刈りのあ
との田んぼでタニシを取ったり、せり

を取ったりしておかずにしていました。
取る時がとっても楽しく都会ではでき
ないことと思います。

昭和十九年九月十六日より二十年四
月五日までおりましたが、この年の一
月、二月は七十年振りの大雪とかで、
私達の膝まで位の大雪で学校まで行く
のも大変なので、お寺で勉強しており
ました。雪の解ける時は、お寺の大屋
根から大きな塊がドスンと大きな音を
たてて落ちていました。当時は大雪も
めずらしく思いました。

一人娘の友達はいつも、大きな人形
を抱いて歩いたりふとんの中に入れた
りしていました。この冬は寒いのにコ
タツもなく、夜は毛糸の服で足を包ん
で母が袋のように縫ってくれていた毛
布の中に入り、コタツなしの冬をすご
したものでした。

近くの山を持っておられるところで
は、私達に栗拾いをさせてくださったり、

近くの軍人墓地では当番制で掃除した
り、おまいりしたりしていました。

四十数人のうちの二人がある日、逃
げて大阪に帰ってしまいました。大阪
に帰ったことがわかるまで皆で心配し
ました。二人は五年生で、長尾から電
車で高松に出て連絡船に乗り、また汽
車に乗り次いだのでしよう。大阪へ帰
るなんてことはいくら帰りたくても、
普通の子供ではできないことでした。

栗拾いでもらって来た栗を干してあつた
らそれを生で食べてしまったり、他の
学友達の持物に手をつけたりしていた
先生によく注意されたりしていたので、
お寺の生活がいやになったのかと思ひ
ます。私達があまり苦痛に思わなかつ
たのに、その二人は逃げてそのままも
う来なかったようです。

そのうち戦争が激しくなつて来たの
で、縁故疎開に行ける人は大阪の親が
迎えに来て帰って行く人が増えてきま

した。私も姉が迎えに来て、大阪で残留組だった妹と二人で鳴門の祖父母の所に預けられました。六年生の初めから鳴門へ行き、六月には大阪の父母姉妹達が家を焼かれて鳴門へ帰って来ました。この頃は学校でもあまり勉強はしないで、土手のヨモギを先生と生徒で一緒に取っていました。空襲警報が鳴ると防空壕に入ったり、山越えして家に帰ったりしていました。そのうちに八月十五日終戦を迎えました。

九月に預けたままの荷物を取りに行くと学友は長尾寺に引越していませんでした。六年生になると、徳勝寺に預けてあった私の荷物も一緒に移動していましたので、長尾寺へ行き荷物を受け取りました。

K・Mさん

37歳

摂津市千里丘東

ふるさとの

四季の野山よ永遠とわにあれ

海川ともに我らが守る

この子らに

未来をたくす責任は

我らが守る平和な世界

小学生の見た戦争

M・Tさん 47歳

摂津市千里丘東

私の生まれたのは昭和十三年。もう日中戦争が始まっており、確かに戦争中を過ごして来たのに、私自身が幼なかったのか、それとも四十年と言う時の流れがそうさせたのか、断片的な記憶はあるのに、それがスチール写真を見ているように前後がうまくつながらない。戦争体験というテーマで筆を執ってみたものの、忘れてしまっていることの方が多い。

サイレンの音が聞こえると、その度に授業は終わり、家まで小さな背中にランドセルをカタカタ揺らしながら走って帰る。それが小学校(当時は国民学校と言っていた)一年生の冬から二年生の夏への毎日の暮らしだった。

早い夕食を母と二人きりですませ、

灯火管制のため、ハダカ電球の傘に掛けた黒い布の下で、ヒッソリと過ごす父の知人の家の離れを借りた疎開生活だった。私の一家が疎開先へ来たのは、大阪市内福島にあった家が、軍関係の工場のそばにあり、防火帯を作るためと強制撤去させられたためだった。近くへ引越したが、その家も東海道線の近くだからとまた引越し、二度目に越した家は学校へも近い、とよろこんでいた矢先、今度は学童疎開。それで仕事の関係から一緒に暮らせない父と別れて、柏原町(現大阪府柏原市)へ疎開した。柏原は大阪の南東、東に生駒山の南麓一面にぶどう畑が広がり、南には大和川が流れる静かな町である。

十九年に入学しその年の秋には幼な友達や、やっと名前をおぼえた同級生と別れて転校する者もいた。転校は

淋しいもの。それも当時はあたりまえのことだったのか、毎日のように一人二人と同級生が減っていきます。

柏原町の学校では他所者とも言うのか、とにかくクラスに解け込むのが大変だった。校庭の半分は耕され、イモやトマト、キュウリなどの畑になっていて、なれない都会っ子にもその世話をさせられた。草ひき、水やり、それから何をしたか忘れてしまった。

疎開生活の内にもまだ子供のこと、戦争のことなど本当のところわかっていない。楽しく遊んだこともあった。大和川での水遊び、魚や虫を追いかけた、あまり近くまでは行けなかったが、現在の八尾空港へ飛行機を見に行つて、戦闘機や練習機の発着を何時間も見ていたこともおぼえている。

サイレンの音で夜中に起こされ防空壕へ退避、中で聞くラジオは、はつき

り聞こえなかったけれど「中部軍情報、敵B 29数十機が、紀伊水道を北上中」とか、といった。

「来るぞ」だれかがつぶやいた。息を殺して空襲の終わるのを待つより仕方ない。すると上空を通り過ぎるのだろう。身体中に響きわたるようなエンジンの音。「来たっ！」教えられたとおり手の四指で眼を押さえ母指で耳を押さえて、じっとしている。「早く帰れ」こんなせまい所から出たい。どれくらい、そうしていたことだったろうか。何事もない様子なので外へ出ると、北西の空が明るい。サーチライトの光が何条も空をなめまわしており、B 29の影を写し出している。高射砲か、高射機関銃で迎撃しているのだろう。曳光弾が赤い点線を引きながら昇って行くのに届かない。歯がゆい思いでそれを見ていた。上空からは沢山の光の帯がまるで仕掛花火の滝のように

降って来る。それが地上に着いたかと思う間もなく、空まで焦がす勢いで真っ赤になった。あの明るさはたぶん家が、街が焼かれているんだ。大阪が燃えている。父は大丈夫だろうか。家は、学校は？その夜は戦争の怖さを知った最初だったように思う。

大阪空襲が何度あったのか、昼も夜も敵機は来た。父の守る福島の家へ安否を気遣う母の手にひかれ、関西線で天王寺へ出て城東線か地下鉄に乗って梅田まで行き、それから歩いて家までたどり着く。その度に街の様子が変わっていた。電車の窓から見える焼跡、白い煙が出てまだ燃えている大きな建物。確か新世界の映画館だったと思うが、ビルが崩れて地下二階まで見おろせる爆弾の跡、天王寺公園では油脂焼夷弾の六角柱の殻があちこちにころがっていた。地下鉄の通路や広場には焼け出された人々が僅かな

身のまわりの物を持って、放心したように坐り込んでおり、なかにはそこまですべて来て力尽きたのか、横になったままで息絶えた女の人がいた。その枕許に水筒があつたのが今も目に浮かぶ。

ケガや火傷の手当てをしている人達、そんな中を足早に通る過ぎる人びと、手を貸してあげる余裕がなかったのだろう。

私の家は無事だったけれど、父の工場は焼けてしまった。その時から父も柏原へ来たので、なんとなく心強い思いがした。が食べ物の少ないのは相変わらずで、いま考えると一家三人が何を食べていたのか、どうして手に入れたのか両親に感謝する。

飛行場がある関係で、艦載機に追いかけられたことが私にとつて一番怖かった。どこから飛来するのか、警報のサイレンと同時に南の方の空から

黒い点テンが爆音と共に、たちまち大きく見え、頭上へ来る。青黒いズングリした機体に赤い線と星のマークが見える。グラマンだ。パイロットの顔が見えるくらいの低空を飛ぶ銃を持った怪鳥は、翼を振りながら面白半分とでも思えるように鯉のぼりに大きな穴を開け、家々の白壁に弾痕をつけて飛び去って行く。こちらには対抗できる戦闘機もなかったようだ。

セミの声からだ中の汗を呼び出しているような暑い日、例のように朝からグラマンがやって来たが、午後になって家の中の雰囲気がいつもと違ってゐる。外もいやに静か、「どうかしたん」私の問いに母が「戦争が終わったよ」「ふうん、それで勝ったん？」

母はただ黙って小さく首を横に振りながら悲しそうな顔をしていた。東京にいる伯父の長男は海軍に入って、その時にはすでに帰らぬ人となってい

たのだ。私の記憶に残る悪夢の半分がその日終わった。

いせんと芋のころ

N・Tさん 73歳

摂津市千里丘

みんな食べた、ほめられた。食いしん坊学園のコーシヤルにこんながある。なんと平和な日本になったことだろう。四十年前のあの日、あの時お芋を二個食べたと言つて柿の木にくくりつけられて折かんをうけた隣の子供がいたつけ。泣き叫ぶ子供の声をききつけてかけて行つたけれど、あの戦時中の食糧事情のきびしい折柄、あやまるにもあやまれずすごすごと引き返した自分の過去を思い出す。人のことどころか、自分の子供を五人も抱えて、一カ月の配給ですら満足に貰えないあの時のことを思い出しながら、今の幸せをしみじみ感謝しています。電波兵器の製造にたずさわっていた主人を、一人大垣の社宅に残し、子供五人を連れ主人の郷里の丹波に疎

開しましたが、疎開のその日から私達は生きた戦場でした。

主人の兄妹が、子供を、そして姑さんまで連れて帰つて総勢二十二人の大家族でした。お釜五つを別々に炊かねばなりません。帰つたそのあくる日から食糧確保のための芋畑の開墾が始まりました。鍬を持ったこともなかった私は、豆のできた手をかばいながら、荒地の開墾に来る日も来る日も精を出し、夏の初めに芋づるを植え付けましたが、山道を水桶をかついで、水やりに行くときの苦しさ。大世帯ゆえ、それぞれ仕事の受け持ちが決まつておりましたので、いつも水やりは妹二人と私の役目でしたが、苦勞して育てた芋が秋になって小さいながらも根をつけた時の喜びは、また一入ひとしおでした。それからしばらくは、私達総勢二十二人の食事をどれだけ助けてくれたことでしょう。でもこうなるまでに

どれだけ苦しい毎日だったことか。あの赤土の中に汗の雫すくと共に私ばかりじゃない、きつと皆の涙がしみこんでいたことでしょう。

ごはんの代わりに大豆粕を配給され、それも大豆粕ならまだしもトウモロコシの粕が配給されたこともたびたびでした。お芋と混ぜてごはんに炊き、または道端でとつて来たヨモギと混ぜて団子にしたりしました。ある材料でいろいろ考えて作る食べ物ならまだしも、トウモロコシの粕の中に一合位のお米を入れ、それを六人で食べていました。主人の妹が「姉さん、そのごはんでは余りに可哀想だから、今日畑に出る前にこれを食べて出たら」と言つて四、五割方、米の入ったごはんを一杯入れてくれました。妹は京都市内で食堂を経営しておりましたので、丹波へ疎開するとき手持ちのお米をみんな持つて来ていたと

かで割合困らぬ生活をしておりまして、たのくれたのですが、雑草を混ぜた雑炊を食べて学校へ行った子供達のことを考えたら、どうしてごはんがノドを通りましょうか。私は里芋の葉っぱに急いで移し、ご馳走さまでしたと、お茶碗だけ返しました。四キロも

ある小学校からすき腹を抱えて帰って来た三人の子供に、妹に貰ったごはんを分けてやりながら、私の飲みこんだ物は熱い涙の雫のみでした。大切に持っていた着物もつぎつぎと食糧品と交換され、残る物は絹物の二、三枚だけになりました。農村のこととて仕事着になる木綿物が喜ばれ、都会育ちの私など木綿物がないので何事につけても不利でした。

私は夜遅く手元にあった八番線を持って、少し離れた百姓のおじいさんの家に行き、おかゆの中に入れる水菜と取りかえてくださるよう頼みに行き

ました。八番線は玄米を供出する時、俵をしめるのになくってはならない物だと言うことを前に聞いたことがありますが、ので持つて行っただけですが、おじいさんは提燈をつけて畑に下り「あんたも苦勞するなあ」と言いながら水菜を切ってくれました。

提燈の光に照らされたおじいさんの横顔が今でも目に残っております。幾株ということは忘れましたが、「子供さんたちを連れてつらかう」と言つて、幾株かの水菜と大根まで抜いてくださったことも忘れられません。あのおじいさんが今でも生きておられたら、一度お礼を申し上げたいと思いますが、戦後四十年、あの時でさえ大分のお歳でしたので今ではもう生きてはおられないでしょう。

それぞれ子供連れのことゆえ、「自分の子供は自分で」との主義でそれ相当の苦勞があつたことと思います。畑に

行つて芋を掘り、モンペで芋の土を拭いて子供に与えたあの生の芋の有難かつたこと、芋のつるは申すにおよばずジャガ芋のつるまで茹で、食料にしましたが、ジャガ芋のつるだけではどうしても食べることはできませんでした。ノドがいがらくて吐氣を催し、いくらのみ込もうとしても、のみ込むことはできません。今でも白い花をつけたジャガ芋の茎を見るたびに、苦しさとなつかしさと胸が熱くなります。

主人は電波兵器の製造にたずさわっているため、出征軍人として召集されることも免除され、ただひたすらに兵器の製造に専念しておりました。「知らせがなかったら元氣でいると思え」との便りがときどき届くのみで、行くことも来ることもできず、ただ主人の無事と会社の兵器製造が無事であるようと祈るのみでした。名古屋が近いと電波兵器を製造しているため、

何回となく敵の攻撃をうけたことでしょう。私はラジオを聞きながら、ただただ離れて暮らす人のみの知る心配を味わい、早く平和の日の来ることのみ祈りました。

妹達の炊くごはんの釜肌に残ったごはん粒を一粒ずつ拾って食べている幼ない子供の指さきを眺めながら、いくど涙したことでしょう。上の子は三年生、学校で教えられた通り「辛抱しましょう勝つまでは」と言って下の子供達をさとしていました。世間の人達はみんな苦しんでいる。私達だけではないと思いつつも「なぜこのような戦争を」と、悲しく思ったことも幾度あったことか、でも出征兵士の家族のかたがたや、戦死なされた家族のかたがたのことを思えば、まだまだ子供達と一緒に暮らせることは幸せだと、山に入ってアカザの葉っぱや野草摘みに精を出しました。朝から晩まで摘ん

だヨモギはトオモロコシの粕を混ぜての主食になりました。

村の公会堂に疎開した京都の国民学校の児童がひもじさの余り、落ちた渋柿の実を拾って食べ腹痛を起こしたと言うことを聞いたのもこの頃です。幼い児童が母恋しさに、毎晩泣いているということをきいて、うちの子供達は「僕たち母ちゃんと一緒にだから幸せだね」と喜んでおりました。戦争はもう嫌、戦後もまたあまた苦しみました。今こそ世界を挙げて、戦争の噂を早く消してしまいたいものです。

子供の目で見た終戦

K・Iさん 48歳

摂津市鶴野

私が終戦を迎えたのは小学校の二年生だった。幸い京都に住んでいたので恐しい体験はないが、子供の目で見た戦中・戦後の記憶をたどってみた。小学校に入学した頃、戦局は厳しく、空襲警報が鳴ると授業を中断し、防空頭巾をかぶり先生について地下のボーラー室に逃げた。そこは暗くジメジメしていてあわてるとツルリとこるんだ。それでも泣く子はいず、一言も口にせず、ジッと息をこらして警報が解除されるのを待っていた。男の子はやせて青バナをたらし、服の袖には鼻汁がテカテカに光っていた。女の子は髪にシラムいがわいた。学校から帰ると母がクシで髪をすいてくれるが、ひろげた新聞紙に黒いシラム이가パラパラと落ち、

それを爪でつぶした。体にもわき、シヤツの縫目に入り込んだ白いシラムいを探し、つぶすのが日課だった。

夜は暗幕を張り、電灯の傘にも黒い布をおおい、うす暗い明りの下でラジオのニュースを聞き、B 29の飛ぶ音にふるえ、飛び去るとホッとした。私の家は呉服屋をしていたが、店は閉めていて衣類の配給の日だけ開けると、店の前にはチケットを持った人が並んでいた。店の下に防空壕を掘り高価な絹物をしまったところ、水が沸き出てもどもシミになってしまい、母はなげき悲しんだ。

京都は歴史が古く寺院が沢山あるので、爆撃されることはないという噂が入り、大阪が爆撃に遭い沢山の人が死んだと聞かされても、それほど緊迫していなかった。集団疎開を勧める手紙が来たときも、死ぬときは親子一緒にという母の言葉で参加しなかった。玉

音放送のあった日、ラジオの前に集まって大人達は緊張して聞き、終わると声をあげて誰れもが泣き出した。私は天皇のお言葉が理解できなくて、それでもその場の雰囲気です「ああ戦争に負けたのだ」と悲しいというより解放感を味わったように思った。

私の住んでいた町は陸軍の兵舎が三つもあって家の前の道路は師団街道と呼ばれ、戦時中は兵隊さんの行進や軍人さんをよく見かけた。

戦後いち早く米軍がやって来て、大人達は戦争に負けたのだから何をされるか解らない、特に若い娘は外に出てはいけなないと、どの家も戸をピタリと閉めていた。それまでアメリカ人を見たことがなかったので、こわごわ二階のガラス戸をソツと開け米軍の行進をみた。まず背の高いのに驚き、金髪と黒人に驚いた。それからまもなく、町にはパンパンと言われる若い娘さんで

あふれ、それまで手に入らなかった化粧石ケン、外国タバコ、チョコレート、ガム等を欲しいためにどの家も二階を彼女達に貸した。

戦時中の暗い街は一変して華かな街に変わり、バー、キャバレーができ、米兵は陽気で親切だった。店を再開すると、貴族だった人達が収入の道がなくなり、着物をつぎつぎと手放し店に持って来たので一時期、古着が並ぶようになった。母は街の女の面倒をみたり相談相手になってあげたりしたので彼女達に慕われ、子供の私は可愛がってもらえた。とくにチズちゃんという人が母を慕い、相手のダニさんという米兵は子供好きだったのか、とても可愛がってくれた。大きな身体で軽がると抱き上げ顔中、キスをするのだった。ダニさんがキャンプから出られない日が続いた。チズちゃんはキャンプまでお金をもらいに行きたいが、夜MPに

怪しまれないように行かなくてはならず、一緒に行ってほしいと頼みに来た。母は私も連れて行つた。あたりは真つ暗で草むらの中に身をひそめ、ダニさんの来るのを待った。

ときどきサーチライトに照らされ、そのたびに身体を地面に伏せ、まるで自分が悪いことをしているように怖くて、ドキドキした。ダニさんがこっそりやつて来て、お金と紙袋を渡して帰って行つた。チズちゃんは紙袋の中から丸い缶に入つたチョコレートくれた。小さなチョコレートが色とりどりの紙に包んであつて食べるのがおいしいように、毎日少しずつ食べたのだった。彼女等が一番おそれていたのは売春婦狩りで、夜MPがトラックで乗りつけ、どの家も土足で上つて来て彼女等を見つけると連れて行くのだった。チズちゃん是我的家にハダシで逃げてきて、トイレにかくれたが見つかりトラックに乗

せられ連れて行かれた。連れて行かれた先は平安病院（彼女等を収容する専門の病院）なので、母と二人で面会に行つた。塀の上には鉄条網が敷かれていて異様な雰囲気だった。チズちゃんは母を見るなりワアツと泣き出し、泣きながら語るところによると性病の検診で検診台に上つてフト医者を見ると、その人は初恋の人で、あまりの驚きと、恥かしさで検診台からころげ落ちたそう。

私はまだもう一つ理解できないながらもチズちゃんが哀れだった。

まもなく米兵が横須賀に移り、それに連れて彼女等もいなくなり、キャバレーやバーも閉店した。チズちゃんは母に別れを告げてダニさんについて横須賀に行った。それつきりでチズちゃんその後のことは判らない。米軍キャンプの後には学校や市営住宅ができて、街は米兵や彼女達がいたことなど忘れ

たように平和で静かになった。私自身も大人へと成長していった。

今この平和な生活の中で、子供時代の思い出だけでなく、戦争の恐ろしさは経験していなくても、戦争だけは決してやってはいけないと思う。この平和な時代がいつまでもつづきますようにと願ってやまない。

千人針

O・Hさん 68歳

摂津市香露園

昭和十六年七月、暑い日でした。お産を控えた折、突然の召集で、尾道から里の母が「一日でも早く家に帰れ」と言ってきました。世帯道具の片付けもそこそこに吹田から電車で大阪から急行列車で尾道の里に帰りました。

私は千人針等お願いして歩くこともできませんでしたが、夫は二十一年五月南方から復員した時、ちゃんと身につけて帰りました。本当に有難いことだと思っております。

夫は広島から満州、南方方面へ廻されたらしいのです。南方からは通信も途絶え、内地は空襲空襲で大きい都市から次々と焼き尽くされ、衣食住はだんだん苦しくなるばかりでした。二十

年八月十五日終戦、空襲はなくなり、夜ゆつくり休めるようになりました。綿毛の衣料品が高価となる一方で、食糧はますます苦しくなりました。物々交換など、今の世の中ではとても考えられません。

軍人も近い所から早く家に返され、南方からは船が無く、何時復員できるか知れませんでした。アメリカの船で送り返されたとのことで二十一年五月、名古屋へ帰還したようです。しばらくして元の職場に勤めまして、家が大阪では無かったので、私と長男はその年の八月大阪へ出ました。見渡す限りの焼野原で、家のない方が大阪駅の下で生活しておられました。

大阪の生活は尚一層食糧難でしたが、何とか頑張りました。そのうちにアメリカの食糧補充を受けて、米の不足を代用食でやっていきました。

また何年か過ぎた頃、戦いの痛手から立ち直り、考えられない程に恵まれた世の中となりました。あれだけ大きな戦争を体験した私などはもったいなくて、やたらと物を捨てる事ができません。

戦争の傷痕

E・Nさん 59歳

摂津市一津屋

青年期の心境と生活

戦国日本、当時の国民思想は否応なく軍政路線に追いやられ、あきらめが先にたち、青年の意欲は単に心のよりどころ程度だった。物資も金も体力も尽き果てての終戦である。ただ国敗れて山河なしの標語だけが妙に気がかりの日が続いた。

朝星夜星を仰いで軍需生産に励み、得た給与は隣組で各町内ごとに半強制的に割り当てられた国債の費用となった。その国債が後に何の魅力もない紙屑同様になったのは政府が給与を合法的に強奪したことにはならない。しかし金が有っても買う物自体が無い。誰もが絶えず空腹だった。当時私は九州の福岡市にいたのだが、ある時、街

に行列ができた。一皿のソラ豆の塩煮を食べたいのだが、どの辺かで売り切れた。家庭の食糧事情は極端にひっ迫している。僅かな米麦と抱き合わせの大半が大豆の絞り粕で主食配給とされていて、なかなか食えるものではないが空腹では生きられない。そのため、いつも下痢状態だった。その頃は縫糸も衣料品も配給切符制であり、衣料品とて不十分だが求め過ぎては縫糸にさえ困る。靴下の繕いが丸い裸電球の中に入れるとうまくできた。祖母は古い長袖のシャツの袖を切って、その切口を袋状に閉じ靴下にくれた。廃物はまるでない。リサイクル生活は人の不自由から生まれ、今も私はそれを得意としているので人は器用と言うが、断じて器用なんて言葉には抵抗を憶える。戦中談話は断片的に似た話が現代人に語り継がれているだろう。それにつけても人は逆境に強い。それなりの

希望を持ちつづけた。これが当然軍政の望むところだった。

軍事行政

この時期は徹底して英語は敵国語で使用禁止。学業から除去され、女子のヘアもパーマは禁止。毎日耳に入るサイレンといやでも目につく貼紙は軍事標語ばかり。もう軍事一色で教育の何たるかも失われ勝ちだ。ある田舎で一人の青年が召集令状を受けたが、祖母と二人暮らしの農家である。残る祖母が気がかりで召集に応じなかった。間もなく騎馬憲兵がやって来て、山中に逃げ込んだ青年を拳銃で射殺して行った。当時有名な話だったが悲しい話である。この頃、憲兵は特権をもっていて恐れられていた。

子供達の教育も徹底している。宿命的にあきらめを旨とした日本人古来の

慣習を美德として、積極的にその志向に走らせた感じがする。これを道義とした国民を軍政統括することは容易だった。勿論こうした時局柄とは全く逆な思想の一握りの潔い者達がいて今も名を残している。特に私が勤務した筑紫市の軍需工場のすぐ近くで起きた事件に、中野正剛氏の割腹自決があった。

この反体制思想のメンバーは中野正剛会を結成し、軍事色のカーキ色をきらい、その服装も黒づくめに徹していた。軍事思想を植えつけられた私達には、単に異例分子にしか思えなかった。そのくせ今思えば福沢諭吉の書物を持っていたのが恐ろしく思えた。おりから軍需工場に副社長の弟と名乗り、山本五十六元帥（当時中将、戦死後特進）が南方への出発を前に激励の訓示に来社したが、この方が素直に私達には受け入れられた。その後、一期私も軍籍に身を置く事になる。

教育と徴兵

地域有名小学校の秀才組から幼年学校へと進路があり、職業軍人の進級最短コースがあった。巷は志願兵募集の広告でいっぱいだった。学校でも志願兵募集の講演が再三あった。高等小学（現在の中学二年）卒以下は一般兵志願、その他、中、高、専、大卒それぞれ幹部速進の志願コースがあり、当時一般人の三分の一が中等教育以上を修めた程度の中にいた私だが、早々から職業軍人として志願するのは、つまりは死に急ぎにつながり、その気になれなかった。数え二十才で徴兵検査を受けるのがわれらが思春期に残る出来事だ。検査場には地元の二日市市の婦人会主婦連が白タスキで検査官の接待をする。

その数は余りに多く、中には何もせず手もち無沙汰の人もいる。その広い学校の講堂で、私達は全員一糸まとわぬ素ッ裸になり、婦人等に対面の形の

整列で検査を受ける。思わず局部を手でカバーしようものなら大変な怒声が出る。しかも一人ずつその局部をひねくって検査するのだから、紅顔の美少年も形なしである。

ちなみに、同年配の異性とは言葉さえ交せなかった時代であり、姉と外出するときなど、一定の隔りをもって歩いたものである。検査が甲種となれば召集令状が来るのは時間の問題である。あわてて特別幹部候補生の試験に受験し合格したが、すでに遅く、現役の一般兵入隊が先に来て、志願先入隊の期日まで熊本市にて預り兵とされた。ところが終戦が先に来てしまい、短期間の一般兵経験をしたにすぎない結果になった。だがその時同時に入隊した一般兵は入隊と同時に中等以上の教育を受けた者とそうでない者とが二分され、三分の二は一般兵として編成された。軍装は上から下まで新品づくめの正装

をしたが、もう腰の剣もサヤは竹製で、帯革（外装ベルト）はズック製になっていた。とは言え、残存隊の私達はまったくびっくり。ズボンは大正時代の黄色の帯線のついたもの。靴は十文三分と十文五分の組み合わせで支給された。

約半月位してからか、誰からともなく、先の同時入隊の新編成組は鹿児島から沖繩へ向け出航してそのまま船ごと全員死亡と聞いた。誰が死んでも自分だけは生きのびようと思うのが人情。全く幸運な自分を神に念じた。でも志願先への入隊期日を前に終戦を迎えた。

少年期の思い出

話はさかのぼるが、熊本市における中学時代、すでに物資不足の時期に有った。代用の布靴の日常。ある日の軍事教練の時間、分列行進中のことである。靴底半分がはがれ、みるみる前半

分の底がなくなり素足となり、靴のつま先が一步毎パクパクとなった。同僚の笑いに、それと気づいた教官は一人私を隊列からはずした。そのみじめさは子供心に辛らつだった。良い靴など求め得ぬ家計からして起こるべくして起きた。燃料統制で銭湯経営が出来なくなつた父は借金苦に身を隠し、祖母は叔母の家へ世話になり、残つた母子四人暮らしはギリギリの生活だった。

下宿人と内職とで一家を支える母の苦労は目に余る。この頃は一升の米を買うのに、子供が使いでは売ってくれなかった。ラジオさえまばらな当時、夜十一時はもう寝ている時刻。それなのにまだ明朝の米が入手できない。再び朝になつて店の戸を叩き、不気嫌な店主に台湾米を求め、一升の米を新聞袋に入れ大事に抱いて家へ急ぐ途中、同僚が登校してゆく。「何だまだ学校行かんのか、遅れるぞ」と言い残して行

きちがう。わけもなく止めどもない涙が溢れ出て仕方がない。学校どころか、いまやつと米を手にしたところだ。服の袖で涙を拭き、母に顔を見せなかった。

母はその私の気持ちを知ってか知らずか、微かに叱咤する言葉を耳にした。昼食のパンを買うため何がしかの金を貰い、朝食ぬきで四キロの登校路を走りに行った。

切実な一般家庭

戦争末期には私は福岡市にいたのだが、そのころはどこの一般家庭でも必死で食糧確保に努めた。家族五人の配給分で五人が凌ぐより、六人分で六人が凌ぐ方が理の自然、一人軍需工場に食糧籍を置き、三食特配付の日を送っていた私に、その頃は家に帰っていた父に「苦しい時は一緒だ」と言われ、特配のあつた工場の食糧籍を一般家庭

の自宅へ移した。代用食生活に入り、会社は残業・徹夜の連続。栄養不足と過労で遂にダウン。丸二日間、出勤先を近くの公園に変え芝生の上で眠り続けた。何が嫌でも不満でもない。体がだるくて動けない。今日のようにドリンクや強壮剤なんてものは何もない時代。公園の水で額を冷やし水を飲みただ眠った。もう体が動かない。どうなっても仕方がない。どうでもいいや、無断欠勤二日で何とか切りぬけた。もう一日欠勤すれば家に憲兵が来るはずである。軍需工場は軍が直接介入する。工場の食堂で作業帽を被っていた者が、帽子を叩き落とされたのを見た。食事中さえ巡回監視された。

この文中に私だけしか分っていないいくつかの問題があるが、これを読者がどう理解するだろう。愚かな出来事とは受け取って欲しくない。封建時代の本当の姿が底流にあり、こうあるのが

日本の美德観念と言うより当然とされた国情だった。今日、好きな事の表現も行動も全く自由に等しい時、実感としてどの程度納得できるだろう。戦争とは勝敗何れの側にしても、如何に自滅に等しく壮絶で悲惨なものか。一個の弾丸の怖さより毎日の飢えの苦しみはもう御免である。略奪立国を今日の日本に変えた現代人は、立派に一大偉業を成し遂げたのだが、治にいて乱を忘れないで欲しいものである。それに付けてもアフリカの飢えた人びとを思う時、戦時中の日本を連想せざるを得ない。今の日本の平和は戦争中と等しい努力によって支えられているように思われる。いま日本人であることをしみじみ幸せに感じている私達。戦時中はなぜ日本なんかに生存しているのか、と思ったことがたびたびあった。今はウソ見たいに思える私である。

我が苦難時代

元来、自分が人に話す場合、相手はどう感じてくれるかその方が先になる。特に今からすれば想像もおよばないような昔話をどこまで信じてくれるかと多少不安である。とにかく期待するのが読者か自分か分からぬままに進めてみる。戦中戦後の実情はその表現の比ではない。昭和の戦後史とか格好の良イタイトルも知ってはいるが、その悲惨さは物・物・物につきる。

終戦、その日から開戦である。敗戦して山河がどうであろうと、いま何か食いたい。これは郷里の熊本での話だが、家族に食わさにゃならん、食糧入手に警察との大立回り等、いまはいない親達がいぶん苦労したものだ。親に連れだつての思い出が当時苦しかっただけに、今は楽しい思い出もある。意外とそんなことが人の幸せを感じる今日ではある。電力不足でまともに送

電がなかった時代のこと、丸い裸電球の中の発光体が大きな旋のタングステンであり、これがローソク送電という微量送電になると、丸で電熱線のニクロム線のように赤く発色するだけで、まず部屋の照明にはほど遠い。送電さえそんな時期のこと、現在の電気製品なんぞ皆無である。もちろん蛍光灯なんてごく最近の産物と言える。まあラジオはあるにあったが、それさえ、短波のラジオは軍の牒報上接收されて残る数は少なかった。その上、ローソク送電となると聞こえなくなる。

一般には乏しい資源の中、小皿の菜種油に布紐をたらして灯りにした。新聞さえまともに読める明るさではなかった。マッチにしても火薬の資源として軍用に使われ、その代わりとして硫黄が塗られた「ツケ木」と称するものが出回った。松の薄板を小割りにして、火種から取り火して炎にするものであ

る。火種の木炭も量的に限られているため、普通にはカラケシ等を多く使用した。カラケシは薪の燃え残りのオキをフタ付素焼の壺で密閉して消しズミにする。これがカラケシである。食料油も乏しい。これも蠟に似た代用油であった。冷めると真白くなり、食べられないから温い間に食べねばならない。そんなだから石ケンなどは、当然不足する。その代用に各家庭では、カマドの木灰をバケツに取り、水を注ぎ、その上澄みを洗濯に使用した。つまり灰のアクを利用したわけである。またタバコにまつわる話が残っている。

当時の配給タバコは「金鶏」と言い、細巻きが一日四本位だったか、それと抱き合わせに刻みタバコそのものがあり、「のぞみ」と言い手巻きで吸った。その刻みタバコを各家庭では紙テープの端を固定し、一端を細筆のようなものでロールして上手に巻いたものである。

それにつけても、タバコ不足を桑の葉、イチヂクの葉等を乾して代用タバコにしたが、満足できるものはなかった。そんな頃、街中では暫く、「モク拾い」と呼ばれる人たちが道路の吸殻を集め、それをほぐして集め再製し、闇のタバコとして売買していたものである。

話はつきたるところを知らない。全くと言えるほど何も物のなかった時期なのに、あるところにはあるもので、敗戦となるとどこからともなくゾクゾクと姿を現わし始めた。だがそうなる流通する金が問題になる。物はあるがその価格は日毎にはね上がり、果てはとんでもない値段をつけて当然として売り出している。そこまできると世の中、金の問題、たちまちインフレとなった。一方で犯罪も続発する。日々の生活は一瞬のゆだんも許さない。欲しい物が見当らない。物が無いのではない。値段次第でどうにでもなるわけ

ある。安いサラリーマン生活はなかなか苦しい。

思えば当時メチルアルコール（これは航空燃料）が流通し、私も同窓会で飲まされ、ひっくりかえったことがある。しかし、一般にそれが出回り、失明者がかなり出て新聞を騒がせた。かたや密造酒（ドブロクを蒸留して）に味付けのため、ダイナマイトやネコイラズを微量だが混入し、取締りを避けるため水枕に詰めて運んでいた。これは糖分の代用であるが、後にズルチンとかサツカリンが出回り、遂にはシソ糖と呼ぶものも生まれた。

この頃になると、街の人達は物々交換でずいぶんぜいたくな物を食糧と取引した。ある日、配給品以外に闇物資をこぼみ続けた大学教授一家が栄養失調死したのを新聞は報じた。闇物資の善悪を問う以前に生命がかかっている。それを取り締まる立場の人には、

自給分物資か闇商人の物資か、厳密な区別はできなからう。まして取締官自体、配給分だけで生きられる訳はないのである。国鉄の列車は人と物でギョウギウ詰め。窓からの乗降は当然のこと。網棚さえ物と人で占められている。

運び屋で生活を立てている人達は、駅毎に警察官との鬼ゴッコになる。取締りの情報もロコミで速い。一瞬の雰囲気は冷風を呼ぶ。目的駅に停車直前の徐行中に降り口と反対側に出迎える人を待たせ、物を落す人。物と共に自ら飛び降りる人。そのたぐいの私の知人が両手両足を列車にとばされながら、九死に一生を得た。今どうしているか、時には思い出すこともある。ちなみにその人は女性である。戦後強くなったのは女性と靴下と笑えるだろうか。女性はそのだけ純粋である。

こんなざわめきの中、日増しにインフレは昂じ、政府は遂に平価切替えに踏み切った。このことはある程度、予想されたことであつたので、金のある人は物に替えようと大わらわであつた。だがそうなると売る側もそうはいかない。少々高くても無知な人や情報の遅れている所から物を探した。だが、困つたのは同じ物と言っても不動産を抱えた旧地主連である。身内の一人一人名儀の山林に分けたりしても限りがあつた。もちろんこれが政府の方針であるのだから仕方はない。何月何日をもって新円とする。その臨時新円は二十円が限度で、二十円分のシールが隣保組を通じ配られ、旧紙幣はこのシール分だけしか通用しなくなった。つまり現金はこれだけで全国民がスタートした。私はこれをもって新しい赴任地へ向い、岡山駅のベンチで握り飯を浮浪者にねだられた。立って見ていられては

食べられるものではない。それは大変な時代であつた。

うん婆の一人芝居

S・Aさん 54歳

摂津市香露園

おお寒うなつたのう。今日は坊が眠るまでのあいだ、ちよっと、うん婆の話でもしようかいのう。昔、昔のその昔の話じゃとて聞いてろ。うん婆が大阪市から摂津へ疎開した頃の話じゃ。昭和十六年には太平洋戦争とかで日本の国中の男がみんな戦場へ狩り出されてしもうた。「老いも若きも」「強きも弱きも」じゃ。もう内地には、ほとんど男けは、のうなつてしもうとる。丁度うん婆が少女の頃じゃつた。「紀元は二千六百年」の歌や「昭和、昭和、昭和の子ども」の歌が流行つてのう。うん婆もよう歌うた。今なお覚えとるで。うん婆の母さんののう、病弱で体の調子が悪うて病床から離れてしもう

たのじゃつた。うん婆は国民学校から授業を終えて帰ると、いつも寝床の裾からもぐり込んで勉強し、宿題をしたもんじゃ。ほら、さっき歌ったうたがあろうが。大きい声で歌とうては子供ながらに戦勝気分得意気じゃつた。

病気の母さんを喜ばせようとなあ。喜び笑顔をつくる母さんを見とうてなあ。母さんもいつしか覚えてしもうては、力弱いが一緒にも歌うてくれたもんじゃ。ところが、昭和十五年五月、突然母さんは、うん婆たち四人の幼い女っ子を残して昇天してしもうた。うん婆はこの大事を知りかねて、よう葬儀に来てくれる客のにぎわいに大喜び、はしゃいでおったそうな。

この頃からぼちぼち日本の戦争の旗色も悪う成りよつてのう。灯火管制がきびしゅうなり防空訓練をさせられてのう。夜は電気をつけにくうて黒い暗幕の下で、こっそり勉強したもんじゃ。

姉妹のうち一番あほうなうん婆は、それでも一生懸命勉強して望みの大阪市内の女学校へも入学がかのうた。じゃがなあ、どうじゃ、勉強はおるか女学校のなかがすっかり工場に変えられてしもうた。うん婆たちはのう、学徒動員とかで日がな一日ミシン掛けの女工さんに早変わりじゃ。うん婆は毎日毎日、持ち分の作業服を仕上げたもんじゃつた。

戦局は日増しにきびしゅうなつて、内地は空襲々々の爆撃で逃げ場ものうて、あたり一面火の海、焼け野原に化してしもうたもんじゃ。うん婆の大阪の家も店もこの時焼けてしもうて、今じゃもうなんにもありやらん。学校はといえばのう、校内工場じゃ、らちあかんのか。郊外にある軍需工場へ回されてのう、油とスパナを握つて「トラック野郎」よろしくエンジン掃除をするのじゃ。心臓部にあたるピストンを

なあ、この油よこれしたどろどろをガソリンで洗うと美しゅうなるのじゃ。ピストンのひややかな美しさは見事なものじゃと感じると同時に、うん婆はその仕事に氣に入つてのう。特にエンジンの分解と組立作業をする時は我を忘れて頑張つとつた。兵隊さんに、進君進君と氣に入られてのう。乙女心も手伝つてかいのう。楽しい日々じゃつた。戦争中とは思えなんだ位、幸せいっぱいじゃつたのう。

いよいよ飛行機がなく爆弾が足りなくなつてきよつたらしく、こんどは氣球爆弾作りじゃとて、うん婆たち乙女部隊は特殊なおりと紙で一生懸命に氣球を作つたのじゃ。軍属の兵隊さんのきびしい監視のもとにのう。絶対の秘密厳守でのう。こんな日々の明け暮れのと、昭和二十年八月十五日突然の終戦じゃ。敗戦の報に皆んな涙しよつた。学生は即時帰宅せよの命令が出る

やいなや帰らなならん。電車は動いとらんでのう。遠い道のりを歩いて帰るんぞ。びっくりしたが、しかたない。線路の上を枕木まいで歩いたでのう。「ぐずぐずしよると米兵がすぐ上陸してくるぞ。女、子供は氣をつけろ」のデマに迷わせられながら、泣き泣き友と手をとって合つて歩いた歩いた。しかし、淀川の鉄橋の上を越えるのは、さすが恐ろしゅうて足が前に出なんじゃつたで。はいつくばつてどうして渡り切つたか覚えとらん。神に祈り、母さんの面影に必死じやつたことだけが、今腦裏にひらめくだけじゃ。おかげでラジオ放送された天皇陛下の終戦の言葉が聞けなんだことが残念じやつたのう。

次は、さあダビの火の思い出じやがのう、昭和十九年八月三日のことじゃ。丁度終戦の一年前のことじゃ。うん婆の父さんが持病の胃潰瘍で昇天したかのう。坊の大じいちゃまじや。小柄で病身者じやつたから、戦争にも軍属にも召されなんだ。うん婆にはとつても厳しい恐い父親じやつた。親戚の叔父たちはこの父さんのことを「全身これ頭腦の火の玉じゃ」と渾名したとかさ。それ程に目先のきいた人らしかった。しかし、母さんが先立つてしもうて、その淋しさは娘達には理解できなんだのう。薬ものうなり医者もいなくなり、助かる者も助からんで死んでゆく時代じゃ。

さすがの父さんもつらかつたろうよなあ。でも、坊の大じい最後の最後迄しつかりしとつたでのう、まさか死ぬとは思うとらんだつたでのう、それがもの言えぬ人となつた時の悲しみは、娘のうん婆には耐えがたかつた。母さんの死なれた時とは、又ちこうした淋しさが身にしみたまんなあ。当時は火葬でのう。それに薪が少のうて燃え切らんと……。その上空襲にでもなれ

ば目も当てられん始末じゃったそうなの。
心配させられたが運よう警戒警報も出
ずになあ。それでも気掛かりで、帰宅
しても、はるか山手の方を見ては煙の
色を心配しとった。翌日、骨あげに行
くと、父さんの金歯が焼けてにぶい銅
色に変色してポツンとあった。これを
大切に持ち帰り仏壇にしようとした。
昔は「金」類はすべて献納か没収され
たでう。うん婆が結婚する昭和三十
二年三月、父さんの歯を再生してリン
グにしてもろうたのじゃ。父さんの歯
がうん婆の指にささつとるのじゃ。嬉
しかったのう。

父さんの唯一の形見じゃでう、う
ん婆のこの指をみる。立派じゃろう。
どんなダイヤよりも立派じゃぞ。

坊には、こんな話ちいっとも面白ろ
うなかったろうが、よう辛抱して聞い
とくれじゃった。うん婆にとっては、
一生一度の重大な出来事ばかりじゃで

のう。うん婆のたった一人の娘っ子と、
たった一人の孫っ子坊に聞かせておき
たかったのじゃ。よう覚えとくんぞ。
悲しみ泣いて苦しみ泣いて何度死のう
と思ひよったか。しかし頑張つてここ
まで来たのじゃ。うん婆の半世紀じゃ
でのう。職業婦人に徹してやつと、昭
和六十年一月八日勤続二十年を手にす
ることもできた。うん婆もこれからは
泣くまいぞ。次は二十一世紀へ向けて、
たゆまず一人歩きじゃ。うん婆のこと
は心配するな。うん婆はのう「戦争と
平和」そして「平等」とは何かをもう
少し勉強してみたいのでなあ……。坊
の成長を静かに夢みながらのう……。

空襲と戦災―戦争中の日記より―

H・Yさん 58歳

摂津市正雀本町

はじめに

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発。多大の犠牲を払って、やっと終戦（昭和二十年八月十五日）を迎える。

そして、尊い平和切符を手にして早くも四十年を経過。だが最近の新聞紙上によれば「防衛費一%突破も」なぜか、しのびよる軍靴の足音が、そこまで来ているように思えてならない。絶対に戦争を起こしてはならない。絶只々、世界平和を祈るのみ。

戦争中の日記より

昭和二十年六月十四日（木）晴。当時十八歳の私は、大阪北部のT電機に勤務していた。幸い工場の敷地が大きく、遊休地を利用して社員一同が菜園

をつくり、食糧難の時代、大いに助かった。収穫した大根を持って我が家（大阪市東成区東小橋北之町〇〇〇〇）へ。環状線、玉造駅下車。帰ってから、父といろいろ話をするが、いつになく今日は次々と話に花が咲いて長話になる。妹に促されて会社の寮に帰る。（寮生活をしていた友達のところまで泊まっていた）

昭和二十年六月十五日（金）曇。朝八時すぎ空襲警報発令。二十分後、大阪城東南並びに東方面投弾の情報あり。その直後には煙がモクモクと上がる。京阪神の鉄道沿線にも投弾。来襲の敵機三百機以上。空は煙と砂塵で、墨を流したように暗くなり、正午近くまで夜を思わせる程であった。次々と投下される油脂焼夷弾は、ザーと砂をふるい落したかのような音をたて、その間を縫って爆弾がドカン、ドカンと大音響。もう生きた心地がしない。幸い会社は無事。午後二時半、全社員退社す。

交通機関は全面的にストップ。止むなく徒歩にて、我が家は如何々と案じつつ急ぎ帰途につく。道中、空爆された家々の焼跡からは、残り火が軒並みにメラメラと赤い舌を出して燃えていた。やっと家に辿りつく手前で、友達に会い、我が家が全焼していることを聞く。今まで人ごとのように聞いていた戦災も、容赦なく我が家をも火焰に包んでしまったのだ。すぐ罹災者収容所である小学校へと急ぐ。気が滅入っている上に、断水、停電の二重、三重のパンチ。暗いわびしい教室で、焼跡からチロチロと燃える火を見ながら無事だった父と妹と共に一夜を明かす。昨、十四日夜、虫の知らせか父と歓談したのが、愛する我が家との訣別だったのだ。感無量。

六月十六日（土）晴。今日は焼跡の掘出しにいく。防空壕に入れてあった

布団、タライは焼失。他の物は煙で、くすぶっていたが助かる。

六月十七日（日）晴。今日も焼跡の整理にいく。

六月十八日（月）晴。罹災四日目になると収容所の待遇も悪くなってきた。

六月十九日（火）晴。夜十一時、情報が入り静岡、浜松方面を空襲。

六月二十日（水）晴。家を失ったので上司に頼んであった入寮が、許可され入寮す。

六月二十一日（木）焼け残った物品を荷車に積んで、夜十時、父と一緒に焼跡を後にして疎開先の摂津市別府へと歩み出す。長柄橋南詰まで来れば空襲警報発令。急ぎ橋上を渡る。半ばまで来ると、過日の爆撃で破損した大穴が各所にあり、危険極まりない。油断すれば荷車もろとも飲み込まれそうだった。警報解除になった途端、今までの緊張感がなくなり一ぺんに睡魔が襲う。

淀川の堤防上で仮眠のため一休みするが、蚊の大群に襲われて仮眠も、ままならず発進。うつら、うつらと荷車に寄りかかりながら、午前四時、やっと辿り着く。

六月二十二日（金）晴。夜八時三十分、空襲警報発令。主として中国地方及び明石、姫路方面、広島、呉等、各地に亘って来襲。その機数六十機なり。解除は午前零時になっていた。警報が出る度に、会社へ急行して護る任務があった。

六月二十三日（土）晴後雨。警報なし。

六月二十四日（日）雨後曇。

六月二十五日（月）晴。会社の宿直。

六月二十六日（火）曇。朝八時頃、空襲警報発令。ウン、ウン、ウンと、唸り

声を立てながら今日も又やってきた。敵 B 29 は重爆撃機を主力にして、本土を情け容赦なく襲う。

近畿、中国、四国並びに東海軍監区に亘る広範囲だ。主に爆弾投下。近畿地区だけで百機来襲。大阪市内各所も被害。十一時になってやっと解除。夜は十一時に警戒警報発令。敵編隊は大挙して名古屋方面来襲。

六月二十七日（水）晴。警報なし。

六月二十八日（木）晴。午前零時、警戒警報発令。同一時二十分解除。

六月二十九日（金）午前二時十八分警報。敵機は大挙、備前岡山を襲う。同四時十五分解除。朝まで少しも眠られず眠い。

六月三十日（土）小雨。珍しく三日間

七月一日（日）曇後雨。警報なし。

七月二日（月）晴。

七月三日（火）晴。朝から蒸せかえる程の暑さだ。公休日を利用して、奈良県

の妹のところへ半年ぶりに面会に行く。真ッ黒に日焼けして、懐かしく、「兄

ちゃん」と呼んで、へばりつく。その
いとおしさは忘れられない思いだ。い
ろいろ話をして四時、駅まで送ってく
る。「元気でなあ」と別れ、車中の人
となる。夜十一時五十分空襲警報発令。
翌四日、午前三時半解除。主に姫路を
襲う。

七月四日（水）晴。警報なし。

七月五日（木）晴。午前一時四十五分
より午後六時迄、六回も警戒警報発令
される。

七月六日（金）晴後雷雨。警報なし。

七月七日～十四日迄、日記帳に記入
なし。

七月十五日（日）午後零時半、空襲
警報発令。小型機、主力は東海軍監区へ。
夜に入って又々、空襲警報発令。

七月十六日（月）晴。敵機は大型、
小型で来襲。連日連夜だ。

七月十七日（火）雨。中部情報が入
るが、敵機は大阪には入らなかった。

七月十八日（水）警報なし。

七月十九日（木）午後十一時三十分
空襲警報発令。主力は福井市、尼崎市
に約五十機。解除は午前一時。

七月二十日（金）

警報なし。

七月二十一日（土）

七月二十二日（日）晴。夜、警戒警
報発令。直ちに会社へ急行。夜空は、

満月皎々として月青し。昼をあざむく
程明るい夜空だった。

七月二十三日（月）晴。警報なし。

七月二十四日（火）晴。朝五時に早
くも警戒警報、六時頃に空襲警報発令。

八時半迄に、小型機（P51）並びに
艦上機が来襲。伊丹付近を機銃掃射。

九時前に大型機五十機から百機の大編
隊が現れ、大阪の中央部並びに西北に
投弾。十四時ごろまで続き、やっと解
除になる。何と空襲時間は七時間、今
までの最高記録だ。

七月二十五日（水）朝六時半から空
襲警報発令。十時頃まで続く。

七月二十六日（木）午前零時から一時
まで警戒警報が続く。

七月二十七日（金）警報なし。

七月二十八日（土）晴。朝より空襲。

夜十一時過ぎ又もや空襲。翌二十九日
午前一時半に解除。

七月二十九日（日）むし暑い一日だっ
た。夜、警戒警報発令は二回ある。

七月三十日（月）今日も、むし暑く
汗が出通しだ。朝五時半まえより空襲
警報。伊丹方面で機銃掃射の音が、も
のすごく、はげしく鳴り響いていた。

正午すぎ会社の上空で爆音がしたかと
思うと機銃掃射音がし、煙硝の臭いが
する程、近かった。解除になったり、
発令されたり、一日中爆音がしていた。

七月三十一日（火）晴。警報なし。

八月一日（水）晴。夜半に二回、空
襲警報発令される。

八月二日（木）晴。警報なし。

八月三日（金）晴。気味が悪い程、

八月四日（土）晴。静かだ。

警報なし。気味が悪い程、静かだ。

八月五日夜、九時半警報発令。一旦解除になって、翌六日午前一時十九分、

空襲警報発令と同時に、西宮付近にて焼夷弾及び爆弾投下による火の手がある。火焰もうもうと、もの凄く、あの憎いB 29が焼夷弾を、雨霞と落下させる。又、布施市及び築港南部にも投弾するやパツと火の手が上がる。二時間後解除。

八月六日（月）警報なし。

八月七日（火）晴。朝、九時二十分空襲警報発令されるが、やがて解除になる。

八月八日（水）晴。大詔奉戴日（毎月八日）である。敵は益々、頻襲を加えつつある。大本営発表によれば、一昨日広島に少数機来襲し新型爆弾を投下。

被害は大であると発表される。敵機から散布したビラによれば、三国く豊中間を爆撃すると書いてあったと友人が話をしていた。

八月九日（木）晴。警報なし。

八月十日（金）晴。ソ連が日本帝国に対し宣戦布告致せり。早やソ連の少数機は、北満・北鮮に来襲。又一部兵力は北満国境より侵入し来る。

八月十二日（土）晴。八月十二日（日）

晴。警報なし。

八月十三日夜、十時、十一時、翌十四日零時五十分の三回、警戒警報発令。尼崎より東北進し京都に向かった。新型爆弾の威力大のため、あわてて防空壕へ飛び込む。

八月十四日（火）九時すぎ空襲警報発令。正午前解除。

八月十五日（水）晴。朝、ラジオを通じ、本日正午に重大発表の放送があると知らされ、噂、取々にて昼の発表

までの時間が待ち遠しい。十一時五十分、全員集合のベルが鳴り、第三工場に集まる。遂に歴史的な昭和二十年八月十五日十二時になる。天皇陛下より終戦詔書下される。あれ程、必勝を誓って頑張つて来たのに敗戦とは。今日の日本晴れも、空一面に暗雲が閉ざしているようで気分は晴れない。

八月十六日（木）晴後夕立。……以降、路往く人は皆んな、頭をうつむかせ何かを考えながら歩んでいる。もちろん私もその一人だ。これから先どうなるのだろうと考える反面、灯火管制もない、空襲もない、いつ応召されるかの不安感もない。閉めつけられた緊張感より、やっと解放されたのだ。少しずつ明るい平和がやって来た実感が湧いてくる。決して離してはならない平和の御旗、国民皆んなが守らねばならない。子子孫孫に至るまで世界平和が続することを願って止まない。

信仰と繁栄

N・Hさん 74歳

摂津市一津屋

前夜からのラジオ放送は、米機による大阪市内爆撃の模様を報じていた。翌朝のラジオによると西区は全滅とのことである。私は夜勤を終えて帰宅すると、主家のことが気になり、早速自転車で出かけた。吹田市の西の端にある榎阪町から大阪の西区迄は自転車で約五十分の道のりである。私が丁稚時代から約二十年間住み馴れた西区一帯は全く灰燼に帰し、想い出のあの街、あの四ツ辻もまるつきり見当がつき難く、一面の焼野原と化し、まだあちこち燻っている所さえある。

ようように花の井橋畔の主家のあった辺を探し当ててみると、汚れ果てた主人夫妻が、折りしも焼跡のわが家の瓦礫を掘り返している。床下に埋めて

置いた愛蔵品を探しているとのこと。

主人は非常な仏教信仰家で、当時、越前永平寺第六十八世管長泰誓昭禅師に約十年前より心随され、その方の墨蹟を数多愛蔵され、心の拠とされていた。

当時、乏しかった食糧のうちから、私が母に頼んで持参した重詰のおにぎりとお煮べを差し出すと、主人夫妻は落涙された。中之島の中央公会堂に避難しているが、故郷奥州白河へ疎開するので、その準備のため、一日手伝ってくれと頼まれたが、私の勤めている軍需工場では、休暇などとても許可にならない逼迫した状況だったので、残念ながら大恩ある主人のご期待にとうとう添うことができなかった。

その後、白河に着かれたことや出征中の一人息子が戦死したこと、主人も亡くなられたこと、等々の悲報に次々接した。あとに残された奥様、お嫁さん、

一人の孫さんの消息も私には知る術もなく今日に至っている。

信仰に篤いお方の将来は、きっと幸福に満ちるであろうと信じていた私には、戦争ほど悲惨なことはないと、つくづく思っている。その上、丁稚時代から苦楽を共にした同輩、先輩、後輩等が今は悉く故人となってしまう、自分ひとりが生き長らえて、どうにか暮らさせて頂いている有難さ、千万無量である。世界中の政治家、統率者、実力者等々に私は訴えたい。

自分の名誉のため、自分の党のため等々ははかないものであることを認識されたい。

何よりも崇高であることは、世界中の人類の平和のために尽すことであることと肝に銘じて頂きたい。

神様が、仏様が、大宇宙が、あなたを見守っていられる。

思い出は哀し

B・Tさん 72歳

摂津市正雀

お父さん早よかえつといで

山でけんく鳴いていよ

幼子三人が戸外で手をつないで歌っている。「おーい」と夫は手を振りながら満面笑顔で急ぎ足で帰って来る。幸せな我家であった。

サイパン玉砕、敗戦の色いよいよ濃い八月二十四日、夫は沖縄へ出征した。五才、四才、二才、七十五日の愛し児を残して……。

「沖縄は本土攻撃の足場として狙われる」と、又「訳の分からぬ子等が毎夕父の帰りを待ちわびている姿を想えばたまらぬ」「自分のことは早く忘れさせてくれ」と生還を期せぬ覚悟を示し、私も「ぜひ命を大切に無事に還れ」と口まで出掛かったのを押え「卑怯なこ

とはせぬように」と言い、夫は深くうなずいた。心にもない言葉を今でも後悔している。昭和二十年、敵機来襲激しくなる。

三月十三日大阪大空襲。真紅に燃える空を睨み、留守中子一人も欠かさず立派に育てて見せると誓い、しかと抱き締める。夜毎の空襲に、くたくたの子を一人一人抱え壕に入れる。時には怪鳥のような敵機が頭上に迫った。日に二度、時には三度、子はこわがり、むづかった。

比島奪回され、沖縄攻撃熾烈となる。なまじ夫の居所を知る故に一人心痛む。長女入学。この日に米軍が沖縄本島へ上陸した。激戦の最中、父は子の入学を知るや否や？想いは如何許りだったろうか？翻る日章旗を涙で見上げた。麻疹猖獗を極む。子等皆感染する。四十度を越す熱に呻吟する。私等に親はすでに無く、使用人も去り、頼む人

も時節柄来てくれず、ひとり戦地の夫を案じ、子等の病を憂え、寝もやらぬ幾日、五月十二日早朝、警報にうたた寝の夢覚めて、ふと傍の子を見れば「あー」と一声忽ち顔面蒼白息絶えた。

生後十ヵ月。「あーちゃん」とだけ言えた子、物言えぬ故、静かに寝ていた子、苦しかったろうに、淋しかったろうに、母の目覚を待つてひっそりと逝った吾子よ、許しておくれ。子を惜しみ、夫を案じ泣く日々であった。

「お父様の身代わりですよ」と慰めて下さった。だが私は己れを責める。六月、沖縄玉砕する。昼夜の別なく小型機来襲、爆弾投下する。子の骨を腰に逃げまどう。

八月十五日終戦。引揚げ始まる。夫の安否を尋ね歩く。今日はく待ちこがれる。ある時、満員の復員列車を見送りうらやましくて泣く。よく停電した。闇の中で子等と歌う。

へお母様泣かずにねんねいたしましょう
明日の朝は父様の 帰るお舟を待ちま
しょう

等、悲しいにつけ淋しいにつけ歌う。

二十二年十月戦死公報来る。噂に沖
縄敗戦直後麻文仁の海に夫らしい人が
自ら命を断つたと聞く。「生きて虜囚
の恥めを受けず」だったのか……。

二十三年農地解放により財の大半を失
う。物価高騰・食糧不足。馴れぬ手に
鋤を持ち、ミシンを踏む。加えて度々
の台風の来襲、古い我家は修理に迫わ
れ、苦しい竹の子生活、口惜しい事が
度々あった。だが子等はバイト等で大
学を卒業。会社員として精進している。
私は今も亡き父子の齢を数え涙する事
もある。

十才の時の戦争体験談

N・Kさん 48歳

摂津市千里丘

私は小学校三年生のとき、愛媛県宇和島に住んでいた。戦争がそれほどひどくない時など、和霊神社の森を子供達は、「和霊様」と言って呼び親しんでいた。家の前には大きな川があり、潮の満ち引きがあり、山手にはみかん畑がある。のんびりした農家のある所だった。小学校は海岸通りにあって海辺に近い住吉小学校といった。子供達は学校から帰ると、友達をさそい和霊様にある銅像の馬にのって遊んでいた。年に何回か闘牛があり、よく見に行った。

秋のおまつりにはみこしが出て、浅瀬の川の中を走りまわり、みこしどうしがはり合いをし、黒い大きな牛鬼が出る。大人の男性三十人ぐらいが中に入って担ぎ、家を一軒一軒回り、「ボ

アー、ボアー」と音を出しながら首を二階の窓から突っ込み、部屋をのぞく。赤い牛鬼は小さく、子供達が三十人ぐらい入って、ブーブーと音を出しながら、平家の玄関からのぞいて通る。鹿の子おどりも出て、とても楽しく、暮らしていた。

終戦になる一年前、戦争もだんだんひどくなってきた。朝、学校へ行く途中、警戒警報が鳴る。するといつもきまって低学年、四年生まではすぐ家に帰り、五、六年生は、学校を守るためそのまま残った。いま思うと、小さな子供達がどうして、大きな学校を守る事ができるのか考えてしまう。途中で帰った子供達は一つの家に集まり、自分達の勉強をしていた。こういう状態が、たびたびあった。そのうち、昼となく、夜となくB 29が飛んで来るようになった。そのため、子供と老人は、家にいると危いと言うことになり、山のみかん畑の下に横穴を掘ることに

なった。多くの人達、男女が、毎日、せっせと穴を掘った。数日がたち横穴はできた。コの字形に作られた。三百人以上入ることができる大きな横穴だった。横穴の中は、両横に寝台を作り、そこで、子供と老人は寝起きをする事になった。家では若い男と女が住んで家を守り、空襲警報が鳴るとあわてて横穴へ逃げて来るような生活がつづいた。

私の家は、川の土手にあり、土手に沿って柳の木が植えてあった。農家の人達は一段さがった所に集まって住んでいた。私は、一人っ子なのでいつも友人の家、近所の家に遊びに行っていた。ある日、急に警戒警報がなり、つづいて空襲警報に変わった。私は友達の家に行ったので早く横穴へ行こうとした。友達はいち早く横穴の方へ走っていた。どうしたのか私は台所の方へ行って外へ出ようとしていた。そのとき、急に、ドシンという音が聞こえ、

建物が揺れて、風が、さあっと吹いてきた。あとは土けむり。家のカベが落ち、台所の天井が落ちてきてもう外に出られない。どうしようと思っっているとき、何かの中に、すっぽり入ってしまった。横に倒れてしまいどうすることもできず、もがいているだけ。そのうち、頭上の柱が落ちて来て首が動かなくなった。ただ足だけをバタバタしながら、なんとかしてこの場から出ようともがいていたが、なぜか、ぬるぬるとしてすべり、思うように動けず、モンペも、靴も、ビショビショになり、半ば泣きながらもぐだけだった。しばらくすると、あたりも静かになり、土けむりだけが舞っていた。遠くの方で、おとなの人達が、ワイワイ、騒いでいる。中の一人が、大声を出し、「誰かいるのか……」、と言いながら近づいて来た。

男の人がガレキの山を払いのけながら、飛んで来た頭の上の柱をのけ、ひっぱり出してくれた。「あつ助かったあー」と思った。あたりを見ればもう、めちゃくちゃになっている。形が全部変わってしまった。足もとに目をやると、大きなカメが、転がっていた。私が入っていたのは、このカメの中だった。飲み水を入れるカメ。でも、どうしてこんなカメの中に入ったのか不思議？ このカメのおかげで命が救われた。男の人は、「ケガはないなあー、よかった、よかった……」と言いながら、また走って行った。私は家に向かった。家には、父と母がいた。帰ってみると父が家の中から出て来た。顔は土ぼこりがべっとりついていて、かのこをかぶったようにみえた。母が見えないので裏にまわってみた。私は母の顔をみてびくりした。自分の首の痛みなどわすれ母にかけよった。母の顔が真っ赤だった。赤い布をかけたようだ。目

も耳も鼻も口もみえない。血が流れている。「大丈夫」と言うと、反対に怒鳴りかえしてきた。「どうしてここにいるのか。横穴にいなければならぬではないか」と。私はあわてて横穴へ走った。そして母のけがのことを言った。みんなが走って母の許へ行き、病院へつれて行ってくれた。

しばらくして母は横穴へ来た。話によると、風がファツと顔をなぜて通ったようだったが、血がふき出しているのも気がつかないほど痛いと言うことは感じなかったらしい。目の上を三針縫い、顔にガラスがいつぱいササッていた。これを取ってもらい、首から上を、目と、鼻と、口を出しただけで、グルグル巻きにしていた。

父は、家の中を片付けていた。日もしだいに暮れかけている。家の中も、メチャクチャになり、何一つとして形のある物はない。土とほこりの山になっている。ある家の人で、どうしても、

横穴へ行きたくないと言って、いつも家の中にいた若夫婦と生まれて八ヵ月ぐらいの赤ちゃんがいた。運悪く、爆弾は、その若夫婦の家に落ちた。みるかげもなく、みんなバラバになっっている。大きな穴がぼっかりあいていた。赤ちゃんが、溝の中に、スッポリ、かわいいベビー服を着て、お人形のようにねむっていた。夫婦の姿はなかった。母と私は、ガレキと土の塊まりの中を探ってみた。とても気持が悪かった。怖かった。土のいやな匂いをする。父が「何か手にさわった」と言って、土の中から黒い塊りを持って来た。明るい所で見た。私はびつくり、こしがぬけんばかりに驚いた。「首だ、誰の首だろう」髪の毛がさかだち、目は大きく見ひらき、土でまっ黒になっている。父は置く所がないので、しかたなく、柳の木に置き、手を合わせていた。あつい時期だったので、ハエが、みるまにとんできた。血のおいにつられて……。

家の中からは、ドンドンいろいろな物が掘り出された。

つぎつぎに人の首が出る。二つも、三つも、そして白いワイシャツが肩がちぎれて。両腕がぶらさがっていたり、手首だけ、足だけ……。その他ぞうり、くつ、ゲタなど、たくさん出てきた。首が、三つもあったが、その中の二つは若夫婦のものであった。少し前までお話しをした人なのに……。「なんて、おそろしいことが」出てきたものを柳の木の根元にならべた。両腕は、柳の木の枝に引っかけてあった。置く所がなく、仕方なくそうしたのでろう。一夜があけた。すると、大きなトラックがゴウゴウと音をたてながらやって来た。そして、バラバラになっている死体を無造作にトラックの中に放りこむ。荷台の中は、死人でいっぱい。こぼれんばかりに、つみあげられていた。私は見ていた。なぜか、なんの感情も湧くこともなく。ただ茫然と見ていた。

市内には、このトラックが何台も、何台も走って行く。話にきけば、いろいろな人が、また病院の看護婦さんたちが、ふとんをかぶり、山手の方へ逃げていたが、ふとんに火がつき燃えて、もがきながら亡くなった。どこへ逃げても火の手が追いかけて来る。物が倒れる。ガラスがとけて流れて来る。人と人がぶつかり合い、踏みつけられて倒れる。逃げる人の頭に焼夷弾が落ちる。焼け死んだ人で数えきれない。宇和島市内は、ガレキの山と死体の山で、焼野原になってしまった。

その後からも、毎日のように空襲があり、その度に爆弾や、焼夷弾が空から降ってきた。横穴の上のみかん畑にも、一トン爆弾が三つも落ちて、大きな穴が出来た。横穴に入っている時、爆弾の落ちた音を聞いた。頭の上で地響きがして、ズシン、ズシンとにぶい音。耳が裂けんばかり。頭を踏みつけ

られるような感じがした。でも横穴は無事だった。

私の家は爆風でやられ、住むことができず、終戦までに三度も家を変わったが、そのたびに焼かれてしまった。焼けて骨だけになった家の柱には焼夷弾が何本もひっかかっていた。みんな不発弾だった。こう言うことが長くつづくと、人間は、臆病になるのか、神経質になるのか、車が通っている音を聞いても、ビクビクし、いつも、耳をさかだてて、すぐにでも逃げる事ができるように身構えているのだ。そして、「爆音、爆音」と言いながら横穴へ走りこむ。学校も何力月も休みになった。米軍も頭の良い攻め方をし、人間が逃げないように宇和島を中心に、囲りから攻めて来る。中心地に住んでいて、家の床下に防空壕を作り、入っていた人達はみんな亡くなった。私達は、山に作った大きな横穴に入っていたおか

げで助かった。とても、恐ろしいことであつた。悲しいことであつた。

どの人達も、一日も早く、戦争が終わることを望んでいた。それから天皇陛下のお言葉が流れ、長かった戦争も、やっと終わった。

大人達は、食糧をもとめて、買出しに走り、焼けた跡片付けに一生懸命励み、バラック建てがめだち、人間としてやっと生きて行くことができ、今日に至っている。小学校三年生のときの、このおそろしい戦争体験は、私が生きているかぎり、頭から離れることはないであろう。また、二度と戦争を起こすようなことは避けなければならない。国のためにも、家族のためにも、そして、世界のためにも……。

平和を！

I・Mさん 41歳

摂津市浜町

「早う家に入りっ！爆弾落されるよっ！」と言う、ご近所のおばさんの声が――。

戦争のことは、実感としてありませんが、ただこの言葉だけが――。

その当時、私は、香川県三豊郡大野原町にいました。幼かった私ですが、今でも鮮明な記憶として残っています。

ご近所の庭で遊んでいた時、低空で飛んで来る飛行機を「大きな飛行機だなあー」って見上げて喜んでいたら、おばさんが、「早よう家に入りっ！爆弾が落されるよっ！」と叫んで、私を抱きかかえ家へ走り込みました。

これは、終戦後の出来事のはずですが、日々の生活の中に戦争の恐怖が去らぬまま強く残っていたのだと思います。

ところで、私は数年前の夏に、観光先の一カ所として広島を訪れました。

原爆ドームは、本などで見たことはあったものの、目の当りにした時には、一瞬釘付けになりました。

壁が焼けただれて落ち、鉄の骨組みは、むき出し、曲がっている……。

すさまじいばかりの惨劇だった……

と物語っていました。胸がジーンとして見上げるドームがかすんで見え、「ピカドン」「広い焼け野原」「人間が枯木の山となった」「頭の中には、いつか読んだ本の一部が浮かんできて物見遊山でこの広島を訪れたことを後悔しました。

後悔しながら、心の中で謝りながら、千羽鶴などで平和の願いが込められている碑を拝し、次に原爆資料館へ行きました。

資料館には、原爆の熱線でアメのように変形した一升瓶、お皿、ガラス類、

ぼろ／＼に焼けた多くの衣類、そして惨劇を伝える八時十五分で止まった時計……など。

焼けた学生服には、白い名札が残っていました。その名札は、日本中に、いいえ世界中の人々に「平和」を強く訴えているように見え、強烈に私の胸に残りました。

私は、多くの原爆の資料を見ているうちに胸が一杯になり、息が詰まるように涙が出てきて仕方なく、しっかりと見ておかなくては、見なければと、強く持つように頭張りましたが、とうとう館内を回り切れずに外へ出てしまいました。（再度、この原爆資料館を訪れる機会があっても、私は全ての資料をしっかりと見る勇気がなく、悲しみと恐しさでまた途中で出てしまうでしょう）

特に、血気の盛んな若者たちが、この広島を訪れ、原爆の恐ろし

さを胸の中に「ズシン」と残し、若いエネルギーを「平和」のために使うことに向けて欲しいと切望します。

平和への願い、核兵器廃絶の願いは、誰の心の中にもあると思います。

平和は、私たちの日常生活の井戸端会議の中にもあるのです。みんなが小さなく力を出し合い、手をつなぎ協力してしっかりと考えて、この地球を守っていかねばならないと思います。

草木が緑々と育ち

新鮮な空気が満ちあふれ

子供らの楽しくはしゃぐ声や姿が

お年よりに、幸せ一杯の笑みが浮かび

若者のエネルギーが平和の素となり

一人一人が考え、

取り組んでいかねばならない

この地球の平和を！

心に平和の砦を築こう

―母から聞いた戦争、そして平和の尊さ―

D・Kさん 40歳

摂津市千里丘東

中国残留日本人孤児……、私はこの言葉を耳にするたびに心が痛みます。戦後四十年たち戦後は終わったといわれる反面、中国で取り残された孤児たち、そしてわが子を中国に置いて帰ってこなければならなかった親たちにとっては、戦争は終わることなく続いていたのです。心の痛みをひきずり続けるためには、あまりにも四十年の歳月は永すぎたのではないでしょうか。戦争がいかに多くの人々を不幸にし、大切な生命を奪ったのかを忘れてはならないと思うのです。

私は、昭和十九年に大阪市東区で生まれました。両親は、大ぜいの人を使つて船場で商売をしておりました。当

時わが家は大手前のお府庁のすぐ近くにあり、幸福な生活が続いていたのです。私が生まれた昭和十九年以後空襲がはげしくなり、B 29が編隊を組んで飛んで来て、日夜サイレンの音が鳴ると、家の下の防空壕の中に逃げたそうです。夜は灯火管制（電灯に黒い布をかぶせて外から見えないようにしたもの）で、「いつサイレンが鳴るかもしれない」と、夜もゆっくり眠ることもできなかつたのです。

私の母は現在七十七才になりますが、戦争の記憶は今もって鮮明に覚えており、今回ひとつひとつを確認するように当時の様子を語ってくれたのです。

昭和二十年、戦争は終局に向かつて、戦火が一段とはげしくなりました。大阪府庁の屋上に焼夷弾が投下されて燃えはじめ、三越周辺は一面火の海と化し、家のすぐ近くにあった三和銀行の地下防空壕の中に逃げこんだ人は全員

助からずに、死体が折り重なって山のようになっていました。道行く人々も直撃弾を受けて、バタバタと目の前で死んでいきました。母は子供五人を連れて逃げまどい、生き地獄さながらの姿を一生涯忘れる事はできないと言っています。

空襲のあった翌朝、広い大阪城公園には、家を焼かれた人々が避難していて、数えきれないほどの列であったといえます。毛布や布団をかぶって続々とやって来ました。わが家も当然丸焼けです。疎開するために荷造りを完了してあった百二十個の荷物は全部焼かれてしまいました。

当時、両親は鳥取に松根油（石油に変る油）の工場を持っていましたので、そこに疎開しました。見知らぬ土地で、十才の子を頭に五人の子供をかかえて、母の苦労は言葉ではいい現わせません。（父はその頃大阪に残っていました）

鳥取では雪は軒先まで降りつづきました。わらぐつにマントといった姿で、物資はすべてが配給制で、受け取りに行くにも猛吹雪で顔にきつくあたり、強風で田んぼに飛ばされることもたびたびでした。慣れぬ雪国での生活、とりわけ天候不順のため、私とすぐ上の姉とが急性肺炎にかかり生死をさまよい、三日三晩、一睡もせずに母は看病してくれました。知らない土地で、母はどんなにか心細かったでしょう。

母が言うには、私が五才になったばかりの頃、私は時々たずねてくる父親を「知らない人」といって泣いたそうです。母が疎開先で一番苦労したのは食糧です。何もかもが配給の時代ですから、お腹いっぱいにはなりません。育ち盛りの子供に少しでもたくさん食べさせてやりたいと、川原を掘りおこしてイモを作り、稲の実る前にイナゴを取り、焼いて食べさせたり、山へ薪

を取りに行ったり、わらぞうりを作って子供達にはかせました。物質的に豊かな現在からはおよそ想像もつかない苦勞をしていたのです。疎開先で苦勞していた母の年令と、現在の私の年令が同じなのです。母のように忍耐強く、強固な意志は私にはとありません。

戦後もようやく落着きをとりましたが、昭和二十四年に大阪へ帰って来ました。日本は敗戦のショックから、人々は生きる目標を失っていた時代です。その中で、私の両親はひとつの目標を持ったのです。両親の時代に起こった戦争というものの、こんな恐ろしい、醜い、勝者も敗者もない、無益なものを再び繰り返してはならないと誓ったのです。自分達にはそれを止めるだけの知識も知恵も考える自由さえもなかったのです。一人ひとりの大人がもつとしつかりさえしていれば、もしかすれば戦争は防ぐこともできたのではないかとの

思いであったのです。「これからは決して無知であってはならない、子供をきちんと教青しよう」と決心したのです。とりわけ父は教育熱心でした。しつけの面でも大変きびしい人でした。文学書や伝記を好んで私達に読ませました。子供を立派に育てて社会に送り出すことが、自分達に残された使命との思いが私達にも伝わってきました。

その甲斐あって、長兄と次兄は天王寺高校から国公立大学へと進学し、姉も天王寺高校から貿易会社へと進むことができました。どんなにつらいことでも、決してくじけることのない強いものを、私たち兄弟姉妹は両親から受けたように思います。母はいつも口ぐせのように言います。「地位もない財産もない親だが、教青という心の財産を五人の子供達に残してやれた」といいます。今にして思えば、両親は私たちにかけがえのない最高の財産を残し

てくれたように思います。私はすばらしい両親に育てられたことを誇りに思います。

戦争のない平和な毎日が続くことを願いながら、かつて日本も戦争という不幸な時代があった事を、語り伝えていかなければならないと思います。あの識者は「民衆同士の自発的意志の高まりによる文化交流こそ、不信を信頼に、反目を理解に変え、この世界から戦争という名の怪物を駆逐し、真の永続的な平和達成を可能にすると思う」と述べています。

人類が生き残っていくためには、一人ひとりが心の中に平和の砦を築いていく以外にないと思います。

戦場

生と死の狭間

この戦場の地獄の真実

Y・Kさん 66歳

摂津市三島

私は昭和十五年一月より、現役兵として現地入営し、六年三カ月中国各地を転戦して終戦後、復員した。以来四十年を経たがその間戦争について、家にあつても外においてもあまり語ろうとはしなかった。それは軍隊という特殊な組織形態の中で、有形無形の批判や拒否の許されない絶対的な至上命令は、民主主義という新しい思想の転換の中で、どれ程理解されるものか、また興味本位に受け取られ、その真実をどこまで解ってもらえるのかと疑問があつたからだ。そして語ることが、戦死した戦友を思うとき、ともすれば自慢話に受け取られるのを恐れるのだ。そうした貝のように閉ざした口も、戦友会るときは胸のつかえを一気に吐き

出すように、時を忘れ話し合うのを楽しみにしている。

戦後、部隊史、戦記記録等が多く刊行されているが、戦場の死闘についてその真実をハッキリと記したものは数少ないと思う。終戦以来、時折聞いたことは、戦争中、日本の兵隊は中国で悪いことをしてきたということだ。また、ある私の知人もそうした質問を私にしてきた。私はこのままでは兵隊は悪者扱いにされてしまう、特に戦死した戦友は何も言えずに汚名を着せられては浮かばれない。生き残った我々はそのためにも、その不信と危惧を正さねばと思っている。

戦場という苛酷な状態はそれを体験したものではなければ理解は難しいものだ。戦場において彼我の対立は、生と死の選択である。生きるか、死ぬか、やるか、やられるか、生への執着は、

勝つか負けるかにつながる。生きとし生けるものの本能でもある。

そうした死闘の極限状態の中では、正とか悪などとかは存在しない。我も敵もすでに人間性を失った状態だ。相手をやらなければ、こちらがやられる。この地獄の中に正や悪などは存在しない。一コ分隊（十四、五名）である停車場の歩哨勤務についたある晩、二つ先（約六キロ）の歩哨が敵のゲリラ部隊の襲撃をうけて全滅した。軍に協力していた筈の中国人がその夜の警備状況を敵に密告していたのだ。四六時中、次は我が歩哨かと毎日緊張の連続で神経は休まることはなかった。鉄道の爆破はその合間に行われた。自分のいる足もとが敵地であつた。敵地であれば我々以外は皆、敵に見えてくる。戦闘員、非戦闘員の見分けはつく筈もない。十二、三歳の子供でも時には衣服の下に柄付手榴弾二、三発を持っている。

女、老人とはいえ一応は疑いがつった。

中国の江蘇省、浙江省は大小の運河（クリーク）が縦横に走り、桑畑や田畑が多く、日本軍の作戦は展開がでずに中央突破作戦となった。後退出来ない敵は、船の舳先が波をかき分けるように左右の地域へ逃げてゲリラ部隊となって潜行する。農民や民間人になって、我々の前を通りすぎても分からない。そうしたゲリラの動きを察して討伐行に出る。我々も中国服、中国靴で敵の中へ潜入する。敵と遭遇して戦闘は激しくなる。我方に戦死者が出る。戦友のかたきと神経は頂点に達する。（敵は日本の作戦をよく知っている。当時の中国軍指揮官は、日本の陸軍士官学校の出身者が多い。蒋介石も新潟の高田連隊で一時教育をうけている）民家に人影を見れば、その民家を焼き払う。そこに非戦闘員などの見分け

られる筈がない。敵もまた同じくやられたらやり返す、互いに復讐の連続である。

あの作戦の途中、浙江省の紹興の街に入った。ここは老酒で有名な紹興酒の産地である。一軒の造り酒屋に入ったが、人影はない。高さ五、六十糎位の瓶に紹興酒を詰めて五、六段程重ねて積んである。それを見た途端、この作戦で戦死した戦友を思い出し、その悔しさと明日は我が身かと、生の保証のない感情がつのって自制心を失った。銃などで瓶をつぎつぎと叩き割る。いつせいに瓶は崩れて土間は酒びたしである。我に返ったとき飲める酒は一滴もなく、勿体ないと顔を見合せる。

昭和十七年五月十四日浙贛（せつかん）作戦が開始された（作戦原因省略）。その参加兵力、歩兵八十五個大隊、野砲旅団、鉄道連隊（関東軍より）爆撃航空隊等、空前の大兵力が動員された。作戦完了

の二ヵ月間は雨期（中国では黄梅天）と重なり雨がなかったのは九日間である。敵は第三戦区顧祝同軍三十個師団約二十五万。その膨大な大兵力もさることながら、もつとも困難を極めたのは、雨と股ずれと水虫と食糧の欠乏だ。連日の雨で田畑も道も川も泥水となり、腰までつかりながらの行軍であった。水虫に侵された足の裏のかゆさに気が狂わんばかりにかきむしり、ただれてその痛さは言葉に言いあらわせない。その疲労した身に食糧の欠乏が追い打ちをかける。後送される筈の食糧、弾薬は到底追いつかない。退却した敵は我が軍の背後に回り、無装備の輸送隊を攻撃する。大半はやられて食糧は全く途絶えた。晴れ間を見て食糧の徴発命令が出た。

徴発とは物資を半強制的に買い上げることだ。それも先に物資を蒐集して、後続の經理班が村民に金を渡す。蒐集

した物資に相当した金額が支払いされたものかどうかは前進する我々にわからない。掠奪にもひどい状態である。まして当時中国の紙幣は種々雑多で、A省の紙幣はB省では通用しない。B省のはC省では駄目である。一軒の農家に入った。瓶の中に五合ばかりの米がある。その米を取ろうとしたとき、一人の七十歳位の老婆が出てきて手を合せてその米を取らないでくれと哀願する。逃げおくれたと言うよりてん足で逃げられなかったのだろう。無理に持ち去ろうとすると私の足にしがみついてなおも哀願する。とうとう何も取らずに引き場げたのである。飢えと言うこと、生きると言うことを常に死と背中合わせを幾度となく体験し、四十年を経たいま、六年三カ月は酷い歲月であったと悔悟している。しかしこれが悪と言われれば黙っておれないのです。

当時我々は国民の期待を担い、歎呼の声に送られて戦地へ渡った。敗戦となつて復員すると一変して我々の行為は非難された。一步ゆずつてそれを悪というならば、国政に参画した国会、府市町村の議員、報道関係、公務員、教員、作詩作曲家、出征兵士の見送りと、輸送関係者等、国民総てが何らかの形で、^{ほうじょ}幫助者になつてゐるのではないだろうか。戦場のこの地獄の有様を適切な判断で理解され、偏見もなく記述された記録、刊行物は少ないように思う。善必ずしも善にあらず。悪必ずしも悪にあらず。と言うがどこからが善で、どこからが悪か、この地獄の戦場でその線引きのでき得る者は果たしているだろうか。こうした戦場の残酷な行為を弁解するものでもなく、理解してほしいと乞うものでもない。それは読む人のご判断におまかせする。正確な判断は後世の史実家がしてくれるだろう。

とにかく戦死した戦友を思うとき、このまま悪の烙印をおされては、あまりにも可愛想でもあり、生き残つた我々のつとめと思い、貝のように閉ざした口を今こそ開いて、その真実を言おうではないかと、三年程前から戦友会で訴えてきている。我々はもう六十年代半ばを過ぎた。戦場の狂気性、おろかさ、むなしさを背負つて、戦友が次々と倒れていった。国民をこの苦界に再び立たせてはならないことを願うものである。

サイパン島での戦闘体験

T・Hさん 63歳

摂津市鳥飼野々

私は、昭和十九年七月七日玉砕した中部太平洋方面艦隊司令長官、南雲忠一中将を最高司令官として戦った、マリアナ群島、サイパン島の戦闘においての私の体験を「凝縮」して、将来の日本を背負ってゆく「若き青少年」の心に、戦争は人類にとって罪惡非道であることを認識し訴えろと共に、戦争を体験した人も体験しなかった人も、「現在ある日本の平和の重み」を深く噛みしめて欲しい。そして世界人類の恒久平和を願って……。

サイパン、テナン島は日本の遙か南二千余キロの太平洋に浮かぶ小島で、飲料水の乏しい島であるが、当時米軍の「戦略爆撃」から日本を防衛するためには、「絶対確保」しなければなら

ない要衝であった。昭和十九年六月十一日、七月七日の玉砕で、このサイパン島が米軍の手に陥ちて、日本本土が米軍の「航空戦略」により、B 29 (Boeing・B-29) の爆撃によって日本本土が文字通り廢墟と化し、広島、長崎に原子爆弾が落とされて、敗戦へと繋がっていった歴史は、日本人の誰しもが記憶に残っている事実である。

当時の日本人として……。サイパン、テナン島は、サイパン水道を隔ててすぐ目の前に見える島々だ。この小さな絶海の孤島に、怒濤の如く押し寄せた米軍を主力にした（アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ）連合艦隊の、航空母艦十五隻、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦・その他、大小艦艇・輸送船等、実に「八百隻」におよぶ大機動力を駆使し、ありとあらゆる膨大な物量にものをいわせて、制海権・制空権を掌握し、その兵力十

数万。それに対して守備する日本軍は、陸海軍合わせて僅か四万五千余。航空兵力もなく、乏しい武器で強大激烈な米陸海空三軍の猛攻に対し、我が守備兵はよく勇戦敢闘したが、僅か一ヵ月足らずで玉砕した。

その戦闘を一口にたとえて言えば、祖国を主人とする一匹の忠犬が、百匹の猛虎と、主人を護るために死力を尽して、血み泥の闘いの末に斃れてしまう状況であった。

米戦艦の四十五センチ砲は、昼夜を分かたず約一ヵ月、四方八方からまるで大きなドラム缶の雨を降らせるように、砲弾を撃ち込んで来る。重量一トン余もある砲弾の轟く音と炸裂する様は、「烈雷と激震」が同時に襲ってきたようで、全島が轟音と地響きに揺さぶられた。我が守備兵は怒濤の如く押し寄せる敵の大軍の上陸に本来、空を撃つための高射砲を上陸軍に対し、

“水平射撃”せざるを得ぬ有様であつた。

一発撃てば百発撃ち込まれて部隊は全滅する。六月十五日から十七日の二度にわたる必死の夜襲で、米軍に甚大な被害を与えるも、我が陸海軍の主力は米軍の反撃に全滅の悲運を辿り、なおも決死の反撃を繰り返しながら、

“七月七日”早暁午前四時を期し、サイパン北部のマタンシヤの浜辺、丘陵からタナバクの米軍砲兵陣地に向かつて、最期の総攻撃を執行してタナバクに布陣する米軍砲兵陣地を蹂躪。米軍砲兵大隊二個大隊を全滅させ、敵の屍を踏み越えて、敵陣奥深く遮二無二突込むこと、数時間余りで桜花の散る如く全員玉砕した。

食べる物とてなく水もなく、幼ない児を抱えた婦女子や老人達の群れは、戦火に巻き込まれて傷ましく爆死する者、負傷する者、飢餓に苦しみながら

戦火を遁れて島の北端のマツピ岬に辿り着いたものの、先は海でもう遁れる場所もなく、死に魅惑されたように、米軍の迫る中を、幾百幾千と数えきれぬ民間人老若婦女子や、幼児、乳飲み児と共に投身自殺を企て、南海の絶壁の海に身を躍らせて消えてゆく。負傷して動けぬ兵は“自殺”して自らの命を絶つ。あとに残った人びとも絶望の淵に追いやられつぎつぎと自決したり、「兵隊さん！私とこの子を一緒に殺して！」と、泣き叫び歎願する幼子を抱えた婦女子の姿。マツピ山の崖から飛び降りて樹木に引掛かったままの親子（胎児）の死体。見る者をしてこの世の阿鼻叫喚地獄さながらの姿を露呈していた。

七月七日夜半のこと、マツピ岬に残った海軍の司令部から一将校の命令により、「動ける者は全員ガラパンに集結せよ！！ガラパン、タッポーチョに残存

せる友軍と合流して、再度にわたる最期の総攻撃を執行せよ！！」時すでに遅く、私達が残るマツピ岬は、米軍の袋の鼠となり完全に包囲されていた。後ろは絶壁の海。進むも死、退くも死、ただ死あるのみ。今は中部太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将閣下（緒戦にハワイ真珠湾攻撃の司令官）は自決され、残った私達、軍人軍属は、銃口火を吹く敵陣の中間を突破して、「敵中縦断潜行のガラパン集結行」が始まった。すでに全島米軍に制圧された中での行動で、野を越え、山を越え、谷を渡り、浜辺を行き、丘陵を登る。途中にある地獄谷。

七月七日早暁の玉砕最期の総攻撃に、参加出来なかった数多くの負傷兵の屍が散乱し、司令部のあった地獄谷には、陸海軍の閣下達が自決された洞窟があり、私達の行く先々は死臭の匂いが鼻について漂い離れない。“雨期”が来

て一息ついて何気なしに眺むれば、汗と泥に塗れた軍服を着た兵士の屍は、熱帯の酷暑の中で腐爛して蛆が蠢き、無数のハエが全身を覆う。泥土に頭を垂れ雨にうたれた兵士（英霊）の上に流れ落ちる泥水は、眺める私の心にこの世の諸行無常の感を深めさせた。雨に打たれ、要所要所に、網の目の如く陣地を張り巡らす敵米軍の中を行く私達は、不意をついて闇夜の中に真赤に焼けて走る銃弾、砲撃に身を晒し、たびたびの掃討戦に遭遇し、つぎつぎと倒れゆく戦友を断腸の思いと慟哭の中で残して、なおも行動する。闇夜に屍を踏み越え、屍と共に寝み、目的に向かって行動する私も、飢えに苦しみ、傷の痛手に苦しみ、足を引き摺り、背に血だらけの戦友を背負い、真赤な鮮血は私の軀を洗う。

敗戦の惨さを心に感じつつ、全魂を傾けて、極限の中に生きる人間の、私

の行動を支えてくれたものは、「大義の道に生きる」という信念と、目的感に生きる執念であった。再度にわたる最期の総攻撃。「ガラパンに集結せよ!!」その命令が、私の氣力を持続させてくれたのである。私はマツピ岬を突破する直前の時間、生死について随分、煩悶懊悩した。天皇陛下のため？祖国日本のため？親兄弟親族のため？「自問自答」しながら「大義の道に生きる」この言葉が「生死」について、煩悶懊悩する私の心を、少しでも和らげてくれたのである。人間誰しも死を目前にして「平氣」な者はいない。ただ、目的があるから、死に場所は華を咲かせたいのが人情であり「大義の道に生きる」即ち「上官の命令」に従って行動する、ただそれだけが「極限の中に生きる」人間の「生き甲斐」にはかならないと、私なりに感じただけで、大胆な行動もできただけである。最後

は、目的地ガラパンに到達したが、そこにはすでに組織ある軍人の姿はなく、ゲリラ化した友軍が少人数で個々にとどまり、内地の援軍を待ち続ける軍人達の姿があっただけである。

「目的感」を失った人間は今までの氣力が崩れて、ドット押し寄せる衰弱した軀と、負傷や病が全身を覆い、精魂尽きて異国の山野の草葉の蔭に倒れて終う。私は米軍に救助され米軍の野戦病舎に運ばれて、アメリカ本国を経て文字通り九死に一生を得て、昭和二十一年十月三十日、夢にも思わなかった、祖国日本に復員して来たのです。戦争ほど、人類にとって「罪惡」なものはない。この悲劇は将来の日本を、背負ってゆかねばならない青少年の純真な心に訴えたい。そして戦争のない平和な日本。世界人類の恒久平和を、青少年の力で築いて欲しい。

私の経路

Saipan→Hawaii→San Francisco
→Camp.Maccoy Wisconsin→
Bitters field→Los Angeles→Scofield
in Hawaii→Uraga
Kanagawaken in Japan→
Go home Osaka (1946)
Forty Years ago (1944～1946)
I was in United States of
America Prisoner of War.

戦艦大和

S・Rさん 62歳

摂津市学園町

乗艦

昭18・7・27

一、戦艦大和の一等兵

三千五百の乗組員

出撃ラッパ鳴り響く

登舷札に帽振って

柱島をば遠ざかる

臉に浮かぶ父母の顔

南方基地

昭18・8・13
昭19・1・10

二、前線基地のトラック島

椰子の緑に珊瑚礁

夏島 秋島 楓島

青いドレスの娘子は

長い黒髪 黒い肌

そぞろ歩きも皆はだし

魚雷被弾

昭18・12・24

三、輸送任務で横須賀へ

東北なまりの陸軍兵

三千人の輸送船

赤道直下にさしかゝる

闇をつんざく轟音は

魚雷を受けて大さわぎ

マリアナ沖海戦

昭19・6・16

四、(ポルネオ)タウイタウイと(ニユーギニア)バチヤン島

突如と下る命令に

マリアナ沖にばくしん驀進し

ゼットZ旗揚げ血は燃える

されど敵艦影もなし

中将湾にたどり着く

フィリピン沖海戦

昭19・10・23

五、風雲けわしフィリピン

副砲一発火を噴けば

雲間に消えた砲弾は

初弾命中の勝鬨カチトキを

撃破空母が傾むきて

泳ぐ敵兵目のあたり

レイテ沖海戦

昭19・11・8

六、ブルネー湾を後にして

機動艦隊勢揃い

隊列組んでレイテ沖

敵グラマンの迎撃に

旗鑑アタゴ愛宕は火を噴きぬ

三日二夜の海空戦

水葬

昭 19
・ 11
・ 12

七、艦は大破で兵もまた

戦艦武蔵^{ムサシ}は既になく

戦陣なかばで引返す

黄昏^{タシガラ}せまる南海に

散り逝く戦友^{トモ}の水葬は

四十余名の名を告げぬ

大和の最後

昭 20
・ 4
・ 7

八、片道燃料の死出の旅

最後の決戦沖縄へ

敵機の猛襲数百機

血に染められた上甲板

鑑諸共に沈みゆく

三千余名が花と散る

沖縄戦線に想う

K・Kさん 62歳

摂津市庄屋

太平洋戦もたけなわに、主人を戦地に送り実家にて肉親の世話を見ながら沖縄戦線を迎えた。昭和十九年九月、海鳴りのように聞こえる爆音に望遠鏡を覗く友軍。渡り鳥のように黒く群らがる飛行機。敵機来襲の声に静かな山村も大騒ぎ。腰を抜かした私は取るものも取らずわが家へ。気は焦れど足がすくみ、やっと家に着き祖母と子供を防空壕へ。その時すでに伊江島の飛行隊では、高射砲や爆撃の音。B 29と言う飛行機の恐しさ。沖縄全島の空は黒煙ばかり。その時の爆撃機は何百機という。爆撃砲の炸裂ばかりが一日中続く。

一日が過ぎて、翌日哀れ渡久地港とぐちみなとには軍用艦のまつ二つに裂けた残骸が荒

波に洗われている。ともに防空壕や蛸壺たこづぼを掘りし兵士も艦とともに沈んで終わった。目ぼしい建物は、みんな爆破され一日で姿が変わった。まだ夢もさめやらぬ翌年の三月頃より始まった空襲は、本格的に毎日となり、艦砲や空襲が昼夜とつづき、やがて上陸となった。防空壕も数掘った私は一番丈夫な丸木造の横穴壕に入った。義姉親子四人と十名。その日の空襲は一番はげしく、百軒位の山村の小さな用水池をグラマン機八機編隊で爆撃している。頭上を低空旋回する爆音の恐しさ。入口を布団で防ぎ空襲の止むのを待つ。翌日弁当を造り今度はジャングルの中の壕へ行くが、山裾でわいわいと訳もわからぬ声に耳をすますと米兵であった。

そら大変と各自がバラバラとワラビの中へ息をひそめて耳をすますと、シャンシャンと、得体の知らない車が

行列をなし、ブルドーザーを先頭にトラックに満載の兵。後から砲身を載せた戦車。大空襲に二十五キロ爆弾で大きな池と化した所や障害物を置いた道もなんのその。先頭のブルドーザーでわけもなく切り拓いてくる。

三日目にまたジャングルの壕へ。朝から頭上を越える砲音は次第に近づいて来た。今泊いまどまりの海より次第に山間に攻めて来た。壕入口にいた私は思わずやられたと思った、がそれは大きな土の塊が肩を打ったのである。音もだんだんと遠くなり、出て見れば昼間でも暗いジャングルは枯木の山。ただ、ア然とするだけ。皆一日の無事を喜んだが、向かいの壕では父が爆風で息が切れたと泣く。二百米位離れた壕でも二十五人の死者。砲弾は伊豆味村いずみからの迫撃砲だったとのことだった。それから皆が一カ所に集まり、ジープで来た米

兵に老人や子供は手を挙げた。若い男は弁当持ちで逃げまどう。

私達は砲弾でバラスに化した小石を踏みながら岩山の洞くつへ。そこより見える海は大小入りみだれた戦艦が地平線の彼方までつづいていた。その上を友軍機が一機ずつ急降下して体当たり。火柱は高く上がるがすぐ消える。また特攻隊の一兵士が戦死。友軍の飛行機はどうしたのやら。その頃から追われた友軍が夜襲を繰り返していた。私達は捕虜になり、生死をさ迷う祖母八十三歳と生別れ、胸も切裂かれるような思いを残し、着いた所は金武村の辺之久。テント一枚を渡され、草を刈ってごごにする。そこは友軍の死屍が散乱し、またマラリヤの発生にあった。栄養失調の人々はみるみる倒れ、だんだん畑もアレヨアレヨと言う間に。墓場にベトナム難民と寸分もちがわぬ捕虜三万だという。私達は、そこにいて

は死を待つのも同じと夜を通して羽地村へと。持てるだけの荷物を持ち東村のジャングルにさしかかると、哀れ戦いに疲れた友軍が道で食べ物をねだっている。

夫や兄も敵地でどうしているのかと思うと胸が詰まりそう。哀れな姿はペンでは書きとれない。避難用の食糧やマツチを友軍に与えて山を登り、休む間もなく山をかけ下りる。八時には米兵が行動を起こすので、見つければ女性はまだでは済まされない。羽地には米軍が駐留している。義兄の所へ着く時は食糧も三分の一くらいになり、私達母子も疲れ果てていた。とくに子供達は栄養失調で歩行もできない。蛙や田うなぎを栄養源とした。

七月頃には自分達の村に帰るが、残った祖母は三日後に亡くなり、かくれていた義兄が葬ってくれた。それから文字にしては表わせない苦労がつづく。

二十四年七月夫戦死との公報が届く。病弱な両親に子供をかかえ、途方に暮れる。二十四年八月頃、風の便りで大阪に兄弟が元氣と聞き、嫌がる父母を説得して、一年がかりで大阪永住のビザを取る。上阪前に羽地の義兄が摩文仁の戦跡に連れてくれる。姫百合の壕は縄梯子。健児の壕も鉄兜や水筒がころがり、砲弾で打ち砕かれた石コ口を踏みながら、「この川は僕が五〇米くらい突破するのに一時間以上もかかり、やっと水を飲んで帰った」と義兄が言った。

夜が明けると手と口は血だらけ。呑んだ水は友軍の血の川だったと言う。ガラガラ石を踏み、枯木をつかみ上に登る。前も横も鉄兜や水筒、軍靴が転がっている。息子の手を取りながら氣も許せない。やっと摩文仁の丘に登った。大きな戸板がある。四隅を大きな石で押えられて、そこは手島中将と長

勇参謀長の自決された場所だとのこと。
私はただ悔しさに胸が込み上げて言葉
に出ない。

一礼をしてから海の水平線を眺めな
がら幾万の人びとが波に呑まれたこと
を思い、登った反対に山を下り始めた
が、四、五年も生えつづけたススキは、
私達より高く、前に行く人の姿が見え
ず、草の動きで前に付いて行くという
有様。やっと麓に下りたが荒芒たる平
野には車輪の跡が長く長くつづいていた。

今は観光地として立派に整地され、
数多くの碑が立っているが、二十六年
頃は本当に荒地でただ英霊は泣きなが
ら眠っているようであった。義兄は傷
を負い海に飛び込み浮き沈みしていると
ころを、米兵の捕虜になり、ハワイに
連れられたと言う。二十三年に復員し
て私達が本土へ行くということで案内
してくれた。ベトナム戦争や難民を見
るにつけ、過去を想い出す。余りよい

気はしない。戦争の傷跡はいつまでも
消えそうになく、心の底から、平和な
日々を送りたいものです。

追 想

一、荒波の 向こうに聞ゆ 海なりは
摩文仁が丘の 友に呼び交う

二、炸裂の 音も悲しや 鉄かぶと
主亡き原に 朽ちて花咲く

三、大空に 日の丸一機 急降下
火花となりて 今日も散りゆく

四、うら若き つぼみ花咲く ときあるに
咲かずに散らす 大和魂

五、姫百合の 苦しさ偲ぶ 縄梯子
学びの友と 散りし洞穴

六、畠より 鋤をスコップに 持ちかへて
召された人は いずこで眠る

七、国想う 少年学童の 護郷様
竹槍武器で 防ぐすべなし

今も忘れじ

K・Sさん 60歳

摂津市正雀本町

夫や子を再び戦火に送ること思うだに怒り湧きくる

戦争の悲惨さ今に忘れ得ず骨も還らぬ兄のこともも

モンペの紐解き眠りし夜はなくて糧求めゆく四国路はるか

松笠を拾いて焚きし風呂の夜隣組みなひそと寄りくる

狭庭辺に南京芋と慣れぬ手に作りしあの日今も忘れじ

生と死と歳月と平和と

M・Oさん 63歳

摂津市千里丘

歳月というものは恐ろしい。あれ程強烈で自分の死と対決した私のあの体験が、いま、さて——それを改めて書こうとしてみたら、永い濃い過去という歳月の霧が、記憶の前に壁のように立ちはだかつて抵抗することをつくづくと知るのである。私は四十一年前のあの忌まわしく恐ろしい私の体験を一生懸命思い出しながら書いた。昭和十九年七月三日、私の乗っていた重駆逐艦「五百島」は硫黄島目指してひた走っていた。任務は同島守備隊への武器弾薬補給である。

当時、アメリカは硫黄島を虎視眈眈と狙い、同島を中心に多数の潜水艦をバラマキ、最早商船での補給は不可能なために軍艦を使つての補給作戦であ

る。だがその軍艦でさえ、二段、三段に待ち構える物量のアメリカ潜水艦の前には安全の保障はあるべくもなく、私達は「いつかはやられる!!」の予感と恐怖のもとにその死の海域に乗り出していかねばならなかった。(この予感はヨットで太平洋横断などという遊びのスリルとはレベルの違う、全く異質のものである。今の冒険家がこの恐怖の待つ死の海へでも果して本当にのり出して行けるかどうかは疑問である) その日朝四時前、非番だった私は後部左舷のデッキで寝ていた。

突如、頭上で緊急ブザーが不気味に鳴りだした。「ハッ」と目をさました瞬間、私はとてつもない音を耳の中へ叩きこまれていた。

「パパーン、パパーン」両耳の中へカンシヤク玉をギュウギュウ詰め込んで一ペンに火をつけて、両方同時に破裂させたようなまるで音の化物だった。

音と同時に私はデッキの端までスツとんで、テーブルと壁の間に落ち込んだ。が、幸いに私は一番上になったので反射的に跳ね起きた。つむっていた目の上を青白いものが音と同時に広がったのを覚えている。だが(何事が起ったのか?) まるで見当がつかなかった。

心の隅で「アメリカの魚雷にやられた」と思いたくなかったのかもしれない。電灯は消えている。「当直が発電機を故障させやがった!!」と私は判断した。作戦航海中に発電不能という事になったら軍法会議だ。私は発電室へ応援に行こうと一歩踏み出した。その途端だった。またもや一発、さっきと同じ物凄い音が起こった。今度は目を皿のようにあけていた。しかも立っていた。圧のかかった熱い風に飛ばされた。私はデッキにしたたか叩きつけられた。耳はチーンと鳴り、目がとけてしまいそうな程痛い。私は倒れたまま

暫く動くこともできなかった。何分か経った。

その内ようやく耳鳴りの少し治まってきた耳に、シュルシュルという小川のせせらぎのような音が入ってきた。水である。海の水が板子一枚を通して入ってきているのだ。ここに至って、私は「五百島」が敵の潜水艦の魚雷にやられたのだという事実に気づいたのである。水は刻々と増えてきた。天井に届くまでに脱出しないと助からない”ときいていた。痛む体おして立ち上り、ラッタル（階段）の方へ行こうとしたが何という無惨だ。デッキはめくれ、裂け、テールはひっくり返り、その合間を負傷者が呻き、のた打ち、足の踏み場もない光景の中を煙硝の匂いと煙が渦を巻いていた。やっこの思いでラッタルの踊り場へきた。が、何という事だ。ラッタルは外れてデッキへ長々と伸びている。私は自分の考え

の甘かったことを痛感した。水はもう胸まできている。（私はここで死ぬのか?!）思わず天を仰いだ。と、その頭上にチカチカ朝の星がまたたいていた。奇蹟的にも頭上に穴があったのだ。その穴は対空機銃座が被雷の衝撃で吹っ飛んで、上甲板をむしりとった穴だった。

私はその穴から命からがら上甲板へ脱出した。だが、上甲板には更に酸鼻の光景が展開していた。主砲が砲座ごと横倒しになっていて砲員が二人、一人は両足を砲身の下敷にされくの字にちぎられていた。一人は砲席もろとも爆風でとばされ、折れ曲ったマストに串刺しになっていた。後部艦橋にまともに叩きつけられ生スルメのように薄っぺらくなつて自分の血の海の中で断末魔の痙攣を起こしている兵隊がいた。全身灰色の爆熱を浴びて焼鳥のよ

うになった下士官がデッキにはりついている。

誰か一人向こうむきになって用具箱に腰をかけているので「イヤに落ち着いているなア」と思つて前へ回つてみたら、右のすね小僧に私の握りこぶしよりも大きい穴がポカリとあいていて、その穴の底に赤い糊のような血の池が出来ていた。穴の回りのお椀のふちそっくりの白い骨の傷口から、溢れ出た血が向うすねに赤い滝を作り、その血が甲板を赤い蛇のように流れている。右目の上にも親指が楽に入っている。右な穴が脳内深くあいていて、その穴からふき出す脳みそまじりのドロドロの血は、顔から胸を血だるまにしている。口から泡をふき全身は既に硬直している。私は地獄をこの目で見た思いがした。私も両足に負傷していた。艦が、ガクンと不気味に胴ぶるいをした。「もう五百島は助からない」思つ

た私は思いきつて海へとびこんだ。大勢が泳いでいた。艦にも多数残っていた。と、艦尾がぐつぐつと海面下にメリこみ出した。「おお艦尾が沈むぞ!!」と見ていると、艦に残っている総員がめいめい肩に何やら担いできて、ホール（艦首甲板）に集合を始めた。つまり艦尾部の重量物、弾薬、米俵等を艦首に移して更にその上に人が乗り艦の重心を保とうとしたのだが、三千トンもある物が水を呑んだらこれくらいの細工ではビクとも効果はなかった。

「五百島」はみるみる竿立ちをはじめ、遂に直角近くなっていた。こうなると物の上に人がのっているのだからたまったものではない。物がおちる、人がおちる。物と人がごっちゃになって落下していった。

これで艦に残っていた殆んどが死んだ。たとえような心細さが私を

襲った。一番近い陸地で百マイル先の硫黄島である。救助艇が来た夕方四時すぎまでに何人の者が力尽きて沈んでいた事か……。私は十二時間、自分の死を見つめながら泳いでいた。ただ一途に両親の懐と、水遠の平和を求めながら……。

石の中に産んだ女たち

N・Sさん 45歳

摂津市鶴野

八月の墓地は死者であふれる

味舌下の村も死者が歩いていく

安威川のほとりの味舌下の墓地

供えたグラジオラスの花が咲きつづけている

中華民国湖南省で戦死す

二十六歳 マスオ

母カル

墓地のそばの住宅地の子供の声

陸軍歩兵軍曹

勲七等功七級

三十七歳 市郎

ビスマーク諸島に於て戦死

母マツノ

白い車の中から花束をつかんでおりた男

手を合わせている

比島方面ルソン島東海岸に於て戦死

二十七歳

母トラ

正面の黒いラベルのウイスキーが

にえるほどあつい

石の中にアリが生みつけたタマゴのように

女たちは産みつけた

夏になるたびに産湯を浴びせ

手を合わせる

夏は女たちをつかれさせる

女たちを無口にしてしまう

女たちは石の中で眠ってしまった

死へのさすらい

―マニラ東方山岳戦の記録―

O・Kさん 68歳

摂津市正雀本町

フィリッピン戦線の戦没者は約五十万人。短期間にこれほど多くの戦死者を出したのは世界の戦争史上例がない。私が引率していた経理幹部候補生四十名中生還したのは僅か八名、戦死者の率八十パーセントはマニラ東方山岳戦における全部隊の平均値である。

フィリッピンに関する戦記は数多くあるが、マニラ東方山岳戦の記録はあまりない。私は自身の悲惨な戦争体験を語り継ぐと共に、マニラ東方山岳戦の記録をとどめる意味で、「死へのさすらい」マニラ東方山岳戦の記録」を発行した。その本に挿入した私のスケッチの一部をここに掲載する。

〔1図〕バシー海峡で二度魚雷攻撃を受けて輸送船六隻、駆潜艇二隻が撃沈された。

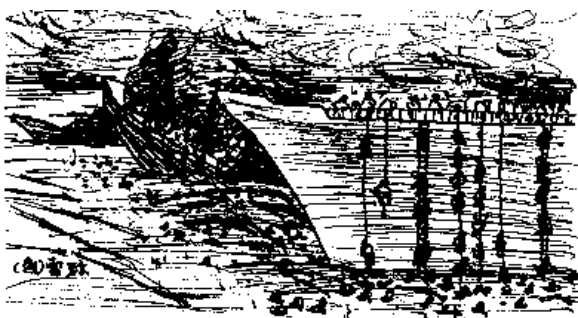
〔2図〕ルソン島沖での三度目の魚雷攻撃の時に私の輸送船に魚雷が命中して沈没し、戦友十二名が戦死、三名が負傷した。私は七時間の漂流後、最後に救助された。さらに半月後マニラ湾内で艦爆機延べ四百機の空襲を受け、輸送船に二発の爆弾が命中して戦友五名が戦死、二名が負傷した。

〔3図〕配属されたマニラ防衛司令部が東方山中に布陣した後も私はマニラに残留し、空襲と反日ゲリラ活動下でエンジンの部品集めと決死的輸送にあたる。私が引き揚げた二日後に米軍がマニラに侵攻してきた。

〔4図・5図・6図〕空襲と砲撃を避けて物資を山上に輸送する。軍律乱れてゲリラ化した脱走兵が輸送隊を襲う。武器弾薬を棄て、食料尽きて飢餓

地獄をさまよい、餓死者が続出する。現地民自警団と食料を奪い合う。

〔7図・8図〕武装解除に來た米兵に餓死寸前に救助され捕虜収容所に入る。復員船中で発病し、鹿児島陸軍病院で手術を受ける。



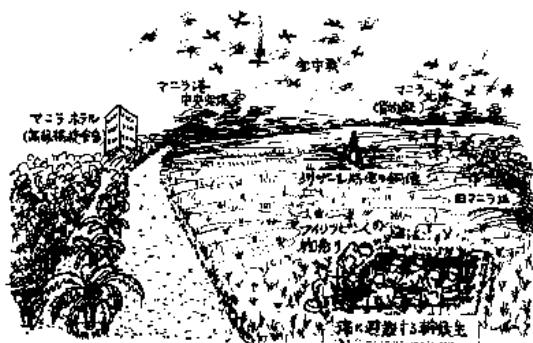
1 図・避難者の救助 (昭和十九年十月二十六日)

魚雷攻撃中の救助作業は命がけである。出来るだけ多くの遭難者を救助するために大きな群れの傍に船を止め、甲板上からロープや縄梯子を垂らす。海面から甲板までは五メートル程あり、ロープを次々と登る人の先頭が手をすべらすと、続く人全部が落ちてしまう。



2 図・漂流 (昭和十九年十月三十一日)

暴風下の雨の幕は視界を閉じ、風音は救助の気笛や漂流者の軍歌の声をと絶えさせる。筏にとりつけない人は散って姿を見えなくする。筏に青竹を立て禪 (ふんどし) をむすび、発見されることを祈る。筏の上に寝かせた負傷者がねむって死なないように交替で青竹で叩く。



3 図・空襲下のマニラ (昭和十九年十一月頃)

空襲毎にマニラの物価ははねあがる。日本軍の軍票乱発でさらにあがり、日本軍に対するにくしみを増す。空襲下でも壕に避難する日本将兵の所に現地人の物売りがやってくる。空襲がこわくないかと尋ねると「アメリカ、フィッピン人コロサナイ」と答える。



4 図・孤独の集積所(昭和二十年六月頃)

アメリカ軍に山中に追いあげられ、峻険な道を輸送する物資集積の中継基地に独りで勤務する。軍律が乱れて部隊を脱走し、ゲリラ化した兵が物資を略奪する。餓死し白骨化した死体が川に流され、岩にぶつかってばらばらの白骨が岩陰に散らばる。



5 図・洞窟内の白骨死体(昭和二十年七月頃)

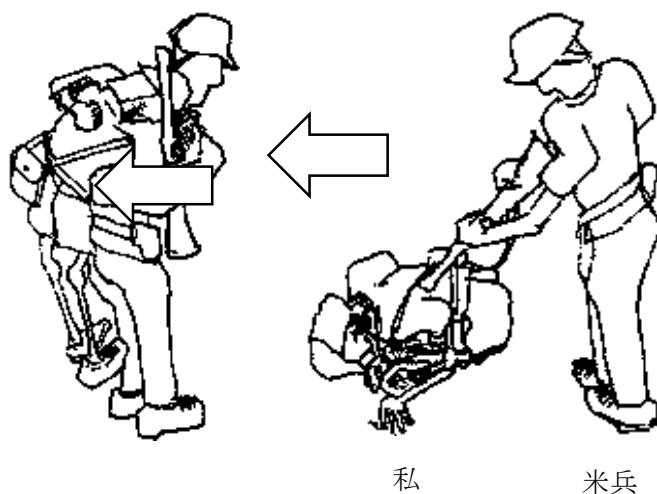
空襲や砲弾を避けて岩陰や洞窟内に避難したままに動けなくなり餓死する。息を引き取る前から蛆虫(うじむし)に肉を喰われて指の骨が見える。死後五、六日は強く異臭を放ち、十日位で全身が白骨化する。このような死体を抱くようにして空襲や砲撃、雨露を避ける。



6 図・岩のくぼみへ埋葬(昭和二十年八月頃)

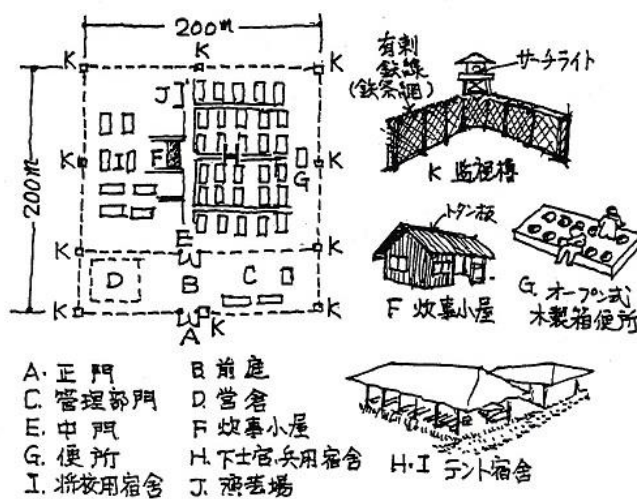
病気や疲労で動けなくなれば部隊から置き去られる。テントを張ったり、木陰に寝かせるのがせめての友情である。道端や山の斜面には放置死体がある。埋めるにも道具がない。川原では小石を積み、山道では岩のくぼみに押しこむのが最高の埋葬である。

7 図・餓死寸前の（昭和二十年九月十五日）
 アメーバ赤痢とマラリヤを患い歩行も困難な時に米機のまいたビラで日本の降伏を知り、現地で降伏調印が終わって山を降りる途中で部隊に置き去られ、餓死寸前に武装解除に來た米兵に救助され、背負われて山を降りる。米兵の背中の上で私は意識を失った。



私

米兵



8 図・捕虜収容所（昭和二十年九月〜十二月）
 広い砂糖黍畑の中の鉄条網の収容所に第一号収容者として入り、後から投降して來た人達の収容所作りをする。朝食は重湯、昼食はお粥、夕食はお子様ランチと生存に必要な最低カロリーーの食事給与と炎熱下の使役、自暴自棄の日々を過ごす。

戦旅のうた―侵略の日々―

T・Oさん 67歳

摂津市正雀本町

昭和十四年五月、鳥取歩兵連隊に召集され、同年八月北支派遣軍第百十師団第四百四十連隊所属の一兵士として河北省各地を転戦の後、十七年五月、中支に転進。浙江・江西両省にまたがる「浙かん作戦」に参加し、同年九月、旧満州間島省（現吉林省）延吉に転進し、病を得て十八年八月北海道旭川陸軍病院より予備役免除となり除隊。拒馬河^{きよまがわ}渉り^{なつめ}棗林^{さうりん}過ぎ山に入り

石亭鎮の前線に着く

村に入れば目の汚なき犬牙むきて

吠え立てるなり我ら敵なれば

ことごとく家を焼かれし農夫らが

ふり返りつつ山陰に消ゆ

夜半醒めておればいかにも切なげに

驢馬^{ろば}が鳴くなりわれも切なし

死すること帰するが如く楡^{いれ}の樹に

くくられし者胸射抜かれぬ

（捕虜銃殺）

死せる八路が持ちいし郭沫若の著書

大休止のたび少しづつ読む

大義なき「聖戦」糾^{ただ}しし代議士よ

その子の大尉郭橋に死す

※昭和十五年二月二日、斎藤隆夫代議

士は、国会本会議場に於て横暴非道

なる軍部の糾弾演説を行ない除名追

放さる。その子息は河北省平郷県郭

橋にて戦死す。

うら枯れて見るものもなき野の果てに

大行山があわあわと在り

コトコトと飯盒に物煮ゆる間を

まどろみており戦なければ

進撃の日は刻々と迫りおり

そら豆の匂う夕ぐれ

（杭州郊外の古蕩鎮）

敵追いて夜も昼もなく追い続け

もうろうとして歩きつつ眠る

砲声のとどろくさえも夢うつつ

歩きつつ眠り眠りつつ歩く

戦闘のと絶えし時ぞ食わねばならず

泄^たさねばならず眠らねばならず

捕虜（四首）

捕われし若き上尉よ天仰ぎ

「要殺就殺！」と悲憤の号泣

捕われし若き女兵よ滂沱^{ぼうた}たる

涙流せど命は乞わず

後ろ手にくくりし者を列に入れ

篠つく雨の中を敵追う

隊列の後より銃声二三発！

かの捕虜はついに始末されしか

馬上より叱咤の大隊副官よ

もんどり落ちてそのまま動かず

担架にて「水を」と求めていしが

もう水もなにも要らない秋山の

冷たき顔に芋の葉のせやる

今日はいよいよ死ぬかも知れず

先陣の渡河隊めがけ敵弾しぶく

家具積み上げ戦友を焼くその火にて

炊飯すなり物を干すなり

死者焼く火「すぐ消せ！敵が狙う！」という

火を消せば仏は生ま焼けとなる

用足して進む隊伍に復す間を

小便十丁糞一里という

落伍して隊をはぐれし病兵が

「どうか殺してください」と哭く

遺棄されし病馬よ虚ろな眼にて

過ぎ行く兵の列を見ていし

遺棄死体浮べる沼で米洗い

シャツを洗いて戦い暮れぬ

今日もまだ命はありて黄昏に

飯炊きおれば鶉啼くなり

兵士の余り物煮る苦力らが

声をひそめて話し合いおり

富陽より連れ来し苦力老阿東の

やつれ果てたる寝顔を哀れむ

浙江省諸葛鎮は諸葛孔明ゆかりの地なり

孔明の末裔らがドラを打ち鳴らし

皇軍歓迎というをあやしむ

戦火熄めば日は玲瓏と渡るなり

葦は水辺に野は野茨咲き

昭和五十六年六月、四十数年ぶりに中国を訪れて四首

赤軍と死闘交えつ大行山を

さまよいし日は遙かなりけり

大行軍区軍司令官聶栄臻

四十年経し今も忘れ得ず

昔船で渡りし記憶なつかしみ

長江大橋の上にたたずむ

遠き日の償い難き罪負いて

八達嶺の風に吹かるる

私が体験した戦争と平和

―フィリピン戦線―

I・Iさん 70歳

摂津市千里丘

昭和十六年十月十五日、徴兵検査で第一乙種の私にも召集令状が届いた。対米英間に暗雲が漂い、風雲益々急を告げている時で自分達初年兵の演習も随分と激しいものであった。兵隊となった以上は覚悟していたのであるが、生活の場である内務班で小さなことでピシシやられる私的制裁には参った。昼食後に下士官室にある班長の食膳を下げるのを忘れたとの些細なことで、連帯責任だと言って初年兵一同総ビンタを受けた。また靴の手入れが悪いと言って、首にぶらさげて中隊内の各班を回らされたり、そのほか数え上げれば限りがない。

加えて軍隊独特の言葉も苦労の種であった。シャツ（襦袢^{ジュバン}）、パッチ（袴^{ヘンジョウ}下）、靴（編上靴^{ヘンジョウ}）、便所（廁^{カワヤ}）、売店兼食堂（酒保^{マキヤ}）、ゲートル（巻脚絆^{マキヤハシ}）、洗濯物干場（物干場^{ブツカンシヨウ}）、手紙（書翰^{カン}）、散髪（理髪）、風呂（入浴）、等々であるが、一朝一夕には憶えられない。例えば「便所へ行きます」などとうっかり言えば「貴様はまだ地方気分を出しやがって」とビンタが飛んでくるので、全く油断も隙もない毎日なのである。緊張と恐怖感の連続で三カ月の教育期間が終了し、三八式歩兵銃を肩にしてフィリピン戦線に向かって船出することとなった。約一週間程の航海でルソン島のリンガエンに上陸。時は二月下旬のこと、寒い内地から炎熱のフィリピンへ来たのである。太平洋戦争が勃発するやアメリカ・フィリピン軍は首都マニラを放棄してマニラ湾の北西に位置するバターン半島および入口の

コレヒドール島に堅固な陣地を構築し、豊富な物量に物を言わせて昼夜を分かたず各種の火砲・機関銃等で猛烈に射ってくる。飯盒炊事もままならぬ状態で燃料の竹は不自由ないのであるが、煙が上がると砲撃の目標となる。

夜のジャングルの行事も困難で台湾の高砂族が先回りして雑木や竹を切つて通路を開いてあるのだが、切り残しが十センチか十五センチ出ているので暗さは暗しで進みにくいこと、全く泣きたいほどの難儀な行軍であった。夜明けとともに行軍が続くのであるが、所々に故陸軍上等兵何某、故陸軍一等兵何某との墓標が立っており、こんな姿になつてはならない。しかし行く手にはどんな危険が待っているかはわからない。

敵の遺棄死体はほとんどがフィリピン兵で米兵の死体は見当らない。屋根型の鉄条網を延々と張り巡らしてあって、

とても飛び越えることはできない。ここでまごまごしているとところへ機関銃や迫撃砲を撃ち込む計画だったのだらう。甘諸畑が至る所にあつたのは有難い。手折って食べたものだ。咽喉の渴きが忘れられる。その上甘いので大助かりだ。馬にも与えると、うまそうに嚙んでいた。また水牛がところどころで死んでいるのも痛ましい光景であつた。

ナチブ、サマツト山、マリベレス山では次々と敵陣が陥落し、大勢の敵兵が両手を挙げて山を降りて来た。米兵、フィリピン兵、中には中国人らしき者も若干混じっていた。折から〇〇部隊の軍旗が通りかかると、隊長らしき将校が「捕虜は軍旗に敬礼せんか」と大声で怒鳴っている姿まで見られた。

バターン半島の戦闘が終わると次は半島の南、マニラ湾に浮かぶコレヒドール島への攻撃である。島の要塞砲は以前から猛烈に撃ち込んできて、

バターンで戦闘中の友軍も随分と苦しんだ。ドラム缶と呼ばれる大口径砲でシュツシュツと、不気味な音を立てて自分達の頭上を越えて後方の陣地へ落下するのか、大きな地響きを立てて炸烈する。しかし友軍機が要塞の上に飛来すると要塞砲は沈黙する。やはり爆撃が恐ろしいのであろう。

昭和十七年五月七日、コレヒドール島が陥落し、山のあちらこちらに白旗がはためいている。これでフィリピンの戦闘は終結し、マニラ郊外のマツキンレーの兵舎で内地帰還の準備を進め、一カ月後にマニラ港より乗船し四カ月ぶりに故国の土を踏んだ。戦友達の中には戦死した者、マラリヤ、またはその他の病気で異国の土になった者も多数あり、微傷もせず原隊に戻れた自分は本当に幸運と言う外はなく本当に嬉しかった。

昭和二十年七月からの日中戦争で多数の将兵、多額の国費を消耗し、さらに当時は世界一の裕福な国と言われたアメリカ。海外に広大な領土を有し、日の没しない国と言われたイギリス。

この両大国を相手にしては国力の限界がきたのであろう。近代戦は消耗戦であつて資源の乏しい日本では即戦即決を望んでいたのだが、舞台が広い太平洋では思うようになかった。豊富な物量に物を言わせた米英側の猛反撃が始まり、南洋の日本の委任統治領のマリアナ群島を占領した米軍が遂に大型の爆撃機 B 29 の大編隊で本土を襲うようになった。軍事施設は勿論、多数の市民や民家が犠牲となり、これ以上の戦争継続は不可能となって、残念ながら無条件降伏となった。

久々に電灯が輝き、空襲もなく地獄から極楽へ一変したのであるが、生活物資の極度の不足と食糧の確保のため

には死物狂いであつた。闇市で芋やパン、餅などを買って、むさぼるように食つたことを思い出せば現在は夢のようである。焼跡には各社のビルが林立し、車は飽和状態で交通地獄を現出し、紳士・淑女は着飾って濶歩している。当時を思えば隔世の感がする。この結構な平和が永久に続かないものかとつくづく思う。

悪夢のような戦争は二度とあつてはならない。米ソ両大国の間も軍拡競争のような気がする。イラン、イラクの戦争も無関心ではいられない。どちらも産油国であり、この石油に依存する日本としても対岸の火事とは思えず長びくとロクなことではない。少なくとも第三次大戦の引金になるようなことにならないように切望して四十年の昔を偲びつつ私のまずい体験談を終る次第であります。

軍使―ビルマ戦線―

N・Sさん 77歳

摂津市正雀本町

昭和二十年八月、ビルマの戦局は日本軍には極めて不利な展開となり、すでにビルマ方面軍司令部は首都ラングーンを放棄するとともに、撤退する兵力を天然の要害であるシタン河の左岸地区に集結、布陣して、同河を挟んで敵軍と対峙^{たいじ}していた。

このシタン河の渡河点は、かつて日本軍がビルマ進攻の際に連合軍をこの狭隘な地点に追い詰め、渡河、退却せんとする敵軍を空陸からの銃砲爆撃により一挙に撃滅し、シタン河の流れが血で紅く染まったといわれる地点で、それから数年後のいま、ビルマ方面軍の主力は逆の立場になって、このシタン河の渡河点に追い詰められ、渡河、退却せんとする多数の日本軍将兵が

血を流した悲劇の地点である。私達の蘭第六七部隊は、インドとビルマの国境方面から撤退してくる友軍が嚴重な敵軍の封鎖線を突破し、無事にシタン河を渡河して友軍陣地へ到達するのを援護するため、シタン河右岸の渡河地点付近の部落に進駐した。そして同部隊第一中隊第一小隊は、対峙している前面の敵部隊を牽制するために、斬込隊を編成し、雨季で膝まで没する洪水の中について、敵陣地への夜襲を繰り返し敢行していた。

昭和二十年八月十七日夕刻、第一小隊では第七回目の夜襲を決行するため、擲^{てき}弾筒や火焰ビンなどを準備し、当夜の斬込みの手筈^{はす}を進めている小隊長の許^{もと}へ、中隊本部から「N小隊は本夜の夜襲は取り止めにすべし。前線へ白旗を掲げて敵の軍使が来るかもしれないから、その時は丁重に取り扱って部隊本部に連行すべし」という命令が届

いた。この命令は直ちに前線の歩哨へ伝達された。

翌十八日の午前十時頃、前線の歩哨から「前面の敵方部落と味方部落とのほぼ中間にある小高い地点で、白い旗らしいものを振っている」という連絡があったので、私は昨夕の中隊本部命令中の「敵の軍使」であろうと直感した。

私は直ちに下士官一名を伴って同地点に赴いたところ、そこから少し離れた窪地のところに、約二個分隊ほどのビルマ兵が伏せをしていて、その中から隊長とおぼしい一人が自動小銃を構えた兵隊に守られながら私の所へ近寄って来た。私はこの瞬間、ひよつとすると撃たれるかもしれないという恐怖を感じ、腰につけている手榴弾をしっかりと握りしめた。

私達は、暫く沈黙のまま見詰め合っていたが、お互いに少し落ちついてく

ると、やがて少したどたどしい日本語で、彼は「日本軍は負けた」と言った。私は「そういうことは何も聞いていない」と答えた。

彼は「戦争は終わったのだから、この方面の停戦について英軍部隊長と日本軍部隊長と打合せをした」と言った。

私は「それなれば私があなたを日本軍部隊本部へ案内をしよう」と答えた。

彼は「それはできないから、両軍の部隊長が会見する日時と場所のことについて、明朝十時にこの場所でもう一度打合せをしよう」と言った。

私は「部隊に帰って部隊長にこの会見のことを報告して、その命令を受けてその旨を明朝回答する」と答えた。そして

彼は「両軍は戦争をしているけれども、私達はお互いに憎しみはない、友人だ」と言った。

私は「私もそう思う」と答えた。彼は「日本軍は食糧や物資に不足している」と聞いていたが、困っていることがあれば遠慮なく言ってくれ」と言った。

私は「御好意は有難いが、日本軍は何も困窮していない」と答えた。最後に、

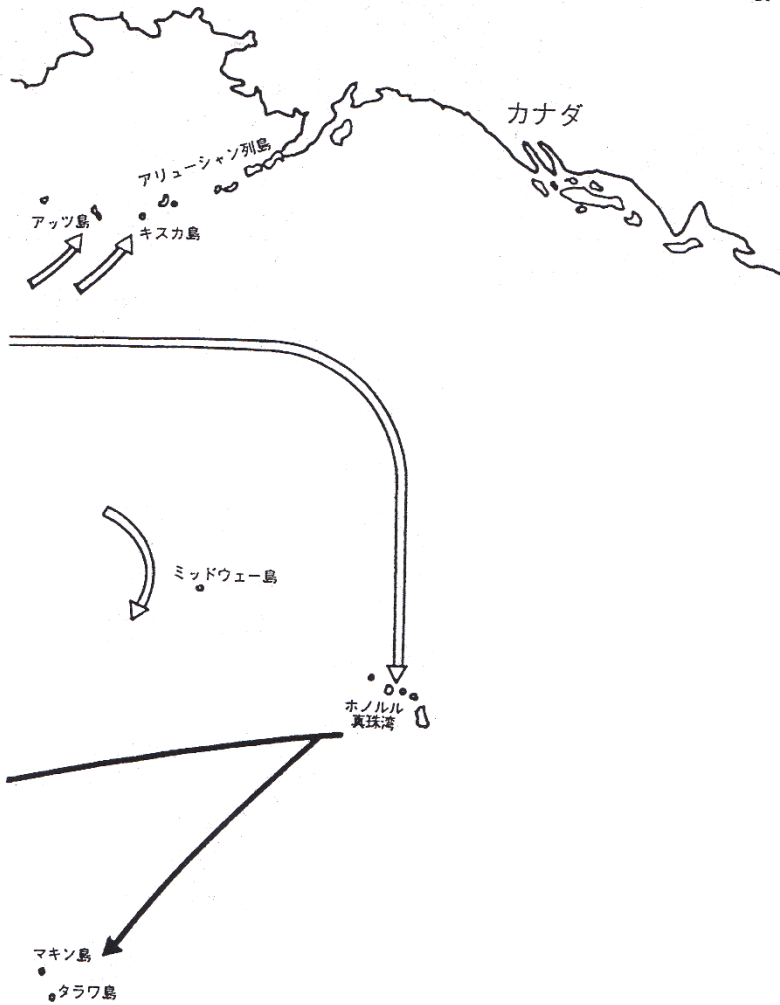
私は「有難う、さようなら」という言葉に万感をこめて別れを告げた。ほつとして見上げる空に、雨季明けが近づいたせいかな、どんよりとした雲間から微かな陽射しがこぼれた。

私は帰隊後、直ちに部隊本部へ会見の要旨をしたためて伝令を出したが、それと行き違いに部隊本部から「N小隊は本夜前線を撤退して中隊本部に集結すべし」という命令が届いた。

その夜、私は明朝に敵の軍使と会うことを約した場所に「ワガタイハブタイホンブノメイレイニヨリタノチクニテンシンスル、キグンノケントウライノル」と書いた立札を残して、篠突く雨が私の身も心も洗い流すように降りしきる暗夜の中を小隊のしんがりとなって撤退した。

年表

- 昭和6(1931)年
 - 9・18 日本陸軍、武力占領を拡大(満州事変)
- 昭和7(1932)年
 - 1・28 日本軍、上海へ出兵(上海事変)
 - 3・1 満州国建国宣言
 - 5・15 犬養首相、海軍将校に暗殺される(五一五事件)
- 昭和8(1933)年
 - 3・27 日本、国際連盟を脱退
- 昭和9(1934)年
 - 12・29 日本、ワシントン海軍軍縮条約を破棄
- 昭和10(1935)年
 - 8・10 中国共産党「救国抗日」を宣言
- 昭和11(1936)年
 - 1・15 日本、ロンドン軍縮会議を脱退
 - 2・26 陸軍皇道派青年将校クーデター(二二六事件)
 - 11・25 日独防共協定調印
- 昭和12(1937)年
 - 7・7 日中戦争開始(盧溝橋事件)
 - 12・13 日本軍、南京を占領(南京大虐殺事件)
- 昭和13(1938)年
 - 4・1 国家総動員法公布
 - 5・19 日本軍、徐州を占領
 - 10・21 日本軍、広東を占領
- 昭和14(1939)年
 - 5・13 満蒙国境で日ソ軍衝突(ノモンハン)

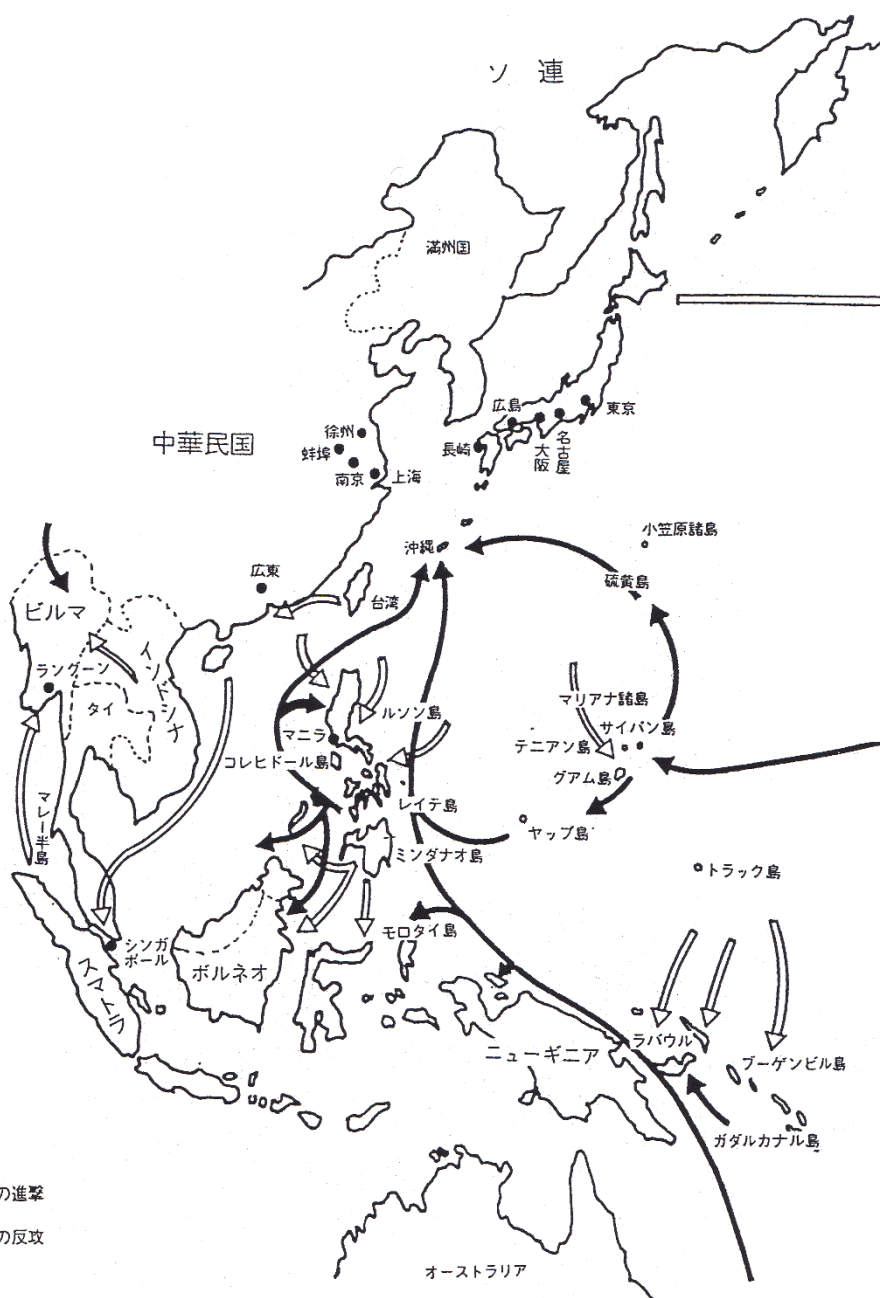


- 昭和19(1944)年
 - 6・19 マリアナ沖海戦で制海権を失う
 - 7・7 サイパン島の日本軍玉砕
 - 8・10 グアム島の日本軍玉砕
 - 8・23 学徒・女子挺身隊勤労令
 - 学童疎開実施
 - 10・25 比島・レイテ沖海戦で日本軍連合艦隊壊滅、神風特攻隊出撃
 - 11・24 米軍B29、日本本土に爆撃開始
- 昭和20(1945)年
 - 3・10 東京大空襲
 - 3・12 名古屋大空襲
 - 3・13 大阪大空襲
- 昭和21(1946)年
 - 3・17 神戸大空襲
 - 硫黄島の日本軍玉砕
 - 4・1 米軍、沖縄本島上陸
 - 6・23 沖縄地上部隊全滅
 - 7・26 対日ポツダム宣言発表
 - 8・6 広島に原子爆弾投下
 - 8・9 長崎に原子爆弾投下
 - ソ連軍、満蒙国境で日本軍に攻撃開始
 - 8・14 日本、無条件降伏(ポツダム宣言受諾)
 - 8・15 戦争終結の詔勅(玉音放送)
 - 8・26 満州で日本人約一〇〇〇人が玉砕
 - 9・2 ミズーリ艦上で降伏調印

- 事件)
- 7・8 国民徴用令公布
- 9・1 ドイツ、ポーランドへ進撃(第2次大戦勃発)
- 昭和15(1940)年
- 9・27 日独伊三国軍事同盟調印
- 10・12 大政翼賛会発足
- 昭和16(1941)年
- 3・10 治安維持法強化
- 4・1 小学校は国民学校となる
- 米穀通帳配給制実施
- 10・18 東条英機内閣成立
- 12・8 日本軍、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃(太平洋戦争始まる)
- 日本軍、マレー半島上陸、タイ進駐
- 12・10 日本軍、ルソン島上陸、グアム島占領
- 12・19 言論・出版結社臨時取締法公布
- 昭和17(1942)年
- 1・2 日本軍、マニラ占領
- 1・23 日本軍、ラバウル上陸
- 衣料は点数切符制に
- 2・15 日本軍、シンガポール占領
- 食糧管理法公布
- 3・8 日本軍、ビルマ・ラングーン占領
- 5・7 コレヒドール島の米軍降伏(日本軍東南アジア全域制覇)
- 6・5 ミッドウェー海戦で日本軍敗北、米軍の反攻開始
- 昭和18(1943)年
- 2・8 ガダルカナル島で日本軍敗退
- 4・18 山本五十六連合艦隊司令長官戦死
- 5・29 アッツ島の日本軍玉砕
- 10・21 学徒出陣
- 11・25 タラワ島の日本軍玉砕
- 12・27 米軍、ラバウル猛空襲

太平洋戦争戦域図

- ← 1941.12から日本軍の進撃
- ← 1944.10から米英軍の反攻



だいじな平和

H・Tさん 34歳

摂津市東別府

「鬼は外、福は内」と一年生の娘と大声で豆まきができる幸せ。そんなのかな幸せを毎日味わえることに感謝しなければと平和の尊さを考えるとき、つくづく思い知らされます。

私は戦争の体験はありません。私の父は、仕事を終え、夜お酒を飲みながら戦争の話を子供達に時折してくれたものです。二十一歳位でインドネシアのスマトラ島に約二年半程行っていたそうです。無事日本に帰ってきた時は、おばあちゃんがほんとうにほんとうにうれし泣きをしたと聞かされました。その時は「ふうん」と聞いていました。が、いま結婚して子供を育てている中、わが息子が生きて帰れるともわからな

い所に送り出すことを考えただけでも恐ろしい思いがします。

人間の命は、何ものにもかえがたい尊いものです。

日本では、アフリカ飢餓救援運動が叫ばれています。干ばつによる飢えに苦しむアフリカ諸国の人びとを救える日本の平和と豊かさを喜ばねばと思います。

こんなに日本は平和になったのに日本の中はどうして殺伐としたニュースが多いのでしょうか。校内暴力、車内暴力、お菓子会社への脅迫など。もともと人と人の命の大切さを思っ

真の平和とは、やはり住みよい町、住みよい日本から出発していくものだと思います。

兵営生活

M・Hさん 69歳

摂津市鳥飼西

みんなどんな気持ちで徴兵検査を受けたらう。丸裸で精密検査、お尻を一発「パシッ」甲種合格だ。いよいよ来るべき時が来たと覚悟するものの不合格者達の笑顔がうらやましく感じられた。

翌年一月十日入隊までの心の準備、特に軍人勅諭の暗唱が大変。お経のように長文のため、夜は一生懸命歌の文句に

へ文明開化の世の中に軍隊生活知らないか知らねば私が説明する花の三月検査受け親に甲斐性がないゆえか彼女の願いが薄いのか役場の親切足りぬのか明ければ一月十日には数多くの人に見送られ可愛い娘ちゃんと泣別れ着いた場所は馬場町

以上のような歌が今も忘れられない。

正月十日入営。一つ星の軍隊生活が始まる。起床から就寝まで、すべてラッパで始まり、終る。六時起床営庭へ。人員点呼一二三と競争で、衣服のボタン一つ外れも許されない。朝飯も総て競争だ。寒い凍るような営庭で基本教練が毎日続く。休憩の間以外は用便も許されない有様だ。新兵一人に古兵一人の戦友が何かと教えてくれて面倒をみってくれるが、夕食後は厳しい内務の躰等、また返事はすべて直立不動の姿勢で復唱せねばならない。一寸の気の休まる暇もないし、ただ九時の消灯ラッパが唯一の憩であるが、一つ間違いを起こしたりすればパチッと叩かれる。五尺の寝台の毛布と敷布の間に戦友が入れてくれたあん餅も忘れて、朝氣付き後仕末に大閉口。また夜中は南京虫がゾロゾロと出て、身体中刺されて安眠も出来ず、食事は毎食炊事へ交代で

飯上げだ。

新兵の職業も巡查、大工、角力取りや、他にも女形の新兵もおった。毎日の教練は厳しく激しくて腹が減って一ゼン飯では足らず、戦友の目を盗んでは流しのわずかの残飯を手でつかんで食ってる新兵もめずらしくはなかった。

また古兵の洗濯掃除等一切せねばならず、こんな毎日の辛さに負けて脱走した者もあった。やがて基本教育も終り、三月いよいよ第一期の検閲が始まる。播州の青野が原の広びろとした演習場での訓練で、体力の弱い兵隊は落伍の続出で大変。それでも倒れるまで頑張らねばならない。次はすぐ二期の検閲が信太山で始まり、戦闘訓練はまた激しい。二十キロ近い軍装で山谷を渡り歩く。これを鶯の谷渡りと名付けた位づらかった。時には夜中の非常呼集で疲れた寝入バナを起され、完全軍装で営庭出發。何処へ行くのやらやがて生

駒山上へ。暗峠では落伍者が多数出て泣いたこともあった。

さて春四月、満州出兵の命令が下った。万歳万歳の声に見送られ、築港第三突堤より乗船し満州へ。朝鮮釜山港までの玄海灘は荒海で、五千トン級の軍用船も木の葉のように揺れて船酔で大閉口。軍用列車に三日も乗せられて首都新京(長春)へ。関東軍司令官の警備も半年余り。部隊はソ満国境へ。十二月になると気温も零下四十度の寒さに驚くばかり。暮近く、われわれの部隊は内地勤務要員として帰還。その時の嬉しさはまた格別。

さて、いよいよ二年兵になり勤務生活が始まる。第一は部隊衛兵で兵舎の警備、軍旗の警固等、昼夜にわたり務めねばならない。

次は大阪城の衛兵勤務で、城の玄関に控所があつて、城の周囲を回って警戒、淀君の化粧櫓^{けしょうやぐら}近くを立哨。堀の上

から大手前を眺めては溜息をしたものだ。また罪人の仕置場が城の東北「青屋口」にあつて、夜になると青い火の玉が出るとかで兵隊はみな怖がったものだ。

さらに、三十七連隊と八連隊の一週交代で枚方の禁野火薬庫の衛兵。淀川の堤を枚方への強行軍はきつく、たまには優しい将校「司令」の時は一般通行のトラックに便乗出来て嬉しかった。勤務は、小山の森の中で土手に囲まれた弾薬庫が多数あつて昼夜二、四時間交代で、四区に分れて庫の付近をグルグルと警戒。特に夜は真つ暗間でキツネ、タヌキが出没するとかで気味悪かった。ときどき本部より巡察将校が見回りに来るが、肝の小さい将校はビクビクしてさっさと引揚げるのが面白かった。

この火薬庫は一般人の工員男女がたくさん働いていて、守衛さん達とも仲

良くして大変楽しい勤務だったが、支那事变初期の十三年頃、東南隅の作業場内で砲弾の信管を装填中、誤って爆発。場内の作業員数人が吹っ飛んで死亡したそうで、そのあおりでつぎつぎと弾薬庫が爆発炎上して何一つ残りはなかった。この事故当時既に日支事変がたけなわで、数多の兵隊の応召や入営する若者達も、わずかの訓練だけで支那戦線へ出兵。それを見送る時の気持、今も当時が偲ばれて悲しくなる。以上はほんの軍隊生活の一部です。

私が見た大空襲の惨状

あの夜の大阪方面の空はアカアカと何時までも夜空に燃え上つて、おりからの南西風に乗って落ちてくる灰の雨。その夜は空襲で逃げ惑う人達の姿が臉に映つて寝苦しい一夜が明けた。幸に鳥飼方面は被害もなかったので急いで友と淀川堤を自転車ですた走り長柄

橋へ。この橋の南詰も焼夷爆弾にやられて穴だらけ。橋下で避難の人達の焼けただれた遺体。天神橋を渡ると松屋町は昨夜からの炎がメラメラとくすぶり続いて、家並はガレキの山としてあたり一面「ムツ」と鼻をつく悪臭。それは人間の焼けただれた匂いだ。

広い道路も中央が通れる程度。その道をボロ服の、真っ黒い顔の人たちがまるで夢遊病者のように南へ北へゾロゾロと続く。本町へ向かうも焼け残った家は見当らない。左折して上本町六丁目の交差点に出たとき、ハッと目に映った舗道脇の避難防空壕。その入口に横たわる抱合った母子の黒こげの死体。壕内を見るとさらに数人の性別も判らない死体。どこの誰とも判らず、さぞ苦しい思いで命を落されたと思うと余りの戦争の悲惨さに、ぐっときみ上げる憤りで胸が一杯になりました。

また京橋の陸軍造兵廠の猛爆。さらにその巻添えをくった京橋駅の惨状。罪もない女や子供までがつぎつぎと倒れて行く有様はとても筆舌には尽くせません。こんな無惨な戦争を一体誰が始めたのか？二度とあつてはならないでしょう。

ソ満国境について

I・Mさん 69歳

摂津市鳥飼八防

私は大正四年十月、摂津市鳥飼八防に生まれ同地で育った。昭和十七年三月、二十二部隊に応召、満州歩兵第一八〇部隊に転属。昭和二十二年二月、ナホトカから舞鶴港に復員した。

私の体験した終戦時のソ満国境について述べる。国境最前線に分哨（分隊、下士官長で十六名編成）、国境監視隊（小隊、将校長で三〇名編成）、その後方に守備隊（中隊または大隊）独立歩兵大隊（三〇〇名から一、〇〇〇名）で編成され、分哨は一個分隊、監視隊は部隊に一個所設置されていた。国境監視隊は大隊よりも師団の作戦参謀本部からの指示が多かった。私が勤務していた場所は東安省尚志屯で、五葉台監視隊第二十五向地視察班要員として

昭和十七年八月より終戦の昭和二十年八月十日まで、同地点にてまる三年間勤務していた。昭和二十年八月八日夜半（十一時から十二時）、ソ連軍は国境線を突破して満州領（現中国）に侵入。

まず最前線の分哨を奇襲、全員玉砕。翌朝九日午前七時、五葉台、尚志屯、二人班、鳥山陣地、兵舎を十二機の爆撃機で奇襲。突然の襲撃のため、私達は何の手だてもできない始末であった。

尚志屯守備隊より一個中隊が九日の早朝に五葉台に到着し、守備についていた時、ソ連の飛行機の爆撃に遭い、五十キログラムから百キログラム爆弾と機銃掃射のため全滅。死者・重傷者で廃墟となる。生存者四十名程度となり、私は爆撃時、参謀指揮所で望遠鏡でソ連の動向を視ていたが、この指揮所は敵の目標になっていたため、爆弾で土に埋まっていたペトン式トーチカがむき出しになった。直撃弾がなかったの

が、なによりの幸となったようである。その時私自身、絶対死ぬことはない自信ができ、洗礼を受けた気持ちになった。すぐ兵舎へ行くも、交通壕は破壊され、何人かの戦死者と負傷兵を見た。兵舎の近くに行くも兵舎なく、大きな爆弾の穴があり、その中と周辺に多数の戦死者があり、また医師、衛生兵なく重傷者多数のため健康者をもって応急の手当するも効なく、このところで戦死された氏名は府世話課に報告済である。

なお私が所属していた部隊は、適道歩兵第一八〇部隊第七中隊（中隊長白井中尉）であった。しかしこの部隊も昭和二十年三月移動している。今私が申し上げた五葉台監視隊で勤務している者は元一八〇部隊の兵士である。

以上のように何の予言もなしに惹起（じゃつぎ）するのが戦争である。明けて、十日夕刻からソ連軍は総攻撃に転じ、私達生存者は、たこ壺を掘り、手榴弾を穴の

周囲に敷き、自決すべく覚悟をしていた。誰言うとなく、後方の半載河陣地にて態勢を立て直して戦おうではないかと五葉台を撤収して半載河陣地に着いたのは十一日早朝であった。半載河には独立歩兵大隊があり、その大隊に合流して戦うことになった。その大隊と半載河―平陽鎮（ソ連戦車隊と交戦）この時すでに八月十五日―平陽―平陽山中―林口山中で山田部隊合流―林口で武装解除。この山田部隊は昭和二十年三月興凱湖で新編成された部隊で将兵三、〇〇〇名、民間人二、〇〇〇名の大世帯で、完全武装された部隊であったが、衣類と装備、弾薬があっても食糧には困っていた。山田部隊の中に一八〇部隊の徳永少尉（のち大尉に進級・第六中隊）岡本兵長（のち軍曹に進級・第七中隊）とも会った。山田部隊についてはまたの機会とし、民間人のことについて若干述べることにする。

民間人といってもほとんど開拓団の人達で婦女子と老人、子供達で食糧がなく、それこそこの世の地獄であった。民間人の人達はこの時、乳飲み子を中国人に預けた人もあった。私達もこの部隊に合流したが食糧がなかった。合流して初めて終戦になったことを知る。林口広場将校官舎前で武装解除を受けたのは、昭和二十年九月中旬であった。武装解除後もソ連の食糧も非常に悪く高粱・粟の穀の被ったものであった。全員栄養失調になってしまった。ソ連軍は私達に歩いて牡丹江まで行くように指示したが歩くことができない。車送されて黄道河子に着き、歩いて牡丹江ハイリン飛行場に到着したが、格納庫が収容所になっていた。関東軍の高級将官達も収容されていた。牡丹江の市内では食糧倉庫、軍の施設はすべて崩壊されていた。牡丹江に約十五万人の将兵がいた。ソ連軍は日本兵を一千

名編成で日本に帰す約束をしながらもシベリヤに強制抑留し、酷寒零下五十度の地にて、一年から三年、四年とソ連開発のため使役として酷使した。終戦四十年たっても忘れることはできない。二度とこのようなことの無い、平和な世界であることを祈るのみである。

銃後の和歌、俳句

T・Y 64歳

摂津市正雀本町

昭和十九年三月出征の日

千万無量思いは眉宇にありながら
笑みて征きけん常のごとくに
黒々と光り輝く眼をむけて
君は挙手せり物事はただ
大君の辺にこそ死なめと征く人を
還り来ませと祈るかなしき
大なる国の動きぞ征く人も
残るも同じ 戦の場
召されゆく夫の背にある春ひざし
わが夫も戦最中の雲の峰
大陸の基地追いつめて国の秋
慰問文書くるに蚊火を焚きそえぬ
燕の巢もとのいなり留守居無る
朝顔や郵便受けの軍事便
初秋の町により返すいくさの句
戦人今日も寝ぬるか星月夜

目つむれば落花の駅の旗の波

昭和二十年戦争益々苛烈となる

今日も又無事にあれよと朝床を
はなるる前に君を祈りぬ
兵の妻暑さ寒さも蔭膳に
清水かかさず還る日待つ
生還は期せねど恋したまゆらの
夢は征野の夫にかよいつ
野に山に若葉匂えどわが夫の
苦勞思えば涙わき出ず
わが夫もかく戦うやばげしかる
ニュース聞きつつ胸迫りくる
荒海の怒濤のりこゆ意気もちて
み民の道にはげめざらめや
新春を迎えて
新玉のことほぎ酒をいづくにて
交はせ給うやつわ者君は
み灯に打つ柏手よ日参の
夫が武運守りませ神々

戦地より送金ありいよいよ身辺の整理のためか？

妻の生活せめて安くと願う春の
御心かなや思えば泣かゆ
そそり立つ戸室の山も影うせて
秋雨けむる蔭膳の部屋
ラジオ言う『わが中支軍は：』の戦況を
ききのがさじと静かに坐る
ますらをの妻とし生きよ我は無き
ものと思えと今日のみ便り

終戦後

国敗れ山河けわしく秋立ちぬ
朕民と俱とぞ敗戦の秋
国敗れ飢えてゆく世も白山に
つらなる加賀の山河美し
いもづるの粥をそそりて今日もまた
敗れし征野に思果てなん
木枯らしの音を聞きつつ幾山河
夫が還りの早かれとぞ念う

春の風吹けくあまた同胞が

故国恋いてぞ待てる大陸に

海遠く敗れし征野に船待てる

君恋いてこそ千々に砕けん

我一人縁むすびし三年目の

弥生半ばに君一人恋し

折りつつく縫う衣なり

君還り来て着ます日のあれと

陽春も尚降りしきる雪国の

いまだ還らぬ人の待たるる

二人の息子未帰還のまま心労の為^{しゅうと}舅上

病没される

神々よこの舅あわれと思召せ

息子すべてを征野に送りにて

やつれゆく舅の願いよ叶いませ

この世の別れに一目なりとも

昭和二十一年五月十日復員す

この姿見せたき人はすでに亡し

夢ぞもと再度つねれどまことなり

今日のよろこび何にたとえん

つつがなく還り来ませし夫が寢息

三年めに聞きぬ青葉の部屋に

還り来し兵士の前に弾丸ならぬ

桜の花のほほえみて舞う

“至烈部隊歌”を作詩し戦友に託す

無事復員出来るか否かを案じて

部隊歌を戦友に託して八日後に

還りて唄う感激いかに

この喜永遠に忘れじつつましく

苦難の道も耐えんとぞ思う

至烈部隊歌―中支にて―

T・Rさん 71歳

撰津市正雀本町

烈々燃ゆる闘魂を

戒衣につつむ勇夫が

莞爾と笑めば支那の子が

来りて唄うなごやかさ

支那の民安らけく

豊かな稲穂なびきけり

あゝ!!

愛民の “至烈部隊”

湖南の山に春が来て

湖上の水ぬるむ時

将兵集う丘の上

軍歌よとどけ国迄も

そよ風匂う桃の花

武人の心誰か知る

あゝ!!ゆかしけれ

“至烈部隊”

捕虜の一日 ほりよ

K・Sさん 67歳

摂津市正雀本町

シベリヤの冬は夜明けが遅い。

暗闇の中から「起床」と不寝番の声。

つづいて「飯上げ」と炊事から声がかかる。

朝飯と言っても、大豆と豌豆のスープのようなものである。

朝飯が終わり、燕麦でつくった黒パンを三〇〇グラムもらうと「作業整列」の声がかかる。

アムール五十人、シャワー五十人、……五十人……三十人、最後に水道一〇〇人と整列し終ると、前と後に警備兵がついて、ラーゲル（収容所）をあとに作業場に向かう。作業場に着く頃にやっと明るくなった。

八時になると「作業開始」のカマン

ジール（引率将校）の号令で、凍り付いてコンクリートのようにかたい地面を、金棒のようなもので穴を掘るのが、一日のラポート（仕事）である。

水道管を通す穴だと言うことだが、一年の半分を冬で過ごすシベリヤでは、地下四メートルまで掘り下げないと凍ってしまふ。

深さ四メートル、幅一・五メートルの穴を掘るのは楽なラポートではない。

「ヤポンスキー、ソルダート、イビヨナマーチ（日本の兵隊は働きがにぶい）」とナチャニツク（現場監督）の声。

やつと十二時が来て一時間の休憩。ドラム缶でつくった、お粗末な薪ストーブの休憩所は一度に百人が入れない。二十分ぐらいづつ三交替で暖をとりながら、朝もらった黒パンを食べる。二十分が過ぎると名残り惜しいがまた寒い屋外へ。

一時になると作業再開。地獄の鬼でもあるまいに金棒で穴掘りがはじまる。もう何時かなあー、そろそろ暗くなりはじめたから四時頃だろうか、あと一時間程やなあー、と思いながら、コンツンと金棒を動かす。「作業終了」の号令で、やれやれ五時が来たと、大いそぎで金棒をかたづけける。

もう暗くなった道路を、警備兵に引率されて、疲れた足をひきづりながらラーゲルへかえり、大豆と豌豆のスープのような夕食を、電灯もない暗い二段座敷のようなところで食べる。

七時になると点呼、また寒い屋外に出ねばならぬと思うといやになる。ソ連兵が勘定しやすいように十人づつの列をつくる。アジン、ドアー、ツリー、シチリー、ペアッチ……、と納得のゆくまで何回でも勘定をしなおす。

「点呼カンチャイ（終り）」の声でやれやれと思うと、「戦友」を五分開

歌ってくれ」今度はソ連兵の要望である。「ここはお国の何百里」ソ連軍に追われて逃げる途中で倒れた戦友を偲びながら歌う。倒れた戦友はどうなっただろうか。追われて逃げるのが精一杯で、どうしようもなく放つて来た戦友を偲び、ソ連兵は歌詞はわからないが、何んとなくしんみりとした曲に耳を傾けるのであった。

真つ暗な舎内に入ると、もう何もすることはなかった。一人に一枚の毛布（二枚以上持っていた者は強制的に取り上げられた）にくるまって寝るのだったが、真つ暗な中でただ一つの楽しみは、捕虜仲間に南條文若（現、三波春夫）がいて、毎晩のように浪花節を聞かせてくれたことである。本人のネタが切れると、米若や虎造の物まねで楽しませてくれた。米若の佐渡情話はなつかしいなあーと聞きながら、いつの間にか眠っていた。

一日八時間のレポートにも例外があった。それは夜間作業である。ハバロフスクの駅に貨物列車が着くと、定められた時間内に積んだ荷物をおろしてしまわなければならない。

点呼がすんでやれやれと、くつろいでいると「夜間作業がある。今から名前を呼ばれた者は集合」との声。

「○○○○」「△△△△」「××××」

「K」と呼ばれてしまった。つらいけれども、どうしようもない。舎外に整列すると警備兵が前後について貨物駅へ。暗闇の中に貨物列車が止まっている。「ストイ」（止まれ）とナチャニツクの声で止まる。貨車の扉を開けると麻袋が積んであるのが微かに見える。ソ連人が板を二枚運んで来て貨物にかける。「○○時までにおろしてしまえ」と再びナチャニツクの声。

電灯（照明）の設備もない暗い中で、一列に並んで荷おろしはじまる。貨

車に積んである麻袋の中味は麦のようである。一人づつ麻袋をかついで貨車にかけた二枚の板に、上り下りするのだが、四十五キロの身体に四十キロはあるだろうと思われる麻袋をかつぐのは重労働であった。だが倒れるまで続けなければならない。何回か荷おろしを続けているうちに、ついに力が尽き、麻袋をかついだままレールの上に落ちてた。いやと言うほど膝と肩を打って立てない。引率の将校がとんで来て「大丈夫か、お前の身体では少々無理だ。暗いところで休んでおれ」と言われる通りに、貨車の蔭に座っていたが、作業が終る頃にナチャニツクに見つかってしまった。「ダバイ（早く作業しろ）」と言うのだが足が痛くてどうにもならないので、将校を呼ぶと「見つかってしもたら仕方がないから、おれがぶん殴る格好をするから、そこに倒れろ」と言われる通りに、ぶん殴ら

れて倒れると、「ニーザ、ニナーザ（その必要はない）」ソ連ではなぐることは、法で禁止されていたからでもあるが、程なく作業も終わり足をひきずりながらラーゲルへ帰ったが、あれから四十年近くも経た現在、後遺症となつて足をひきづりながら、電気治療に通わねばならないとは……。

戦争から平和へ！

私の体験三話と平和感謝合掌の今

Y・Hさん 76歳

摂津市千里丘東

一、進攻―支那事変参戦記

昭和十三年大阪第百四師団の動員により、陸軍歩兵少尉として召集を受け、歩兵第百八連隊の小隊長に任ぜられ、満州における酷暑地の実戦的訓練と対ソ連張鼓峯事件に参戦。終結のあと南支派遣軍の序列に入り大連より南下、バイアス湾の塩灶背に上陸し、広東攻略のため酷暑と豪雨の中を完全軍装の重さに耐えて淡水、惠州、増城、石橋壩を進攻し、十一月二日広東市に入城した。そして休む間もなく我第三大隊は北進し蕭岡、南村地区に進出、掃蕩を続行し警戒任務についた。そして広東周の宜撫治安回復に専念したものである。

その後、師団は重慶軍が全線にわたる総反撃の指令を発したとの情報に基づき、花県平地に向け攻撃開始、大いに戦果を昂揚した。

爾後、三水地区に移駐し第一線警備についた時、敵軍の四月攻勢に遭遇した我第三大隊は西江左岸の馬口、九水岡の激戦で、戦死者中隊長以下二十名、戦傷者三十二名の損害を受けたが、果敢なる攻撃を続行し敵の反撃を阻止、大いに戦果を得た。昭和十四年六月、三水より我大隊は広東北方の兵工廠に移駐し、また八月に蜂湖に移動、敵の来襲を撃退して警備任務についた。

その頃陸軍歩兵中尉に昇進する。かくして同年十一月、翁英作戦に突入。わが連隊は南山支隊の主幹部隊として粵漢線に沿い北上し上南坳に進出。敵百五十二師団と交戦しこれを撃退。続いて伯公坳高地に陣地構築し敵の大軍の執拗な攻撃を阻止。激戦の末、大損

害を与えて撃退し、なお浥江の渡河を敢行して英徳に進攻。十二月三十日、英徳県城に突入占領して軍の目標は達されたが、南寧作戦の激況悪化に伴い、十五年一月一日を期して反転しこの大作戦は完結。西山支隊は軍司令官より感謝状を授与された。

そして再度兵工廠に移駐。その間五月の良口会戦に、十六年九月の四邑作戦に参加のあと師団の将校第一回の召集解除により、十二月八日の太平洋戦争宣戦布告を帰還船中にて聞き、十七年一月、故国日本の土を踏み進攻の記は終わる。

二、防禦―迎撃陣地構築談

復員以来銃後にありて、二カ年半余の昭和十九年十月、再度召集を受け高槻工兵隊に入隊。歩兵、砲兵将校五十名が工兵将校に転科のための教育を二カ月間受け、その内五名が部隊に残留

を命ぜられ中隊長として二十年一月より自宅から通勤して職務に励行のさ中、師団命令に依り高槻工兵隊より作業指揮部隊を編成し、その隊長として和歌山県御坊市東南吉田村に駐留した。

在阪各部隊より派遣された作業部隊計約五百名を指揮し、南方海上より攻撃し来たる敵軍の上陸を阻止殲滅する目的を以て、三十糎加農砲の陣地構築に着手。各部隊将兵の精励の末、三月末を以て完成し各部隊は原隊に復帰し、わが工兵部隊は引続いて大阪府の南端の孝子村に移駐し高射砲部隊と協力、海岸山腹に二十五糎榴弾砲の格納庫を構築し、大阪湾を北進する敵軍を潰滅する目的を以て、鋭意作業を続行、五月末これを完了。その間榴弾砲搬入のため「山口橋」「藤橋」「松橋」の三橋を架設したのを懐い出してこの項は終わり、次の被爆話に移ろう。

三、被爆―まぼろしの広島架橋話

孝子峠の砲陣地完了直後、すなわち昭和二十年六月、第二百二十五師団編成命令に依り高槻工兵隊に於て新たに将兵を召集され、新設工兵大隊の第一中隊長に任命され編成業務を完了し、部隊は兵庫県竜野に駐留し教育訓練を実施。その間私は千葉工兵学校に於て一カ月間工兵中隊長として教育を受け、竜野在の部隊に復帰し教育訓練に任務精励中、八月六日の広島原爆投下の日を迎えた。

そして八日師団命令によりわが部隊は本部および第三中隊を残し、第一中隊および第二中隊を併せ指揮し山口部隊として現地広島警備司令官の指揮下に入るべしとの命により姫路駅を出発。十日朝、破壊された広島駅に到着。途中道路脇の仮天幕の中の被爆の方の痛ましい姿をかいま見ながら現在の平和記念公園に至り、警備司令官に申告し

下記命令を受ける。「作業部隊は被爆により焼失せる天満川の上流より広島瀬橋、緑大橋、新観音橋を、引継ぎ太田川の上流より相生橋、西平和大橋、新住吉橋の架設作業を命ず」この命を受け直ちに第一中隊に天満川の架橋に、第二中隊を太田川の架橋にと分担を決め、また各中隊毎に架設班、材料班、機器班とに編成し、各中隊各班毎にその任務に就かしめる。材料班は当時各河川に繋留してあった丸太材の検分仕わけに、機器班は近郊町村に製材機、杭打機、巻上ウインチ、測量器具等の借入に、そして架設班をしてそれぞれ現地の測量丁張に着手、そして鋭意作業続行中、十五日急拠隊長集合の命を受け、馳せ参じたところ司令官より予想もしない「天皇陛下の玉音」を拝受し日本の終戦を知る。

帰隊のうえ、部隊全員にこれを伝え部隊は架橋任務を解かれ現地間との残

務整理を完了し、原駐地竜野へ帰隊した。
直ちに召集解除となり下士官兵を故郷
に帰し、部隊の整理を終了し故郷摂津
市（現在）に帰り、まぼろしの広島架
橋話は終了する。

平和―感謝、合掌の今

明治に生まれて大正の世に学び昭和
初期の参戦、そして昭和二十年被爆終
戦から平和へとわが国未曾有の一大転
機を体験した私は、二次被爆者として
摂津市原爆被害者福祉協議会の一員と
して「核戦争起すな」「核兵器なくせ」
を主目標に、また、ノーモアヒロシマ、
ノーモアナガサキをモットーにして平
和推進運動の一端を担いつつ、終戦四十
周年、この平和な現代に生きる幸せに
感謝し、全世界全人類の永遠の平和を
祈念し、大陸で散った多くの戦友と被
爆死された人びとの冥福を祈りながら、
余生を送っております。

早春譜

I・Kさん 79歳

摂津市新在家

晩秋の昭和十六年十二月一日、呉海兵团に入団せよとの赤紙が届いたのは召集の三日程前だと思ふ。

巷は戦争の渦に巻きこまれて、今日も征く幾人かの若人等が別離の悲しみを超えて、緊張と昂奮の裡に孤村は昏れて行く。

江田島兵学校に配属されて練習艦に乗り組み、士官候補生の実習指導訓練にあたった。

近海は機雷敷設で航路は塞がれて危険極まりなく、内海での訓練に忙殺されていた。

突如、沸きあがる歓声が軍艦マーチの曲に乗って「大本営発表、我が帝国海軍は本日未明、敵の真珠湾を攻撃し、〇〇艦△隻爆破の戦果を収めたり。

万歳」と何回となく繰返され、敵の狼狽ぶりも愉快なまでに報道されていた。

翌日が十二月八日宣戦布告の日である。

寝首を掻いたような戦果ではあつたけれど将兵の欣喜雀躍は言うまでもない。

その後のミッドウェイ作戦や戦績は発表されずに終わった感じである。

世界に誇る戦艦大和や武蔵、航空母艦赤城の艦隊集結が事前に発覚されて敗戦の憂目に遇い、あたら大きな財が海の藻屑と消え去ったと聞いている。探知機情報の劣等によるものだと言われていた。

戦線急を告げて横須賀工機学校へ入学を命ぜられ敵前上陸艇の「エンジン」の解体から組立、調整、操作の一切を僅か二カ月で修得させられた。生地獄さながらの訓練には閉口した。機関長として機雷敷設に、上陸訓練に、将来は大きな戦果を、と夢見たものである。

百夢の海なまぐさく陽炎える

軍刀一振りをおし頂いて勇躍陸戦部隊に参加し、九州宮崎で戦闘機の格納庫増設作業に汗を流し、事故の発生に涙した記憶は今もなお残っている。同胞の一人が砕岩機の操作を誤り自爆したことである。徹夜で火葬を行い納骨を済ませ、遠くわざわざ大阪から英霊の遺骨を引きとりに来られ、涙で渡したのであるが、若き未亡人が亡き主人を抱いて去り行く姿を見送った黄昏れ径……

遺骨去る 倅淡く時雨けり

如月の香港への征途は大変だった。逆巻く怒濤の玄海灘で何回か沈没の憂目にあつた恐怖や、船内でシラミの温床になった着衣には、人に語りつくせない苦労があつた。

そこかしこに起きる銃撃戦や、九竜の裏山から「ゲリラ」の撃退戦も大戦という怪物の一駒かもしれない。

木製の飛行機を二、三機据えて敵機に備えた。祖国の軍備に終末の感を深くしたことは申し上げるまでもない。

木飛機は貌で国守る花野かな

悠々と飛爆する敵機を尻目に壕への駆足が日夜つづいた。

飛機去つて安き心や夏の月

捕虜の身となり工場等に使役として差し回され、ある時は銃剣で尻を突かれたり、血ぬれた足を引きずって戻ってきた者もあった。食糧不足での労働は動作に鈍りは出たかも知れないが、敵愾心が日毎に募ったことはない。

囚屋のともしび淡し秋の風

以上、五カ年有余の体験の一頁に過ぎないが、一体、戦争は何をもたらし、戦争から何を得たのかと思う。ただ、心の奥にあるものは、折角の平和な家庭が破壊され、罪のない幼児まで飢餓の苦しみを味わいなめた戦い。針小棒大に誇大の戦果発表で将兵を酔わしめた欺きや、巨額な財を海の藻屑と葬り去った愚かな戦いの損失、捕虜の身の屈辱の日々を堪え忍んだ同胞の苦しみなど、走馬灯のように脳裡を駆け巡るけれど、戦争によって得たものは何一つとして見当らない。

戦争は犯罪を作った怪物でしかないのだ。帰郷して、発心思い立ったのは自分のこれからの歩く道、筆にするまでもないが、先ず平和であり、新しい

明るい町づくり、住みよい町を作ることにあった。

このために微力ながら住民各位のお力添えを得て、村政に、市政に、社会福祉に参画し、老軀に鞭打ちながら平和を願って今日まで来たのである。余命幾ばくもないが市政の発展、住民福祉のため命のある限り尽したく考えている。摂津市の平和宣言の輪が、日本の平和の輪となり、世界の平和の輪となることを心より祈念しております。

早春の彩急く庭の梢かな

早春譜奏でる樹々の陽に眩し

外地での体験 引き揚げ

忘れ得ぬ日々―私の戦争体験記―

M・Eさん 61歳

摂津市香露園

今もなお中国に残留孤児と呼ばれる多くの人びとが、肉親を求めて望郷の思いに沈んでいます。これらの人びとの悲痛な叫びを聞くと、胸がつまる思いがします。それは、私も旧満洲から子供を連れて帰って来た体験を持つものからです。

思えば四十年の歳月を経た今も、あの頃の悲惨な状況がまざまざと甦ってきます。当時私は、南満洲の安東市（現在の丹東）に住んでいました。夫は終戦の年の四月に応召になり、まだ二歳になっていない息子と二人で終戦を迎え、敗戦の混乱期を過ごし、翌年十月に安東を出発、引き揚げました。私は命令による正規の引き揚げです。から、北満の開拓団の人ほどの苦労は

していませんが、それでも安東から引揚船に乗る葫蘆島までの行程なら、汽車で一昼夜位で行ける所を、途中鉄橋が破壊されていたため、徒歩とぎゅうぎゅう詰めが無蓋車に揺られて、一箇月もかかって漸く葫蘆島にたどり着くと言う大変なものでした。

幼な児を背負って何日も空腹と疲労に耐えながら、自分の体力と気力だけで歩き続けるのですから、今考えてもよく無事に子供を連れて帰って来れたことと思います。

残留孤児となられた人は、開拓団など北満に住んでいた人が多いのですが、北満の人はソ連参戦の日より我が家を追われ、山野をさまよいながら、飢えや病に倒れ或は殺されたりして、多くの人びとが無念のうちに死んで行きました。また、混乱の中で食べる物もなく、明日の生命もわからず、せめて子供だけは助けたいと手放した人も多

かったと聞きます。思うに、死んだ人も残った人もすべては戦争の犠牲者なのです。今も地球上の何処かで戦争が起きていますが、戦争はすべての国民を犠牲にします。私は、今日の日本の平和な日常を喜び、この平和がいつまでも続くことを願うと共に、さらに広く世界の平和を祈らずにはおられません。

すべての人が再び悲惨な目に遭うことの無いように、ささやかながら私の戦争体験を短歌につづり、永遠の平和を願いたいと思います。

夫は征く

四月よっ後に敗戦あるをつゆ知らず

補充兵なる夫つまは出で征く

唐突に赤紙が来て夫は征く

幼なき吾子とわれを残して

奉公袋ただひとつ持ち手を振りて

さりげなく征きしあの日の別れ

いつの日か生きてま見えんわが夫と

思えば悲しかかる別れは

夫の姿小さくなりて消ゆるまで

見凝めていたり吾子抱きしめて

国敗る

はるかなる記憶となりてなお残る

敗戦の民となりて過せし満州の日々

国敗れ異国となりたる満州に

ひと日の生命いのち惜しみて生きき

一瞬に異国となりて堪え難き

日をひたすらに生ききし若き日

焼き打ちの炎は山を伝い来て

われに迫りぬ敗戦の夜

人影におびえる吾子の口を塞ぎ

堪えし日幾日あり夫は帰らず

声をひそめ体こごめる仕草身に着きぬ

幼なき吾子は兵に怯えて

怯えつつ堪えつつ生きたるかの夏は

遙けくなりて鳳仙花咲く

再びは見ることも無き我が家の

すべてを心にとどめ出で行く

引き揚げの道

広き部屋にリュック一つが残りたり

去りゆく日まで夫は帰らず

帰り来ぬ夫が形見に大島の

軽きを選びて我が荷に納む

黙々とただ歩み行く列つづく

帰国の想い胸に秘むれば

隊列に遅れじと歩むわれの後ろ

銃持つ兵のほかは人無し

故国こくにの土踏む日夢見つひた歩む

肩にくい入る重みに堪えて

背負いし児の無事のみ願ひひたすらに

幾日歩めり我を忘れて

背負いたる児の呼吸いき確かめ確かめつつ

ひたすら歩む長き山坂

背は重くあらずさりしつ這い登る

小さき木の根握りしめつつ

逃げまどい飢えに苦しみ吾子の名を

呼びつつ死にし人や幾千

吹雪舞う葫蘆島沖にくろぐろと

我らを運ぶ貨物船見ゆ

リュック背負う人の群消えたる岸壁を

引揚げ船は音無く出でぬ

大陸に悲喜こもごもの若き日の

すべてを灼きて陽は海に没つ

凍りつく土にいまなお埋もれいる

友に捧げん鎮魂の歌

私の生きた戦中戦後

H・Aさん 48歳

摂津市一津屋

昭和十九・二十年と言えば、国民学校一・二年の頃であった。当時私の家族は朝鮮忠清北道の田舎で、父は特定郵便局を営み、九人家族で生活していた。

戦時中は、日本のような激しい空襲は全くなかったが、たびたび学校からの日の丸の旗を持って、近くの川の船着場へ出征される兵隊さんを見送りに行った。若い兵隊さん達が軍靴の音を響かせ、私達の学校に来て宿泊し、いろいろの訓練をしていた。また、それぞれ家では防空壕が掘られていて、その周りにはヒマシ油の葉が繁り、外から分りにくくしてあった。

ときどきB 29が飛来すると、塀づたいに身をかくして急いで逃げ込み、両手で防空頭巾をしっかり押え、敵機

が通過するのを息をこらし、じっと待っていたことがあったが、幸いにも爆撃を受けたことは一度もなかった。学校は朝鮮の子供と共学であった。ほとんど勉強をした思い出がなく、田植えの時期には低学年の私達も、近くの農家に勤労奉仕で田植えの手伝いに行った。大きなヒルがたくさんいて手や足に吸いつき、みんな大騒ぎして逃げ回った。夏休みには飛行機の油にする松根（抜伐した松の木の間）を掘りに、兄達と一緒に山に行き、大変苦勞して何株も掘りへとへとになって帰ったこともあった。

お国の為と言うことで誰も嫌だと言えなく、真実を国民に知らされない時代であった。幼い私達が一生懸命松根を掘っていた頃、日本では広島や長崎に原爆が投下され多くの尊い命が失われていたことを思うと、何故日本はもつ

と早く戦争を止める勇氣を持たなかったのかと悔やまれてならない。

それから間もなく、一週間程過ぎた昭和二十年八月十五日、日本が敗れたことを父から知らされた。その時家に居た朝鮮の人も、母も兄達もみんな泣いた。私は、戦争に敗れたと言うことがどんなことなのか深い意味が解らなく唯ぼかんとしていた。翌日、父の部下として働いていた朝鮮の人が来て、日本は敗れたのだから早く日本に帰るよう、毎夜、日本刀を片手に脅しに来るようになった。母と私たち子供四人は夕方になると、近所の朝鮮の知人の家に逃げて泊めてもらい、翌朝、自宅に戻る毎日が続いた。その間、父と大きな兄二人は、日本刀を持った朝鮮人の前で正座して早く日本に帰るよう脅され、兄達は本当に恐ろしかったと言っていた。

これも戦争がもたらした悲劇で、昨日まで仲良く一緒に働いてきた友人と、こんな姿で向かい合わなければならなかった父の心中は、無念さでさぞ辛かったことと思う。

やつと十月の中旬になって引揚げの準備が始まり、日本に持って帰れる荷物は、大人も小人も南京袋一個という制限であった。そのため、ほとんどの家財は置いてこなければならなかった。引揚者収容所に着いた時は、各地から集まって来た人達で大混乱だった。特に、子供の着ている物や履いている物は、うっかりしていると取られてしまう有様で、私も母が作ってくれた「もんぺ」とぞうりを取られ、母がすぐ気づいて追いかけて「もんぺ」は返してもらったが、ぞうりは見つからず、知り合いのおばさんの大きなぞうりをもらってはいいた。

釜山港（日本への船が着く港）へ行く列車は、牛馬を運ぶ貨車であった。

乗り込む時も幼い子供達は、まるで犬猫のようにポンポンと中に投げ込まれ、泣きわめく声で大変であった。とにかく、帰国船に乗り込むまでは、寒い倉庫で身を寄せ合って眠り、何時までたっても進まない長蛇の列で、みんな腹をすかしながらじつと我慢して待っていたことやそのような大変な中で、みんな病気をせずに無事帰ってこれたことを思う時、両親の苦勞はいかばかりであったことか。山口県の下関から名古屋までの汽車は、窓から出入りする者等鈴なりの乗客で、トンネルに入る度に灰煙で息がつまる程苦しかった。みんなすすだらけの顔になって、ようやく名古屋に着いた時は日はとつぷりと暮れていた。

私たちは疲れた足で三重県の桑名へと向かった。父の故郷は桑名から三十キロも奥に入らねばならず、訪ねた親戚も焼けてなく、父や兄達は一夜の宿

をさがしに行ってくれた。しばらくして戻って来た父は、「厚かましいけどみんなで世話になろう」とその民家に行く事にした。見ず知らずの私達を快く迎えてくれて、貴重なお米で真白い御飯を炊き、大根のおつけものを御馳走になった。こんな食事はしばらく口にしたことがなかっただけに、ホッペタが落ちる程おいしかった。

日本中が暗くて辛い混乱の中にあつて、両親は五十歳にして人生の再出発をしなければならなかったことは容易ではなかっただろう。私達家族は、このような心温まる出会いがあり大変勇気づけられ、その後の大きな支えとなったことは間違いなかった。

帰郷後は本当に食物に困った。お腹がすいたら水を飲んで空腹を満たし、時には米ぬかの焼いたのを食べたが、どんなにお腹がすいても食べづらかった。配給のさつまいもも、食べ盛りの

我家では足りなく、父は毎日リュックを背負って隣り村まで買出しに出た。

母も人に貸していた畑を返してもらい、さつまいも、麦、大豆とあらゆる農作物を作り、懸命になって働き私達を育ててくれた。

収穫があるようになって少しは楽になったが、私が六年生の頃でもまださつまいもを弁当に持っていかなければならなかった生活であつたから、苦しい食糧難は五、六年は続いたような記憶がする。

そのような貧しい生活の中で卑屈にならず、心豊かに育つことができたのは、やはり父母が生きたために一生懸命働いてくれたこと、そして私達も父母のそんな姿を見て、農作業と家事の手伝いをして父母に喜んでもらうためにがんばったことが大きな原因だと思う。戦中戦後、耐乏生活を強いられ、子供と弱者を巻き込んで尊い命を奪い

合う戦争に強い憤りを覚えると共に、築き上げた平和が末長く続くことを心から願っている。

母の体験

K・Tさん 39歳

摂津市鳥飼中

母は大正十年二月生まれ（六十四歳）。開原幼稚園、鉄嶺小学校、奉天商業卒業後、国際運輸（株）奉天本社に入社。二十二歳で警察官の父と結婚。翌年長男出産。昭和二十年十月「動乱の中」で長女の私が生まれた。私がこの世に生を受け、現在二人の子供の母として家庭に恵まれ幸せに暮しているのも、強く逞しい父と母の「強い愛」があったからである。

生きて本国の土を踏むことができるかどうかという動乱の時、生まれて数カ月の私をリュックサックに入れ、底を左右切り抜き、両足が出るようにして、母は首からつるして私を連れて帰って来たそう。幼い頃から戦争の体験や引揚げ者の苦労話を聞かされ育った。

今回のこの体験談は両親への恩返しのためにも協力してもらって筆をとったものである。祖父の満鉄駅長時代、父が満州での警察官としての任務、駅長の娘、警察官の妻、戦争で幸せから、どん底の生活に、その苦労を書かせていただく。

母の人生で一番楽しかったのは、小学校四年生だったと言う。当時私たちは鉄嶺公園の前の満鉄住宅に住み、夏はプール、夕方になると公園の池の蛙がコーラスを始め、西の空が真赤に染まり、それは美しい満洲独特の情景だった。夕暮れ時になると、中国人上流家庭の旦那さまだろうか、黒の長い支那服に黒のお碗を伏せたような帽子をかぶり、両手を後に組んでクルミを手の掌でカチカチと鳴らしながら、蛙の鳴く池のほとりをよく散歩していたそう。池の南側には小高い山が作られ、秋には紅葉し目が覚めんばかりだった。

冬は零下二十度の銀世界。屋内では卓球、屋外ではスケート。母は今でもとてもスケートは上手である。夜九時には、守備隊の消灯ランプが遠く淋しく聞こえてきた。何とも言えない郷愁の思い出になっっているそう。五年生の九月十八日、突如満洲事変が勃発し、今まで自由に登下校していたのが、その時から地区毎に集団登下校するようになり、不安を感じる日々だった。

五、六年の時、負傷した兵隊を積んだ列車が通過する時は、授業を中止し、鉄嶺駅までクラス全員と先生が日の丸の旗を持って出迎えに行く。負傷兵がぞくぞくと下りてビッコを引いたり、重傷者は汽車の窓からタンカで車外へそして鉄嶺の陸軍病院へ運んで行く。

開原の親戚に遊びに行った時、網戸越しに拳銃の玉が飛んで来て、近所中が大騒ぎ。また匪賊が出たとのこと。匪賊と日本警察隊との戦いだ。匪賊は

どどん郊外の高梁畑こうりやんの方に逃げて、その後を警察隊が分れて追って行く。高梁畑の上から煙が上がる。母は生まれて初めて目の前で撃ち合いを見た。捕えた賊を郊外で一般民衆の前で見せしめに撃ち殺すのだ。

翌日、警察署の裏にズラリと並んだ匪賊の死体。ハダシの者、片足だけ支那靴を履いている者。上には莛むしろが一枚かぶせられていた。どうしてこんなことをするのだろうか？子供心に当時分からなかった。五年の時公主嶺（新京と四平街の間の町）で戦死した土田上等兵、その他勇敢に戦った将兵達の血まみれになった軍服や鉄かぶと、その他の所持品が鉄嶺の陳列館で陳列。スパイで殺されたあの有名な中村大尉。北満だったか蒙古だったか忘れたが、支那人の家屋に支那人になりすまし、敵のあらゆる行動や機密を日本軍に洩らしていた。それがバレて殺されたこと

を今でもよく覚えている。死んでもレコードにまで歌われた「義勇奉公ようほう四の文字胸にきざみてむちをあぐ……マスラオ中村シン太郎行手は遠し興安嶺こうあんれい」やがて満洲国が建国され、日本から日満親善交換の可愛らしい女の子の使節団が来満。母達、クラス全体が鉄嶺駅迄出迎えに行った。満洲国ができてからは、それは平和になったそう。母が奉天商業に入学して間もなく、日本で二・二六事件が起き、ラジオ、新聞を賑わした。

若い血気盛りの兵隊達が総理大臣、各大臣、将軍達の官邸を急襲し、要人が暗殺された事件もついこの前のようにに思い出される。卒業後国際運輸（株）奉天本社に入社。間もなくノモンハン事件や蘆溝橋事件ろこうきょう勃発。国際運輸社員や満鉄鉄道員は、在満居留民のために生命を投じて戦い抜いた。

皇軍将兵が強くとも弾薬あるいは他の食料品、軍事上必要な物資をスムーズに輸送守備するのが国際運輸社員の使命であった。現地社員や兵隊は炎熱下30度、また冬は酷寒零下30度もある北満の輸送警備に、戦火の巷ちまたに昼夜不眠不休で挺身的活動を続け、疲労過労その極に達してもなお、心身に鞭打って業務を遂行し、食するに適当なる食物も無く、満人苦力ククリ同様の物を食し、胃腐をこわしても医者も薬も無く、血便を耐えて東西に奮闘された社員、何一つ娛樂があるでなし、母達は何時もの兵隊達にも千人針や慰問文を送った。奉天射撃場で実弾射撃の練習もした。射った瞬間ひどい衝撃で数日痛みが続いた。

戦火は拡大の一途をたどり、何時果てるとも分らない憎み切れないあのソ連兵の不法越境に対し、皇軍は断固

として反撃を加えても、ソ連飛行機は執効に満洲国内深く侵入し、日本全権大使松岡洋右は国際連盟を遂に脱退し、世界の国を相手に第二次大戦開始。真珠湾攻撃から戦火はいよいよ拡大。日独伊が三国同盟を結び世界の国と戦った。

親日派のチャンドラポーズ氏（インド）を日本の家庭にかくまった記事を読んだことも覚えている。食料衣類等すべて配給制になり、白米が大豆やその他代用品に替ったトウモロコシの粉、芋の粉でタンゴを作り主食とした。野菜の代りに芋づる、タンポポ、ノビル、ツクシ等まで食した。長男が生まれ着物の布地が一回配給され着物は一枚だけ。後は父の古着をほどこき帽子、服を母が縫ったそうだ。数日後、祖父（平東駅長）が日本人だけ集めて「関東軍からの命令でここが戦場になる。明朝、朝鮮の平壤へ疎開するため四平街に集合。至急準備せよ」……

赤い夕日の大陸に

捧げる鎮魂の詩

H・Hさん 63歳

摂津市鳥飼西

一、あの日と同じ夏が来て

やけつく日射しによりみがえる

四十年の歳月を越えて

想いはまためぐる

大きな夢に青春を

かけて渡った大陸を

戦火に追われ西東

一人でも多くの友を祖国へと

肩をたたいて手をとって

祖国へ続く此の道を

屍ししかばねつもるいく山河

夜露と消えし同胞の

無念の涙いまもお

平和のくらしのかたすみに

君等を偲ぶ夏が来て

もえる夕陽が今日も又

地平の果てに沈むだろう

二、いく星霜を重ねても

心は残る遠い国

我が子我が孫同胞を

戦火の中にさらしては

ならぬ心を又誓う

王道楽土満州の

君等のねむる大陸に

ひびけ平和の鐘高く

中国残留孤児に想う

戦火の広野を西東

母の名を呼び泣きくれた

幼い昔の想い出の

かすかなきおくつなぎつつ

心こがした故国への

四十年の歳月は

かなしい遠い旅だった

たずねる母の故里に

こいしい母の胸はなく

涙かわかぬ胸をだき

帰る心は重たかる

日本に戦が終わっても

日本に平和が帰っても

この兄妹に幸の

平和の春はいつ帰る

遅い春

I・Yさん 52歳

摂津市千里丘

今朝も、奉天市立宮前国民学校校庭に亡くなられた人たちの数がふえていました。

男の人は生まれたままの姿で、女の方は下着一枚だけ着けて、積み重なっています。凍土となる前に穴を掘り、葬ることはできました。

学校も十月になって、北満から南へ南へと避難してくる人達の収容所に変まりました。南満とはいえ、ここ奉天（現在の瀋陽市）では十一月になれば霜が降り、十二月になれば雪になり三寒四温の気象で道路は凍結し、夜間は零下十度まで気温が下がります。着のみのまま避難して来る人たちは、夏着で、冬着も寝具もないありさまで、学校の机、椅子で暖を取れるうちは、

まだ望みがありました、それが無くなれば唯、死を待つものの、敗者の悲しい現実です。

亡くなっていく人たちが、生まれたままの姿で放置される!!それは人間として耐えがたいことですが、生きて行く者が一枚でも自分の体にまとうことを、この極限の状態でだれも責めることはできません。

私が渡満したのは、昭和十八年。四年生の夏でした。

父が故郷（愛知県豊田市）を捨て、先に軍属として渡満。三年後に母と二人で父の許に行き、黒河省孫呉、チチハル。父の現地応召とともに母は父の隊に就職。そして部隊の南下に従って奉天に着いたのが八月十四日でした。翌日の玉音放送を聞いて、部隊の解散。幸いにして住まいも共同生活ではありませんでしたが八階建の台東ビルに入ることができました。もちろん電気はつ

きませんでした、ガス、水道は利用でき、引揚げまで頑張りました。

ソ連軍の南下、そして八路軍（現在の中華人民共和国軍）の北上。それを追って国府軍（現在の台湾軍）の追撃と、連日連夜、銃撃音のたえる日はありませんでした。

そのような中で十一月頃、国府軍が駐留し、やっと治安が安定してきました。学校も、空になった日本人の会社跡やビルを利用して再開されました。先生達は、「日本へ帰れても帰れなくても勉強だけは続けさせてやりたい」の熱意。でも、机も椅子もなく、各自で折りたたみの小さい椅子をもってきて、それが無い子は座布団、そしてカバンが机でした。みんな勉強できることが楽しく、うれしきで一杯。私達は幸せでした。ひもじくても家があり、学校だって通えたのだから。

避難者の人達は食料も家も布団も暖め合う火だつて少なかった。日本人同志なのに助けることもできないもどかしさ。働いてお金を得る気持ちはあつても場所がない苦しさ。外地にいて敗者となった人間のみじめさと、人の命の小さいことを知りました。

年明けと共に「避難者が中国人に子供を売っている」と大人から聞くようになりました。子供心を傷つけられましたが、しかしあの極限状態の中で、子供だけは元気に育つてほしい、親はそのお金でもし帰れるとしたら、一日でも生きながらえたい、悲しい運命の始まりではありますが、だからと言ってこの人達を悪人とは言えません。また「日本人の子供は頭が良いから子供拐いが多くなった」と耳にすることもありました。

春の来るのを待つこともなく一月、二月、校庭は死者の山となつて行きま

した。どの人も胸の上で合掌しているのは少なく、何かにすがりたい思いで腕を上にあげていました。

そんなある下校時、中国人が上向きになつている女の人の下着を棒切れで取るのを見た時、思わず怒鳴つてしまいました。

「プーシー!! (止めろ!!)」

昭和二十一年三月十八日、やっと奉天も春らしくなり、道路の氷もとけ出し、父兄も同席しないささやかな卒業式が貸しビルで行なわれました。そして道路に面した玄関で、記念写真（不幸にして満州での写真は一枚だけしか持つて帰れませんでした）を撮るため並んだ時、女生徒の悲鳴で中断されました。あまりにも偶然で、ショックな出来事でした。

馬車に丸太や木材を乗せるのと同じように、積めるだけ積み上げられた「あの人達」が、無言で何台も何台も

私達が呆然と立っている前を通り過ぎて行きました。

「暖かくなる前にやっと郊外で茶毘にふされる」と先生から聞きました。「もう人目にさらされなくても、中国人に恥しい思いをしなくてもいいんだね」言葉に出さなくても見送った学友達も同じ思いでした。

私はこの一枚の記念写真を見るたびに、春を待たずに亡くなっていかけた方々の冥福を祈り、骨と皮だけになつてでも日本の土を踏めたことの幸をかみしめています。

戦争体験者の私達世代が二度とあやまちを繰り返さないためにも「平和」と言う尊い遺産を守り続けるための礎となるべきと考えます。合掌。

戦後の苦難体験

A・Kさん 73歳

摂津市一津屋

四十年前の思い出したくない恐ろしい体験ですが、かわいい子や孫、日本中の、いや世界中の子供達に決して再びこんな悲惨な目に遭わせたくないという熱い願いをこめて、拙いながら書かせて頂きます。私の主人は岡山県の田舎の女学校の教師をやめて、広い新天地を求めて旧大連市の満州鉄道株式会社の中試験所に勤めていました。終戦の年の五月初めに現地召集で出征し、一度だけ北満で陣地構築に働いているとの葉書が来ました。多分ソ連兵の来襲に備えてのことだと思います。それ以来何の音沙汰もなく、風の便りに終戦と同時にソ連に連行されたと聞きました。毎日空腹に耐えながら密林

を開墾させられ重労働で倒れる人も多かったようです。

主人なき後の私は十才、七才、四才、一才の四人の子供を抱え、終戦後は収入の道も絶えて途方に暮れましたが、何としても四人の子供を飢え死にさせはならぬと必死でした。終戦後はB 29の空襲の恐怖がなくなった代わりに、警察もなく全く無防備の所に侵入して来たソ連兵や中国の共産兵や暴徒などの恐怖で夜も安心して眠れない日々でした。生活のために、主人や私の衣類や持物をびくびくしながら、毎日少しずつ満人街に売りに行つては食物に変えていましたが、たびたび取られたりニセ札にだまされたりで一円にもならず、心の中で泣き泣き帰ったこともありました。また十才の長男は大福餅を、私はお豆腐を売ったりして苦労の連続でした。

その当時のいやな思い出の中に今も忘れられないことがあります。長男が道端で大福餅を売って帰ってきて「今日、日本人のおじさんが中国兵に追い回されてつかまり、ひどい目に遭って連れて行かれてかわいそうだった」と話をしてくれました。それから数日後、回覧がまわり「〇日〇時に大連神社において日本人を処刑するから一戸から一人集まれ」とのことでしたが、とても恐ろしくて行けません。人の話では、神社でなく裏の山で数人の日本の憲兵が銃殺されたとのことでした。またある時は一戸から一人ずつ呼び出されて、若い中国兵に追い立てられ、自分達の満人街を掃除させられたりして、敗者のみじめさをひしひしと感じたものです。

そしてやっと二十二年の一月に佐世保に引き場けることが出来ました。私と十才の長男は重い荷物を背負い、七

才の長女は一才の三男を背負つての長い道中で今も思い出たくない難行苦行でした。それでも生まれ故郷の日本の土を踏める希望で最後の勇気をふりしぼり、子供達を励ましてやつとの思いで引き揚げましたが、私の実家には兄一家が先に引き揚げていましたので、広島県の主人の生家にひとまず落ちつくことになりました。けれど主人のいない生家には南米から帰った主人の姉、母子六人が住んでいましたので、食糧事情の悪い時に私共五人の突然の侵入者が歓迎されるわけはございません。予科練帰りの狂気じみた姉の息子に何かにつけては当たりちらされ、いじめられ、酷使される我が子を見て見ぬふりをしなければならぬ私の胸の中ははりさけそうでした。「みんな死んで帰ればよかったのに」とまで言われ、夜、子供達の寝顔を見ては一人で涙にむせぶこともたびたびでした。

心の安らぐ暇もなく、早速生活を考へなくてはなりません。大連で預けたお金を一人千円ずつ貰えましたので、当座は配給で何とか耐乏の生活ができましたが、先が案じられました。上の二人の子は学校に通わせ私は下の二人を連れて恥も外聞もなく、慣れないお百姓の手伝いや店番や物売りなどをし、ただ主人の帰りを一縷の望みに必死に働きました。けれどもその願いも空しく、その年の五月に、待っていた主人は私達の引き揚げより一年も前の二十一年一月に、ソ連のビロビヂャン収容所で栄養失調のため戦病死との公報を手に入れました。手にした時は一瞬全身の血がさあつと引くのを覚え、ただ呆然として暫くは涙も出ませんでした。主人もさぞ悔しかったことと思います。

それからもう待つ望みもなくなり、時にはやけ気味になることもございましたが、四人の子供を見ては思い直し、これからは子供の成長を楽しみにと頑張りました。また不幸に追い討ちをかけるように、通りがかりの不良少年に放火され二度も裸になりまして、三十五年の一月に大阪に勤めています長男を頼ってこの地に来て、また一からやり直して一生懸命働きました。お蔭で今では四人の子供もやつとそれぞれに家庭を持って、小さな幸せに恵まれ孫も八人もできまして、「やれやれ」とやつと肩の荷を下しました時はすっかり老いの身で役に立たなくなり、何かと皆様のお世話になっております。

中国に取り残された気の毒な方々を思うにつけ、私共みんな無事に帰れましたことは何よりの感謝でございます。ふり返りまして、私のような弱い何の取り得もない者がこの大きな苦難を無事に乗り越えることができたのは、神様のご加護はもとより多くの方々の

善意に支えられてのお蔭と心より感謝
いたしております。「なにとぞ世界中
の平和な幸せがいつまでも続きますよ
うに」と日夜祈っております。

ノーマア原爆

きのこ雲

原子爆弾投下時、広島、長崎

O・Oさん

摂津市鳥飼下

一九四五年八月六日 広島

一九四五年昭和二十年八月六日早朝、
テニアン基地を発進した先発のアメリカ軍の気象観測機一機が高度一万メートルで広島市内に接近し、後続の原爆搭載機B 29 エノラ・ゲイ号にむけ、晴天で攻撃可能の旨を打電した。

広島の中軍管区司令部は、観測機の侵入に対し、午前七時九分に警戒警報を発令した。爆撃はなく、まもなく退去したので、午前七時三十一分警報を解除した。

その頃、市内通勤者の群れが職場にむかっていた。安心していたその時、午前八時十五分に一瞬の光となった。また、広島市内は火の海と化した。

爆発点は、瞬間的に最高摂氏数百万度、数十万気圧となった。

一九四五年八月九日 長崎

一九四五年昭和二十年八月九日、長崎は暑い朝を迎えた。早朝からの空襲警報や警戒警報は、その頃の毎日の日課と化していた。市民はさほど驚くことなく、警報解除とともに一日の生活に入っていた。この日早朝、テニアン基地を飛び立ったB 29が長崎に向かった。

午前九時五十分頃、第一攻撃機が目標の小倉上空に達した。しかし、小倉上空は天気が良くないので、二度目の原爆は小倉ではなく、長崎に落とされた。午前十一時二分のことだった。その時わたしは十六歳だった。

私達被爆者は、市内で百二十名だが被爆者手帳をもっていない人は約十七名ほどいる。「もう二度と原爆はご免

だ」地球上で広島型の原爆が百万発あるとかテレビや新聞でいつているが、いまの広島型の原爆は一発でその当時の百万倍の力があるといわれており、その威力の凄さが大体わかると思う。今後は、みんな二度と戦争をしないようにと思う毎日です。わたし達被爆者の平均年齢は、もう六十五歳です。今年被爆四十周年を迎え、一日でも長生きして戦争の怖さを話していきたいと思えます。

二度と許すまじ原爆を

原爆体験の記 ひろしま

T・Aさん 79歳

摂津市正雀本町

昭和二十年八月六日、終生忘れる事のできない日である。快晴であり陽射しも厳しかった朝七時、食事を済ませる。婦人会から予告通知があったので、隣組婦人十人と一緒に一五〇メートル離れた観音川の堤防へ出かけた。

そこでは、港から流れる海水で塩を作る作業をしていた。堤防の中央には、直径七〇メートルの水槽へ男女五十人程で、バケツリレーで水を汲み入れる作業を続けていた。女はモンペ姿、男は国防色のシャツに腕章、脚にはゲートル巻の団服であった。ちよつとするうち、自分のモンペがぬれたので、簡単服一枚でつづける。暫くするうち、警報もなしに突然ドカンという大音響

と同時にピカツと光った。気がついた時には二〇メートル程飛ばされ倒れていた。起き上がり、辺りを見ると人影が無い。そのうち男子が一人近くにあった水槽に飛び込んだ。

付近を見渡すと、何がなんだかすつかり変色して、自分の生死の程も判らなかつた。主内川の向こうから、オレンジ色の真つ赤な大気が空一杯広がって押し寄せて来た。同時に風圧で震度五以上の大地のゆれが起きてきた。

「これは、たぐいのないことだ」と思い、自分も水槽へ入る気になり潜り込んだが、深いので脚が届かない。水槽の縁をつかみ、水中へ頭を入れたり出したりしていた。ふと前方を見ると、並ぶ家屋の屋根瓦が、ガラガラと音をたてながら崩れ落ちてきて、見る見る付近から火災が起き煙が立ち上がっている。時間はどの位経ったのか、やっと地震が静かになったようだ。我に

返り、水槽より這い上がって周辺を見渡すと人影がない。

今から思うとあれが原爆だったとは。

どうやら腹這いになれば家まで戻られそうなので、ガレキの上を夢中で這ってたどり着いて見れば、家は崩れ、家屋内はガレキの山。足の踏み場もない。家族の姿も見えないので、てっきり家の下敷きになり亡くなったのかと思つた。大声で探すうち少し離れた畑の中で避難していた。壁と壁の真ん中に居たので、頭に少々の怪我で済んだようだ。暫くするうち真黒い雨が降ってきた。急ぎ木蔭に入る。半ば崩れた家屋へ入ると瓦礫でどうにも手の施しようもない。ふと、自分を見て驚いた。上半身に着用したものはボロボロで黒こげの切れ端が付いていた。

夕刻になると体が次第にぞくぞくして発熱したようだ。用意の食用油を全身に塗りつける。翌朝から次第に熱が

出て、起き上がれない。二日目からは、自身夢中で判らなかつたようだ。それから、後に母から聞いたことだが、微熱でうなされ「痛い痛い」と言い続けて一睡もできなかったそうだ。市中の病院の医師は全滅し、手当てができず困っていた。家へ、九州から派遣された軍医さんがタンカを持って学校へ私達を収容するため、迎えに来たようだ。

さて、収容されて見ると、今にも亡くなる人でいっぱいである。にぎり飯は真つ黒くなる程蠅がたかり、あちこち痛い痛いとうめき全く生き地獄。この有り様では、手当てどころか死を待つばかり。雨もりがしても自宅が広いので死ぬのであればそちらの方がいいと思ひ無理に頼み、母は連れ帰ったという。

翌日から軍医が診察に来てくれた。その都度、大きな筆を持参して、化膿した体を大筆でかき集めて手当して頂

いた。相変わらず寝られず「痛い痛い」と言いつづけたので、軍医さんが気の毒がり、睡眠薬を飲ましてくれと少し眠るようになったと母が話してくれた。今からおもえば軍医さんの看病のお蔭で助かり今日あるのである。手、脚、顔、首、胸など火傷の箇所が多いので、家族は到底助からないと思つたそうだ。

私は幾日たったのか判らぬうち、気づいたときは二十日位たったようだった。流動食が通るようになったが、食糧は無い、夜は電気も水道もない。二、三日すると大雨で橋は落ちて、洪水で膝下まで水の中。そのなかを歩いて近所の井戸水で用たしした。私に使つた包帯の洗濯物はバケツ二杯もあった。相変わらず物資は全く無いので、敷布を破り包帯に使つたようだ。五週間位から床に座れるようになったので、早速、初めて自分の顔を鏡に写して

ビツクリ。唇は鼻まで届く程腫れ上がり、顔半分は薄黒く、首は左へ傾き、手脚や腕はケロイドが甚だしく、次の瞬間私は「死んだ方が良かった」と思つた。母親の必死の看病で一命は取り止めたものの、何時白血病で倒れるかも知れない。その不安は今日に至るも付きまとう。

さて、掃除、整理、食糧集めなどで一日を過ごすようになった私を見舞いに来てくれた人々も、三、四十日位の間に髪は抜け、吐血して次々と亡くなつた。広島市民は、家族一人から家族全員まで被害をこおむっている。そのような状態であつたので、中心街の惨状は見る事ができなかった。さて、床離れして以来、雑用等に追われているうち、戸、障子などが必要になつた。幸い家屋の一部に積み重ねてあつたのが間に合い、私は立ちかけることができたので雑用に追われる。私の姪は昭

和十九年からこちらにきて山中女学校へ通学していた。当八月六日学校動員で市街地の家屋引き倒しの作業に出立ったまま待てど待てど、戻って来ない。

また、私の兄は東京から広島へ商用に来て車中で被爆した様子で、二人共遺体を見る事もできなかった。姪の母親は大阪に住んでいたので、戦後何度も広島へ来て調べた結果、姪は広島で亡くなったと判明した。昭和二十年の末だった頃、市電に乗った時窓ガラスが黒くなっているのによく見ると、それが蠅であるのに驚いた。臭気がするのでマスクを使用する有り様だった。一步通路より入るとガレキの山、古自転車の山。車内には、金歯の付いた頭、ガイ骨までまじっていた。それから、月日が経ち四月の雨の降るある日主人が復員して来た。南方よりもどつたので一カ月程は放心したようだった。

さて、月日が経過するうち、私のケロイドが固まったようなので、四月に家族の反対を押し切って手術を受けた。

日赤病院の外科の先生が話すのには「被爆者の手術は貴方が初めてだ」と言われた。続いて九月の初めに、第二回目の手術を受けた。先生が話すのは「貴方は当時二種の火傷で助からないほどだったのが、水槽に一時入ったので、ここまで良くなった」といわれる。それに麻酔は充分でなかったのわずい分と痛みが激しかったと記憶している。四十年経った今日では、傷も小さくなり裸にならねば外観ではわかりにくくなっている。

しかし、白血球はまだ人並みより少なく、検診のたびに注意を受け、脊椎症のため、脚、腰が悪く、年中通して通院治療を受けている。私以外、近親者も経験は判らぬ。再び戦争なきよう平和を念じる次第である。

思いだすと被爆以来十年程は声が出ていく対話もできにくかった。耳鼻科へ通院した時、「これは咽に隙間ができていたので発音がむずかしいから良くなならない。被爆のためだということをお忘れてしまうようにしなさい」といわれた。ケロイドの手術の後は皮膚がないので、夏は汗のためかゆくなり、冬はチクチクと痛みが七、八年続き、その都度人知れず涙したものだ。

家庭の事情で母と二人で大阪の生活をはじめ、不慣れの雑貨店を営んできたが、母も三十九年に他界したので自分だけの商いを友として今日まで過ごして来た。

戦後四十年、何はともあれ反核運動に徹して頂きたいと強く念願している。

原爆に遭って

原爆被爆者

その日も暑い夏の朝だった。

八月六日の歩哨にたつため、衛兵要員として中隊の朝礼に整列する。先ほど警報が解除になり、ほっとしたのも束の間、中隊長の訓示の終わる頃、急に飛行機の爆音が聞えてきた。

どれ程の高度なのか見当もつかない。

強い太陽の光をうけて銀色にまばゆく輝いて、小さく見えた模型のような飛行機は三機の編成隊だ。「おい！見ろよB 29だ」隣の戦友に小さくささやく。ゆっくり東から西へ飛んでいく。

週番将校の訓示の半ば「中部軍情報……」とスピーカーから流れた。敵機はすでに侵入しているのに情報が遅い。そう思っている時、ピカッと光った。その色をどう説明していいのか分からないが、一瞬目に入ったものは稲

妻と火災の炎を混合したような光だった。と同時に強烈な圧力が全身にかかって、わからなくなる。意識を失った。

自分を取り戻すのにどれ位の時間を要したであろうか……。必死にもがいたような気もある。助けを求めて泣き叫んだようでもある。「胸が苦しい！」ふたたび意識を失いそうだ。「もう、駄目だ」と思った。目を開こうとするが痛くて開かない。両眼をこする。ただ真っ暗で何も見えない。うつ伏せになったままだ。

周囲を見渡すと、やがて次第に夜明け前のようにしらじらと明るくなるのがわかった。「ああ、よかった！眼は大丈夫なんだ」しかし、はつきり見えない。眼を触ってみた。臉がぶよぶよしている。左眼は潰れて、右眼が少し開いていた。起き上がろうとするが身体がきかない。何かの下敷きになっている。早くこの場から這い出さ

なければと懸命にもがく。柱や梁の下敷きになっていた。頭の傷口からの出血で顔がぬるぬるする。僅かのすき間から漸く這い出すことができた。はじめて見た光景は、先ほどの夏の太陽の光が失われていた。上空から拳大の瓦、木片、土砂、紙などありたけの物が落ちてくる。太陽の光を遮っているのだ。

先程の爆弾による爆風だと思った。朝礼の時の自分の立っていた位置と意識を失っていた位置とは全く場所が変わっていた。やはり爆風によって吹き飛ばされたのだ。一〇メートル位はあったであろう。隊の仲間が私と同じように血を流し、顔は火傷で腫れ上がり、軍服はズタズタにひきさかれた姿で泣きわめいている。自分の身体が熱い。服が、くすぶっている。あの光線で服に火が付いたのだ。服の上下共、もり上っている箇所がそうであった。上衣

は袖の上部と上肘、ズボンは膝頭の部分のポケットの箇所が、特にくすぶりが激しく、今にも一面、火に包まれそうだった。急いで服のボタンに手をかける。火傷で脹れ上がって指に力が入らない。上着だけはやっと自分で脱げた。次はズボンだ。ズボンは私の力では脱ぐことができなかった。両手共、指は曲がったまま開く機能を失っていた。仲間に巻脚絆をといてもらい、靴を脱がしてもらう。誰かが「比治山に逃げよう」と叫ぶ。十人位集まったであろうか、両膝の負傷で歩きにくい私に二人が肩を貸してくれた。

校庭（中隊は学校の一部を兵舎として使用していた）で女の人が乳飲み子を抱いて何か叫んでいる。女の人の頭の髪はチリチリで坊主に近い。頭の傷だろうか顔は血まみれだ。殆んど上半身裸だ。モンペは腰の近くまでズタズタにちぎれていた。抱かれている赤ん

坊は、まるで肉のかたまり同然。今ペンキを塗り終えたように真っ赤だ。そしてペシヤンコになった校舎の入口で母親は叫んでいる。子供の名を呼んでいるのだ。夏休みの補習授業に登校した我が子の安否を気づかってだろう。その姿は一生忘れない。今でも睨に焼きついている。

比治山へ逃がれる途中、川べりの潰れた屋根の下から「兵隊さん助けて！水を、水を」と耳にするも、どうしようもない。比治山に着いて、看護兵より黒い油を水脹れの上に塗って貰う。頭から顔面、首、両腕、両手、両膝、左大腿部、身体中が油で真っ黒だ。昼頃、小型機の機銃の攻撃をうける。四つん這いになって松の木の下に隠れる。両膝の水脹れは破れ血まみれになる。

日はとつぷり暮れた。市内は火の海だ。救援隊が待ち遠しかった。救援の軍のトラックが着いた時、われ先にと

負傷者が群らがる。一台か二台かのトラックで、宇品とのピストン輸送だ。ようやく私の番になった。トラックの荷台が高くて負傷した足では上がれない。数人の人が手を貸して下さった。宇品までの途中、蜘蛛の巣みたいに垂れ下さった電線から火が噴いて行き先を阻む。バックして他の道へ方向を変える。荷台の負傷者の血の匂い、水脹れが破れてそのリンパ液の臭い、それは異様だった。

宇品にようやく収容され、我々軍人も、民間人も所せましと横たわっていた。私は戸板にのせられていた。

「水、水、水を」と泣き叫ぶ者。看護の人から飲み水をいただいて、飲んでいくうち死んでいく者……。「庭先の水道の配水管から水が出ている」と誰かが言った。私も皆の後に腹這いになって続く。外は暗く手さぐりで階段を降りる。同じ隊の者が水を飲んだら死

ぬと前に立ちふさがる。隊の者は私が誰であるのか判るはずもない。既に顔だけでは男女の区別さえつかない形相なのである。判別のつかないことを幸いに、うわごとを言ってるみたいに変人のような態度をとった。そうしないと水を飲ましてもらえない。時間をどれ位要したのか、どれだけの水を飲んだのか自分でも忘れていたと思う。

水の美味しかったことは忘れない。広い収容所の前庭で死体を焼いている。風にあおられ火の粉も舞い、異臭がものすごい。夜中二回の空襲をうける。二回目の時は誰も手を貸してくれず担架に仰向いたまま運を天に任せた。父、母の顔、妹二人の顔が浮かぶ。扇に笑った顔が映った。安らかだった感じだ。私の開いたままの両手は指先だけで組まれ、いまも胸にあったことを覚えてる。

二冊の絵本にみる戦争と平和

O・Mさん 28歳

摂津市鳥飼中

小学生の頃、『原爆の図』を見ました。戦争ってこわいなと思いました。

十七才で、丸木俊さんの絵を見ました。少年と少女の絵です。一枚の絵を見ているというのではなく、一人の人間と対面しているようでした。

「少年、少女の目は、私の心を見ている。そして、私すら知らない私の歩むべき道をも見通している。これを見た丸木俊さんって、どんな人かな」と思いました。

二十八才の今、丸木俊さんの絵本『ひろしまのピカ』を見ました。私は原爆について何も知らないと思いました。

この絵本は、このおばさんの話（子どもの手をひき、傷ついたご主人を背

負って、逃げ惑ったひろしまのピカの時のこと）をもとにし、わたしが見たり聞いたりしたたくさんの方の原爆体験を織りあわせてつくりあげたものです、と後書きにあります。

「ピカは、ひとがおとさにや、おちてこん」と、絵本は結ばれています。

この言葉は、「どうして、この前の戦争が起きたのか」と私達に考えさせます。

ひろしまのピカを「新型爆弾」と政府がカムフラージュしているうちに、「フアーレル原爆災害調査団は東京に帰るとすぐ「原爆で死ぬべき者は死んでしまい、原子放射能で苦しんでいる者は皆無である」という公式発表を行った。

また九月十九日には、広島と長崎の被爆実態を国際社会から秘匿する目的で「日本に与える新聞遵則」を（GHQは）発している。……その

結果、新聞、ラジオをはじめ出版を含む日本の言論界は原爆の報道、論評を一切タブーとしなければならなくなったのである」（ドクター・ジュノー『武器なき勇者』大佐古一郎訳、新潮社より）という状況になりました。

「ピカが何か」も知らず、広島や長崎の幾十万もの人々が死んでいき、今なお苦しむ人々がいます。ひろしまのピカは、核戦争時代の幕を切って落しました。

今や、核戦争による人類全滅が案じられ、アメリカ原子力科学者協会は「One World or Not」世界は一体か、全滅か」と訴えます。

米ソ両国が迎撃第一攻撃を承認し、核戦争が起こり得ると発表した一九八〇年に、絵本『ひろしまのピカ』は出版され、アメリカ、スウェーデン、デンマーク、イギリス、オランダ、フラ

ンス、ドイツで、それぞれ翻訳されています。

そのことをみても、核兵器廃絶を、そして平和をいかに多くの人々が願っているのか分かります。

広島原爆の閃光を岬ごしにみた少年がいました。劇作家・児童文学者である、さねとうあきらさんです。さねとうさんは絵本『きばのあるヒツジ』

(絵・井上洋介)を書きました。

心優しかった人々も、国家総動員法等により、まるできばをつけたヒツジのように、戦争に加わっていききました。戦争しか知らない子供だった彼の体験が下敷きにあります。

とりわけ、きばのあるヒツジときばのあるカモシカの隊列が向き合う場面は印象的で、アメリカとソ連、イランとイラクのようにもみえます。

その場面を見ていると、キリストの“つるぎをもとに納めなさい。つるぎ

を取る者は、みな、つるぎで滅びます”という声が、どこからともなく聞こえてきます。

“相手の事を考える、相手の身になる”という自然が人類にプレゼントした制御装置を放棄する時、私達は全滅への道を確実に歩んでいくのです。

また、さねとうあきらさんは、

“どういう形であれ、〈弱い者いじめ〉がはじまったら、りっぱな〈戦争〉です。老人や子どもがまっさきにやられる〈公害〉や〈交通地獄〉も、勉強のできる子ばかりがのさばる〈受験戦争〉も、ぼくにとっては、にくむべき〈戦争〉なのです”(『ばんざいじつさまと私』中学生版『にんげん』所収より)と、新たなスタイルの戦争が始まっていることを書いています。彼の『ばんざいじつさま』『神かくしの八月』『戦争にでかけたおしらすさま』

も、戦争と平和を考えるうえで大切な作品です。

“歴史は繰り返す”と申しますが、昭和の初めの日本ファシズム体制、議会の形骸化、軍部独裁、軍事費増大等々の歴史を私達は持っています。

原爆投下の一九四五年、丸木さんは三十三歳、さねとうさんは十歳、『きばのあるヒツジ』に絵を付けた井上洋介さんは十三歳でした。

そして今、『ひろしまのピカ』『きばのあるヒツジ』を彼等は世に送り出しました。

私は、独身の頃は、「自分の好きなことをしたい。どうにかなるさ」と思っていました。しかし子供に恵まれてからは、生命のすばらしさ、生きていることの尊さを感じます。この二冊の絵本を通して「子供達のためにも、より暮らしやすい社会であって欲しい。また、人間って粘土の塊みたいだな。

軍人にもなるし、リベラルな人間にもなれる。その作り手は、きつと人的環境を含めたまわりの環境です。そうだ、それは教育だな。それによって、人間は感性や価値観を左右されるから。私もいろんな人の声に耳を傾け、話し合い、成人として何をなすべきか、考え行動していきたい。そういう自覚を、一人ひとりが持てば、より暮らしやすい社会が実現する」と思いました。

さて、『ひろしまのピカ』『きばのあるヒツジ』を貴方は、どのようにご覧になるでしょうか。

被爆直後の思い出

S・Hさん 56歳

摂津市千里丘東

「熱いよーいたいよー」と泣き叫ぶ女性の声で家の前に出て見ると、体の左半分の服が焼け、腰のあたりがくすぶっているのを見つけ、夢中でもみ消してあげました。よく見ると左肩から腕にかけて黒ずんだ皮がたれさがり、はだが赤黒く焼けただれていました。近所の人ではありませんでしたので、早く家に帰り、手当をするようにと別れました。

二時間ぐらい過ぎた頃、妹の学徒動員先の広島西電話局の方面も被害が出ているとの噂を聞き、安否を気づかって紙屋町（広島を中心街で爆心地より約二〇〇メートル東）の方面に行くべく、的場町（広島駅より約三〇〇メートル南）まで来たところ、電車道の両

側の家が燃えて熱くて通ることができませんので、迂回のためえんこう橋（広島駅より南西二〇〇メートル）まで行きました。

橋には数多くの人達が集まっており、倒れたままの人、泣き叫ぶ人、どの顔もまっ黒です。両側の水辺には頭を水の中に入れたままの状態の人達がいっぱい。多分死んでいるのでしょうか。その数は五、六十人はいたでしょうか。原爆の熱線を受け熱かったのでしょうか。橋ぎわの軒下の防火用水にも七、八人の人が頭を用水の中に入れたままです。

子供が親をもとめて大声で泣き叫び、大人の人も何かを大声で叫びながら右往左往しています。その中には頭髮が焼けちぢれた人、頭や体から血を流しながら大声を出して走っている人がいました。服や下着等がほとんど焼けて全裸にちかい人がうずくまりながら何かを叫んでいます。また道端に倒れた

母親らしき人の背に、赤ちゃんがまわりついています。悲惨と言うか生き地獄と言うか!!「水、水」と言いながら、焼けただれた手を出す人、「たすけて」と手を出す人。しかし私も妹をもとめて、一刻も早くと思い、熱風の中を必死でしたので、どうする事もできませんでした。

でもほとんどの両側の家が燃えていて通行することができず、断念せざるを得ませんでした。さいわい私の家の地区は火災の発生がなく、どの家も屋根がわらが一部飛び、窓には戸がなく、家がかたむいた状態で残っていました。町内の人々が、また空襲があるといっていたので、一キロ南の畑やぶどう園がある指定避難地に、十二時頃父母と一緒に移りました。当時私は十六歳でした。

町内の避難先に、次々と身内や知人をもとめて火をくぐり、火に迫われた

人々がつかれきった姿であられ始めました。

母親を故郷に送りとどけるよう父親に指示され、汽車が動いている安芸中野駅に向け、約一〇キロの道を母親と共に歩き、国道二号線の大洲に出ました。その間、死んだ人達をのせた荷車や大八車を見ました。かぞえきれないほどの人達が身一つで傷ついた姿のまま、広島からのがれるように、長い行列をつくり、東に東にと力なく歩いていました。

T・Kさん 41歳

摂津市正雀

戦争と平和

背中合わせじゃ

平和の鳥も泣きだしそう

心とコブシをにぎりあい

世界中みんな心を一にして

心の安らぎ見つけよう

戦争が平和に変わる日はいつか

しあわせ築け日本の

二十一世紀に

平和

T・Sさん 当時12歳

摂津市正雀

戦争の経験は、ぼくの父も母もありません。でも九州のおばあちゃんはあると聞きました。ぼく達はテレビで見たり、父や母が読んでいる新聞の説明を聞いたり、学校で勉強して、そのため広島市へ原爆展や原爆ドームを見物に行きました。「なぜ」戦争が始まるのか、なぜ争うのか、ぼく達には分かりません。父になぜ戦争のあったことを見せるのかとたずねたら「二度と戦争が起きないように、悲さんな、気持ちの悪い所を目でたしかめてもらうためだ」と言いました。

平和な未来はぼくたちで作らなければならぬから、広島で学んだ事を忘れないで「二十一世紀を背おって行くようにということ」

よく考えてみると、学校の友達の中でもよく争いがあります。よく一人ひとりが話し合えば争いはないのに。強い人が弱い人をいじめる事も、弱い人が四、五人でいじめられるのも、戦争の始まりだとぼくは思います。

平和とは一人ひとりの努力と協力で国や町を「作る」ことだと分かりました。ただなぜ人と人が殺し合ったり、にくみ合ったり、なぐったりするのか分かりません。平和の意味をどんな見方してるんだろうと不思議に思っています。争いは言葉の一言でおきることを父の話で知りました。お母さんは口ぐせで「上に立つ人がシツカリしていれば、戦争も争い事ありません」とよく言います。たとえば「家は大黒柱ひとつでたおれたり、しゃんとしたりする。子供にとつては大黒柱は心と根性だ」と言います。世界の人達みんなの根性がくさっていなければ戦争は

起こりません。平和の国を作る心と話し合いの精神と努力があると戦争は起こらないと思います。学校内暴力も同じことだと思います。国と国との争いも友だち同志のけんかも小さいうちになくせば平和が続くと思います。

核と雑炊

M・Sさん 63歳

摂津市東正雀

台風接近の前兆である黒い雲が、広島
島の街に低くのしかかって流れていた。
原爆慰霊碑の前に、私が額突いたその
日は、一九七五年の残暑の夕刻であっ
た。

戦うことのむなしさは、旧軍隊で体
験済みだが、あの惨禍をもたらした原
爆については、長年、マスコミを通じ
て見たり聴いたりする程度のものであ
った。自己意識として確固としたもの
を持ち合わせていなかったと言うのが
本音である。〈百聞は一見にしかず〉
とか。

原爆資料館を見学するべく、ひとり
で山陽新幹線の車中の人となった。
館内の展示の品々を、見学する人び
とは、私を含めて余りのショックに、

言葉を交すこともなく、一様に押し
黙って見入っている。悲惨な実態をつ
ぶさに見終えて出口に向かった。備え
付けの記帳簿には、「戦争の意味を風
化させないで、国民みんなが考えてゆ
こう」と書いた記憶がある。

非核三原則とか、専守防衛とか、お
題目はよろしく唱えているが「日米安
保案約」は、もはや平和条約の名を冠
することができないほど後退したもの
であり、国民はなし崩しに慣らされて
きた。戦争遂行者の言いなりにならざ
るを得ず、残忍な殺人者と化した過去
の苦い切ない思いを、私たち戦争体験
者は、次の世代に遺産として残さねば
なるまい。

現在、核戦争偶発の危険性を、否定
しきれない状況にあることは自明であ
る。核を保有する国々は、核兵器の研
究開発に、核ミサイルを宇宙で撃ち落
とそうというアメリカの戦略防衛構想

(SDI)などに、気も遠くなるよ
うな巨費を浪費していることだろうが、
この支出が人類の和解のために使われ
る時は永久にあり得ないのか。近い将
来、アメリカやソ連の原水爆基地が無
用の長物となり、観光地となることを
思うのは、それこそ、夏の夜の夢か。

私が住む摂津市も一九八三年三月に
「護憲平和都市」を宣言した。二年目
の昨年は八月十五日の敗戦記念日に、
戦時下の耐乏食生活を若者たちにも追
体験してもらおうと、雑炊、おかゆな
どの試食の場を設けた。老若男女、多
数出席したと報じてあった。飽食時代
の昨今、喜ばしいことである。

わが家の八月十五日は、もう十年来、
このような食事を三食囲むことにして
いる。現在小学生の三人の孫たちにも、
当日は間食を一切与えずに、梅干ひと
つと、一杯の雑炊で過ごさせている。
著を動かそうともしない孫たちを見て

いると、いろいろのことが思い浮かぶ。

平和の有り難さ、戦中、敗戦直後の混乱を生きてきた歲月のひとこま、ひとこまが……。その慣習も最近崩れようとしている。一昨年あたりから孫たちの悪知恵が働くのか、親が物判りがよいのか、心配りなのか、時期が丁度、盆の休みに入るので、親子して前日あたりからびわ湖方面へ逃げ出す。あとは祖父母が懐旧の情をもないまぜにして、ひと日の食事となる。

この地球上にあくまで人があり、いのちがあつてこそその科学の進歩である。平凡な心優しい男たちをして、人間を殺傷せしめることが、慣れとなつて通用する事態が起らないよう、孫たちがもうすこし成長した時点で、じつくりと対話してみるつもりでいる。

戦禍悲傷

粥^{かゆ}すすり梅干ひとつ口にして

三度^{みたび}食べた敗戦記念日

間食を与へずひと日粥ばかり

孫に食わせば箸の動かず

爆死せし友のみ霊に供養すと

数珠しのばせて妻の旅立つ

終^{つひ}の忌に友の精霊を鎮めきて

胸のつかへも消えぬと妻の言う

それぞれの思ひに黙^{もだ}して見つめをり

語りつぐべき原爆の図を

(丸木夫婦原爆の図展にて)

天皇を信じて生きし二十余年

南の島より兵還りきぬ

天皇にグアムの最後を伝へむと

うつろなる目をあげて兵言う

皎皎^{こうこう}たる如月の月背に浴びて

営門出でし兵還らず

隊伍組み白布巻きたる銃を持ち

征きたる兵ら土佐沖に沈む

馬糞積む厩舎にかくれ意地悪き

下士官の眼にをののきし日々

馬を牽き海に落ちゆく赤き陽を

ながめたりしは死を怖れし日

鞍上につけし擬装のもちつつじを

愛^{いと}しと見しは遠き兵の日

営倉の鉄の格子にしがみつ

叫びゐたりし兵忘れず

四十路^{よそ}経^じし今も忘れがたし
おのがいのちの軽きに泣きし日

一瞬にして地獄絵

―長崎の女学校時代―

Y・Aさん 54歳

摂津市南別府町

戦後四十年になりますが、私にとっては、原爆の怖さは今だになまなましく思い出されます。私達は出雲町に住んでいましたが、父が兵隊に行き空襲がひどくなったので、母の里である五島に疎開しており、私だけが下宿して長崎の女学校に通っていました。その頃は学校に行って授業を受けるより学徒動員でかり出され、私は市役所の人員疎開のお手伝いをしていました。その日はお昼のお茶の準備中に空襲警報がなり、防空壕に避難の命が出ました。

漸くして、警戒警報の知らせで室に帰って間もなくのことでした。ピカーとして窓ガラスがオレンジ色になった

ので、照明弾が側に落ちたのかと一瞬思い外へ飛び出たとたん、窓ガラスが割れ、壁が落ちて回りがこわれて何が何だかわからなくなり、気がついて知らない男の人の膝に顔をふせていました。驚いて顔を上げると男の人に血がべっとりついていたので、男の人が大怪我をしていると思ったら怪我をしたのは私で、ほおから鼻の下にかけてガラスで切り、鼻の下には破片が入り込んでいました。

それから何処をどうして行ったのか、気がついたら寺町の墓場に立っていました。そこにも避難して来た人達が沢山いました。私の側にいたおばさんの赤ちゃんがひどく泣くのでのぞいて見ると、赤ちゃんの右耳が切れてないのです。驚いておばさんに知らせると、何も知らなかったらしく、いそいで子供をおろし、泣きだしてしまいました。私もオロオロするばかりでつれ

だって病院をさがしたのですが、町は崩壊して誰もいません。やっとの思いで日赤病院に行ったのに、病院には大怪我をした人、洋服が焼けて皮膚が腰にぶら下った人、全身火傷をした人達がタンカで次々運ばれて来るのです。私などは怪我の中にはいらないと叱られ、おばさんと別れ下宿に帰りました。下宿の人は帰りが遅いので心配して待っていて下さいました。

その夜、一緒に下宿しているお友達が帰って来ないので、翌日怪我をしている人達を収容している新興繕小学校にさがしに行きました。

学校には何百人もの動けない重傷の人達が床の上に寝かされ、足の踏み入れるすきもないほどでした。そこには目も見えないのに家族をさがして名前を呼んでいる人、口もきけずに目で何か言いたさそうに苦しんでいる人、水を欲しがっている人、次々に目の前で

死んで行く人達。一人でも助けてやりたいと思つてもどうすることもできず、ただ見ているだけです。可哀相で涙がこぼれてくるのです。

お友達もさがすことができませんでした。元気でいてくれることを祈っております。

夜になり、県庁の窓から火が吹き出して来ました。下宿もあぶないから避難しようということになり、とっておきのお米を食べさせて下さいました。ギンシャリのおにぎりで、何もおかずはありませんが最高のごちそうです。今では考えられないことです。大事な物は防空壕に入れ、知人を頼って戸石まで夜道を歩くのです。日見トンネルは軍需工場になっており通れなかったのですが、避難する人達のため半分が開放されており、山道を通らずにすみほつとしました。トンネルを出ると道の両側には、疲れ果てた人達がごろご

ろ寝ているのです。私達も三時間ほども歩いたでしょうか、やつとの思いでたどりつきましたが、その家には不発弾が落ちており、近くの牛小屋に寝かされました。

むしろを敷いた小屋は暑くて、そのうえ蚊が多く臭いはするし、時折牛が角で戸をたたくのです。私たちは我慢できず、家族の人が住んでいるお縁に腰かけ一夜を過ごし、早々に下宿に帰りました。下宿は無事でほつとしました。私も五島に連絡が取れず毎日波止場に行くのですが、なかなか帰る船は見つかりません。そんな折五島から一緒に来ていた下級生に会い、下宿していた親類の叔母さんが、浜口町で死んでいるのを見つけたけど、一人でどうしようもなく困っていることを聞き、二人で火葬に行きました。

駅より先の変り様には本当に驚きました。建物は全焼して見渡す限り焼野

原です。そこは私の想像もしなかった、まるで地獄絵でも見ているのじやないかと錯覚を感じる光景でした。焼跡には黒こげの死体や傷ついて見るも無残な死体が、所狭しところがっていました。私達も建物の燃え残りを集めて死体の上にのせ火葬しました。焼けるのを待っている間も敵機が飛んで来るので、近くの防空壕に駆け込むと、中にも入れないほど重なり合った死体の山です。不思議と悲しいとか、恐ろしいとか思わなかったのは、どうしてだったろうかと今つくづく思い返されます。

これを書き出してから毎日のように当時の夢を見てうなされ、今さらながら原爆のすごさを思い出しております。このようなことが二度とおきないよう祈っております。

長崎での戦争体験記

○・Hさん 61歳

摂津市鳥飼新町

その頃、私は長崎県のある小さな島に住んでいた。忘れもしない八月の暑い日のことであった。その日は朝早くから、ひっきりなしに爆音がして私達には不安におびえ、仕事も手につかずにおろろするばかりであった。

日本の最西端の小さな島では、飛行機などめったに見ることもなかった。ところが、操縦士の顔さえはつきりみえる位の低空飛行で旋回する異状さにも気がついた時には既におそかった。間もなくあちらこちらで激しい機関銃の音。人々の悲鳴の中で私は何度も転びながらろうじて防空壕に走った。先に壕に入っていた人々はどの顔も蒼白で、わなわなふるえて、すさまじさを語るにも言葉にならなかった。不安

と恐怖の中で時がすぎ、やがて爆音が遠のいたので防空壕を出た。みれば私達のうろたえ、おののく姿をあざ笑うかのように航空母艦が、遙か水平線の彼方に銀色の船体を夕日に照らしながら悠々と北上している。届くものなら浜辺のありったけの石ころを投げつけてやりたかった。それが無駄なことだとわかっていても、今までの苦しみを考えると胸の憤りをどうすることもできなかった。

「長崎がやられたとバイ。殆んど全滅に近かとげな。恐ろしか……」と言う噂の中で今まで聞いたこともない「原爆」と言う恐ろしい言葉を耳にした。巨大なきのこ雲が消えた後には、大勢の死者がゴロゴロして、まるで地獄をみるようだったと言われている。当時、私と二つ違いの弟も、徴用工として浦上の軍需工場で働いていたが、

一瞬のうちに十九才の青春を灰と化してしまった。

次々と送られてくる情報は暗いニュースばかり。一体どうなることやら。生きた心地もしない一週間がすぎた頃、やつと終戦となった。戦争に負けた!! そんな馬鹿な。信じられない。敗戦だなんて」と誰もがそう思い、敗戦を信じようとしなかった。けれども「……耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」と玉音放送があり、敗戦は確実なものとなった。これまで日本は戦争に負けたことがなかった。いざという時は神風が吹いて必ず守護してくれると信じていたから、どれほど悔しく情けなく思ったことか。敗戦国のみじめさ、いつ彼等が上陸してどのようなことをするかも知れないと言うことで、私達は終戦となっても片時も竹槍を離さなかった。

無気味なほど静かな日が続いたが、間もなくあちらこちらで漂流物が発見された。勿論日本の品物ではない。中には小麦粉、砂糖、缶詰等、当時の私共にとっては貴重な品ばかりだった。粗食に馴れていた者にとっては、どれほどうれしかったことか。噂は次々と広がり、わざわざ小舟を出して沖合まで探しに行く人もいた。そんな矢先、近くの島に黒い物体が流れ着いた。戸数二十戸足らずの集落で、若者の殆んどが兵隊にとられ、島には老人、女、子供が住んでいた。人々は食糧に期待をよせて総出で引上げにかかった。海中から砂浜にあげたとたん突然“ドカン”とものすごい爆発。皆遠くの方まで手足も引きちぎられて飛ばされた。

夜毎々々“ヨイヤコリヤ、ドカン”と物音がして眠ることが出来ず、遂に島を捨てて逃げ出した。狐狸のしわざか、それとも死者の霊か、さぞ、無念で浮かばれなかったことだろう。無人島となったその島は、夜になると怪しい光が浮遊して漁船を悩ましたということだ。このように飢える者の悲劇は戦争が終わった後でも続いた。

私達は常に“欲しがりません勝つまでは”の合言葉を胸に刻んで、じつと辛抱してきた。戦場でも多くの人達が戦死し、また銃後でも、原爆、空襲によつて殺され、これ以上は耐えられず忍びがたかったことだろう。

あれからもう四十年がすぎた。悪夢のようなあの日を思い出すたびにぞつとする。戦争を知らない子や孫達に、私達が経験した過去の苦しみを決して味わさせてはならない。戦争のない平和ということがどんなにすばらしいこ

とか、今の幸せをつくづくとかみしめている。

被爆する

○・Hさん 70歳

摂津市南別府町

赤穂師団司令部に帰隊。残務整理を手
伝い八月二十五日召集解除。

私は岡山県の出身者です。昭和二十年三月、三度目の召集。岡山部隊に入隊す。五月一日付で暗号教育下士官として広島一二一部隊に派遣され、通信及暗号教育を一カ月受ける。岡山部隊に帰隊。七月一日付で広島北白島の新設赤穂師団司令部に暗号係として転属す。

八月六日、原爆投下。被爆。二階建木造兵舎の下敷となり、上半身ガラス破片多数を受ける。東練兵場付近の山を三カ所登り戸坂村^{ひさか}という部落に避難。民家に五日間世話になる（五名）。その後、夜行の汽車にて島根県石見太田町の小学校に収容せられる。八月十五日、小学校にて終戦を迎える。一応、広島

戦争と原子爆弾が

私の一生を狂わせた

〇・Tさん 76歳

摂津市正雀

私は明治四十二年三月生まれの七十才です。農家の次男に生まれ、二十才の適齢検査甲種合格。昭和三年二月現役で広島陸軍病院に衛生兵で入隊し、勤務。四年四月除隊し、その後家事の手伝いをし、六年に結婚。当時は広島市のライジングヤン石油会社に務めておりました。昭和十二年支那事変が始まり、十三年二月長男が熱病で病名不明のまま入院し、同年七月に死亡。七忌日の法要をすませ、夫婦とも泣きの涙が乾かぬまま一週間目に召集令状を受け取り、十三日には宇品港を後にしました。妻や子供を不安に思いつつ上海に上陸。

九月に南京に着き、中支戦線の患者を内地や上海病院に運ぶ輸送班で勤務。十一月に漢江戦線の患者を江上輸送するうち病気になり、上海病院に入院して、その後内地の病院に送還されました。十四年三月、一時帰休のため退院。命令が出て帰宅した次第です。帰ってみると戦争は、ますます激しくなり、妻は病気で休み、診察の結果肺結核とのことで、いろいろ養生するうち十六年二月死亡しました。子供二人をつれて途方に暮れているうち、十七年七月大東亜戦争でまた召集令状を受けました。妻が病気の時、家政婦で来て頂いた女の人に後を頼み、子供のことを願い、南方方面に向け宇品港を出船する前日、私共二十名は過余員として内地の一戦患者の看護並びに輸送する勤務を命ぜられました。頑張つて働いているうち病気のため一時帰休命

令で帰宅、会社に勤めるうち昭和二十年再婚。

八月六日八時十五分、爆心から一・五キロ地点で一生忘れることのできない原子爆弾に遭いました。家は焼かれ、みんな傷を負い、命からがら私共は被災地の農家で一時休養しました。原爆で、電気もなし医者もなし、食糧もなし。家は焼かれ、衣類もなし。文面で話すこともできない有様でした。二日後、私の会社の事務所が爆心地の大手町にあるので、一応見に行くべく出て行きました。現在の原爆公園まで来てみると、人間の死体や馬の死体ごろがり、電車は横転し、川には死体が浮き、まるで魚場のイリコ干に似たような情景でした。とり急ぎ被災地に帰り話をすると、これは原子爆弾と聞き、もはや私は死ぬことはできないと思うと、子供と妻のことが心配でした。いろいろ養生しているうち私のふる里

に大風雨があり、道路、鉄道線は全部不通となり、連絡も取れず二十里の道を歩いて米を頂きに行きました。米を一斗頂いて帰る途中、警察の取り締りに合い、いろいろ事情を話して一応帰りましたが、妻や子供のことを思い一生懸命でした。

この世の生地獄と言うのは当時の状態のことだ、と今思うと身の毛が立ちます。他人の家で六カ月もお世話になった後、広島市宇品に行き、元の人絹工場の社宅の六畳の間を借り、六人で一応暮すことになった次第です。工場もなし、働く所もないので広島を出て鳥取県の妻の里を頼りました。行くと見ると、戦争の傷はどこでも同じで生活は苦しく、子供や妻に大変な苦勞をさせました。なれない仕事で冬には山に木出しに行き、魚の行商もし、大変な苦勞でした。

昭和三十七年大阪に家族一同出て来て、私は町工場の倉庫の管理職を務め、六十才の定年で退職し、子供らも結婚し家庭を持ち頑張っています。もはや七十六才では職もなく、細々とした生活を送る今日です。妻は一昨年乳ガンで大手術を受け、未だに通院し、私も大腸ガンで時々通院と言う有様ですが、これも被爆の結果ではないかと毎日不安な日を送っています。

政府も原爆被爆者援護法を一時も早く制定し、国家補償を実現して頂くのを願っています。また国民の皆様方も、被爆者の心情を御理解頂き、応援して頂くことを切にお願いいたします。今こそ米ソの核戦略に巻き込まれないよう、核を廃絶し、二度と私たちのような被爆者を出さないよう、世界平和のため援護法制定を特にお願いする次第です。

幸にして死だけは免れましたが、被爆二日後の状態は、横川町から十日市町に通ずる電車で、郡部から来た消防隊の方々が死体を運び、負傷者の手当て等をしているのを見ました。道路はアスファルトで、夏の暑い中、焼けた熱で歩くこともできないのでした。道にワラコモを敷き、まだ命のある人を何千とならべ、食事もできず、身は鳥の皮をむいたのと同じような負傷者がならべられておりました。親をよび、子供は母をよび、兄弟をよび、焼けただれた身を焼けた道路で苦しんでいる状態を見ました。この世の生地獄とはこのことでしょう。どこの国が原子爆弾を落としたのでしょうか。また落とされるようなことを始めたのはどこの国でしょうか。政府並びに国民も現在、今一度真剣に考える時ではないでしょうか。いくら書いても尽きません。目

がくらみ心臓がとまるようですので、
終わります。

私自身が感じた平和について

N・Tさん 13歳

摂津市鳥飼西

私は、これまで平和についていろいろな本を読んだり、先生たちの話を聞きました。その中で一番気のついた原子爆弾のことを中心に書きます。

私は、六年生の時、広島に修学旅行に行きました。その前にいろいろな勉強をしました。今、考えてみれば「まだまだ勉強不足だったな」と思います。今の私でもまだ少ししか勉強していないのに、あの時広島に行ったのがもったいないような気がします。広島に行った時、資料館で写真や実物を見て私は「二度とこんなことをくり返してはいけない」と思いました。修学旅行が広島に決まった時、みんないやがっていたみたいでした。私もそうでした。けれど今は、勉強になったと思

うし、この作文を書くきっかけになったと思います。

広島のある同和地区の人たちの話を私はある本を読んで初めて知りました。被爆前にも強く差別され、被爆後もこの住民だったという理由でその所から出られずに、残留放射能の影響で多くの人々が死んでいきました。彼らは最後まで平等を求めていたと思います。朝鮮や韓国の人々も同様です。日本に植民地にされ、働きざかりの男の人を強制連行されたり、豊かな資源をうばわれたり……。本当に日本は勝手なことをしました。朝鮮や韓国の人々も、二重、三重の苦しみを味わったことでしょう。人々から差別され、ろくな手当てを受けられずに死んでいった人々……。私達はこの事実を知ったからには、この人たちの死をむだにしたいけないと思うし、絶対に忘れてはいけないと思います。

はじめに書いたように「今の私でも少ししか勉強していないのに……」と今になって思うのですが、小学校で戦争に関して勉強することが少ないような気がします。おまけに教えてもらっても、それについて真剣に考えない子が多いと思います。先生から聞いたのですが、教科書から戦争のことを書いた記事や写真が少なくなっているそうです。歴史の教科書なども、広島の前爆ドームの写真がのっているだけで、戦争に関する記事がほとんどないといってもよいような気がします。もし小学校で広島の前爆ドームに行かなかったら「戦争というのは原爆がおちただけだったんだな」としか印象に残らなかったと思います。平和学習を八月六日にだけするのではなく、もっとこんな機会を増やしてほしいです。先生たちは私達に教科書にはのっていない本当の日本を教えてほしいと思います。

今まで日本がしてきた悪いことを二度とくり返さないためにも……。

今、日本は原子力という核の力にたよって原子力発電をしています。日本の電力のうち、原子力が三分の一をしめているそうで、その発電に必要なウランが比較的安く外国から手に入るため、原子力発電が多くなっているようです。けれど、はたして原子力発電というのは安全なのでしょうか。

以前、アメリカのスリーマイル島で原子力発電の事故が発生したことがありました。放射能が外部に漏れ、住民が一時避難する騒ぎになったとか。

日本でも、いつそういうことが起こらないともかぎりません。大事故が起これば広島、長崎におとされた原爆と同じくらい広い範囲に被害がおよぶかもしれません。本当に国は安全を保障してくれるのでしょうか。

今後、米ソの対立がはげしくなれば、いつ核戦争になるかわかりません。そのためにも『被爆国日本』が中心になって核戦争反対を世界の人々に訴えなければいけません。学校は国のしていることについて良いことは良い、悪いことは悪いとはつきりと教えてほしい。そして私と同じぐらいの年の人も、このことをもつと真剣に考えてほしいと思います。

今と違いすぎる私の子供の頃

M・Kさん 47歳

摂津市新在家

もう三年前になります。子供がクラスでの親子文集のプランを持って帰ってきた夜、私が一番先に思ったことは、偶然にも自分の小学校二年生の時が終戦の年であったということ、そして年齢差の多い親子であるとはいえ同じ小学校二年生の八才の一年間の生活体験や思いが、私と娘でこれほどまでに違うものかということでした。それはどうしてだろうか？やっぱり平和な時代と人間同志が傷つけ合う社会情勢の時代との違いだろうか、自問自答を続けながら子供へのメッセージとしての文章を一気に書きました。

『昨年の夏休み、Aと広島の実爆記念館へ見学に行きましたね。その時

お母さんが話してあげた様々な話、覚えていますか？今、あなたが二年生の思い出を書いている傍で、お父さんとお母さん達もその頃のことを話し合っています。夏休みになると遊びに行く「広島」は母さんの故郷ですよ。あの原爆が広島に落され、多くの人達が死んだときかされたのは、お母さんが丁度今のAと同じ二年生の時でした。お母さんは当時、呉市の対岸の倉橋島にいました。そしてほんとにお母さんは、原爆記念館のパネルで見たあのキノコ雲を、距離は離れていたけれど山の上から大勢の大人達と一緒に見たことを、今もはっきり覚えています。

それからまもなく日本は戦争に負け、八月十五日「戦争は終わった」とのニュースで、周りの大人達のざわめきや悲しみの気配を不安に感じたのも、二年生の夏休みだったのです。亜紀の過ごした二年生とどう違いま

すか？もう少し大きくなったら考えられると思うけど、原爆や戦争という日本の歴史が変わった大きな出来事が、あの幼ない二年生の時の体験だったかと思うと胸が痛くなる程悲しいことなのです。幸せなことに今の亜紀は、先生に恵まれ、良い友達と良い環境の中で、少なくともお母さん達のような思いはしないで済みます。

だからいろいろなことを一生懸命やって、楽しい思い出がいっぱい残るような生活をして下さい。楽しい二年生が過ごせましたね』と。

ペンを走らせながら私は、八才の時の戦争体験のあれこれを思い出し、胸のつまる思いに涙が出ました。一方で娘の文章は、春、秋の遠足の思い出、運動会の楽しかったダンスの話、耐寒訓練の感想と、ほんとうに子供らしい瞳を輝かせての楽しい思い出話です。少なくとも私が今も鮮烈な思いと

なつて残つてゐるあの戦時体験のよう
なきびしい印象を子供は持ち合わせて
いませんし、今は持ち得ることもない
のです。ほんとうに平和なこの時代を
過ごせる幸せをかみしめています。

しかし今、周りを見まわした時、世
界の情勢は必ずしも安定したものでは
ありません。将来、平和憲法をうたう
我が国の中でも永久平和の保障は、素
直に信じられなくなつてゐる世情の今
の時代です。あの幼ない体験を悲しみ
と今なお強く胸に思う我々の多くは、
平和の意味も一番にわかつてゐるはず
です。あの文集作りの中で、平和を守
りぬく強い信念が人間としての最も基
本的な姿勢であると強く強く感じまし
たことを、今また改めて痛感していま
す。

戦争中の想い出

H・Tさん 70歳

摂津市庄屋

はじめに

昭和十年一月現役兵として、第五師団広島歩兵第十一聯隊第二中隊に入隊しました。当時、平素の教育訓練中「祖国への献身と義務の遂行」は、敵味方を超え人間として讃えるべき普遍の美德であることを、厳しく教育されていました。

北支の第一線に派遣され戦傷を受ける

昭和十二年七月、日支事変が勃発するや、同月二十七日動員下令。長野部隊杉本中隊の一分隊長（伍長）として、八月一日宇品港を出帆し、北支の第一線に派遣されたのであります。八

月の炎天下、寝食共に事欠く中で戦友と励ましあい、気力をもつて、①料子台付近の戦闘②馬砲川付近の戦闘③鎮辺城付近の戦闘④榆林堡付近の戦闘など昼夜を問わず行軍また行軍に参加したのであります。

九月に入り約一週間休戦し、食糧・弾薬の補給と休養をしましたが、⑤引き続き山西省宛平県東西加斗閣山一、六〇〇メートル高地占領のための戦闘に参加しました。これまでの戦闘とは異なり、なかなか前進することができません。高所の陣地から、迫撃砲、機関銃、小銃などの火器をもつての抵抗が激しく、もっぱら夜間を利用して前進しました。かなりの日数を経て漸く九月十三日夜半までに約三〇〇メートルの地点に達しましたが、さらに距離を縮め、翌十四日中隊長以下全員で午前四時を期し、無言の薄明突撃を敢行したのであります。

敵陣からの最後の手段として投ずる数多くの手榴弾破片により、私は陣地を目前において顔面、左上膊、下腿に重傷を受けたのであります。その結果、左眼を失明したのであります。負傷時は、檜棒で全身を力一杯殴られたような感覚で、同時に失神してしまいました。何時かして戦友の大きな声で、ハッと気づきましたが、両盲目と痛みのため戦況その他一切が判明できず残念そのものでした。

頭上では迫撃砲の音が、シュル、シュルと飛び交い、爆発音と共に騒然そのもので、身動きもできず遂に夜の十時頃までそのままでした。ようやく担架隊に収容され下山し、仮包帯所へ翌十五日到着したのであります。

野戦・内地の病院に転送

その後、第二・三野戦病院に転送され、更に一週間後、北京の第二兵站病院に後送され九月二十八日左眼摘出手術を受けたのであります。受傷から二週間を経過し、視神経のため毛髪一本に障つても痛み、横になつて眠ることもできず座つたままでしたが、手術後は急に痛みが消え、右眼も次第に開くことができました。同じように後送された小隊長、戦友とも連絡が漸くとれ、杉本中隊長以下の戦死と負傷者の状況が次第に判明したのであります。

動員下令時、中隊の編成が隊長以下一五五名でしたが①④の戦闘で戦死・病者約三〇名の減員があり、⑤の戦闘では残り一二〇数名が参加、突入占拠したのであります。戦死者三〇数名、戦傷者約七〇名と大半が倒れ、一人の分隊長以下約二〇名が何とか無傷で残つたのであります。この戦闘が如何に激戦であつたかを物語っています。

私はその後内地送還の命により、同年十月十一日大阪港に上陸し、大阪・広島・京都・東京の各陸軍病院を経て、ハカ月間にわたる入院生活を送り、昭和十三年五月末日予備役まで免除、除隊となつたのであります（当23才）。

除隊後軍属として勤務

戦争のためとはいえ不自由な体となつた訳ですから、今後は如何にすべきか悩みましたが、上司からの強いすすめもあつて軍属になることを決意し、六月十三日付広島の陸軍兵器廠に雇傭されました。その後、次第に戦争は拡大し、遂に昭和十六年大東亜戦争へと発展したのであります。銃後にある男性は次ぎから次ぎへと軍隊に召集される他、中老の男性を始め婦人会、旧制高・中学校、女学校の学生・生徒に至るまでも、飛行場の整備・軍需作業庁の業

務援助、市街地の建物疎開など、戦争遂行のため徴用されました。

私の勤める兵器廠でも、毎日交替で数百人が勤労奉仕隊として終戦まで駆り出され、奉仕させられていました。また兵器の補給業務においては外地は軍人が当たり、内地は主として軍属が命令され、私も東京・大阪・熊本などで兵器輸送の任についたことがありますが、途中で空襲に遭遇し、辛うじてその任務を終了したこともありました。昭和二十年二月から神戸・東京を始め各都市の空襲が頻繁となりましたので、妻子を市外地に疎開させ、単身で市内にとどまり、義父母宅から通勤しましたが、戦況は愈々内地決戦の様相を帯びてまいりました。

臨時召集と原子爆弾の被爆

五月十四日中部第二三九部隊に応召。翌日その内二ヶ中隊が兵器廠に配属さ

れました。幸い広島市の空襲はありませんでしたが、呉市を始めその他の地域の空襲のため、B 29の飛行編隊は宮島上空を連日のように通過し、その都度警戒・空襲の警報があり、廠内編成の防護隊本部の任務にいたっていました。

原爆投下の前日、八月五日の夜も空襲警報下にありましたが、八月六日午前四時頃には解除されましたので、朝食準備を開始し、七時三十分頃から交替食事ということで、私も八時過ぎ集会所二階において食事を始めました。八時十五分頃「ピカッ」と異様な光があつた瞬間「ドツドツ、ドン」と大音響を発し、窓硝子が飛び散るほか、階段付近の土壁が落下、食卓・椅子が転倒するなど、大型爆弾の直撃を受けたと思ひ、直ちに身を床に伏せました。同時に爆風のため床の一部が吹っ飛び、四メートル下のコンクリート上に数名

と共に落下し意識不明になってしまいました。

何程かたつて兵隊さんの担架に乗り、近くの比治山洞屈入口で降される時、初めて気がついたのであります。その時すでに市中で罹災された多くの人々は、男女の区別すらできぬ状態で「兵隊さん水をくれ」と悲痛な声で比治山を越え、ただ火事のない所へと避難されました。私も全身打撲のうえ、顔面に数力所の硝子破片創を受け、一人行動できない状態でした。私の被爆場所が爆心から二、七〇〇メートルの地点であつたため、火災発生になかつたこと、建物全壊がなかつたこと、屋内であつたことなど好条件であつたので比較的軽傷でした。兵器廠構内に避難された数百人の罹災者の大半は、火傷を受け重傷者が多く、毎日数人ずつの死者が出ており、全くこの世の地獄そのものでした。

爆弾投下後五日目、友人と漸く比治山の山頂に登り、市内の焼け野原を見たとき「ピカドン」の新兵器は何か？威力の大なることに驚くとともに、ふと焼け野原に居住していた義父母の安全を祈念したのであります。八月十五日終戦を迎え、九月二十七日召集解除、十二月一日軍属を退官しました（当時30才）。

おわりに

日支事変以来八カ年にわたる戦争。祖国のため、青春と共に尊い命を捧げられた数多くの先輩各位の御冥福をお祈りするものであります。

人の生命は地球よりも重く、戦争の無い平和は尊い。平和を追求することは有史以来人類永遠の悲願であるといわれています。世界の人々は、今こそこのことを深く考えて欲しいと切に願う次第であります。

戦争はやめて下さい

N・Hさん 55歳

摂津市正雀

今、思い出しただけでもぞっとします。十五才の時、私は、国鉄に務めていました。国をあげての戦争だったため、二十四時間勤務で、ほとんどの職場の人は疲れきっていました。何時も、アメリカの偵察機が旋回してくるので、私達は、恐怖という感情を越えてしまい、慣れきって、警戒警報が鳴っても、防空壕に避難することがなくなっていました。

その日も丁度、朝の点呼が終わり、八時四十分発の糸崎行の貨物列車を運転するにあたって、私は、機関車の釜の温度を上げるために豆炭と薪を適当にたいて、発車までの時間を機関区のR型車庫の壁にもたれて待っていました。

忘れもしません、八月六日の八時三十分頃……。警戒警報のサイレンがけたたましく鳴り響き、それと同時に真っ黄色の閃光が光ってその状態が約十秒間ぐらい続きました。これが、あの恐ろしい原子爆弾だったのです。誰かの「機関車のボイラーが、爆発したらしいぞ」という声が聞こえました。私はその時の爆風で、およそ三メートルも吹き上げられたでしょうか。やがて地面に叩きつけられ、一瞬、何が起ったのかわけがわからず、誰かに説明でもしてもらえないと、この状態を理解することができませんでした。

まわりの状態も、私の気持ちと同様に、暗黒状態のように真黒で、しばらくは付近が見えませんでした。

職場の同僚達はというと、コンクリートの土間に座りこんで、無表情でいました。どのくらい時間が経ったでしょうか。夜が明けていくように、だん

だんと明るくなってきました。その時、私の目に映った光景は、悲惨そのもので、同僚の一人は機関車の前面のプレート磨きの仕事をしていたのか、前に叩きつけられて両眼は飛び出し、即死の状態でした。そんな状態の人達が何十人もいて、みなこと切れていました。まるで、地獄絵図そのもので、手のつけない状態でした。皆が集まって点呼してみると、一職場四十五名中十名しか無事でいませんでした。

私達は自宅に帰れず、非常勤務につきました。本当の原爆の恐ろしさというものを味わったのはそれからでした。

広島市は、原爆投下の折、いたる所で爆発が起こり、家はすべて屋根から燃え上がり、寸時にして灰となりました。私が、いつも洗濯をしていた宇品川も、その時、川底は小川が流れるように水量は減り、一週間ほど水のない状態でした。広島市北部の山々も、枯

木のように焼けてしまい、見るも無残な姿でした。

それから鉄道も不通となり、私達はこの悲惨な状態となった広島市を片付けなくてはいけない、という作業につきました。

広島駅は、プラットホームの屋根の鉄骨が、熱で溶けていました。溶けてしまった鉄橋の手すりには、人達が男女の区別もわからないほどの状態で、手すりにさわって立ったままの姿で焼死していました。その人達を、その場所から移動させる時、驚いたことには手すりに、そして道にその人達の跡形が残っていたのでした。

私も、当時、ガラスの破片が、体全体につきささり、手当てを受けるため臨時の陸軍病院へまいりました。そこでの様子もひどく、ある人は体の骨が見えるほどケロイドがひどく、皮膚がめくれているため、その皮をはがし、

後は荒縄でしばるといような治療でした。その人は少しもいたがらず治療を受けていたようですが、やがて亡くなられたようです。

このような状態であつたにもかかわらず、国は「アメリカが特殊爆弾を使用したが、わが軍は戦争の勝利を信じて、戦いはこれからだ」といようなビラを貼り、また飛行機からマイクを使って、戦争の勝利を叫んでいました。しかし、私はこの時、「戦争は負ける」と思いました。

今とはとても平和な時代です。このような悲惨な出来事を経験しなくてもいいのなら、絶対にこんな経験などしたくありませんでした。しかし、私が見てしまった、このたった一日の出来事ですが、経験していない人達に少しでもその悲惨な様子がわかつていただければ幸いです。経験した者が声をそ

ろえて、きっと叫ぶでしょう。「戦争は、やめて下さい」と。

憲法を守り人間を尊重する

平和都市宣言

私たちは、憲法で戦争を放棄し、世界の恒久平和の実現に貢献することを誓っています。

しかしながら、世界各地では武力紛争が絶えず、近年の核兵器の発達は核戦争の起きる危険性を高め、人類の平和と生存に深刻な脅威を与えています。

国際社会の新たな秩序と安定が求められている今日、平和のうちに生存する権利並びに人間としての尊厳及び幸福追求の権利が尊重されることが全人類の切実な願いになっています。

ここに、摂津市は国内外の平和を愛する人たちとともに豊かで明るく住みよい社会の建設を積極的に推し進めることを決意し、憲法を守り人間を尊重する平和都市になることを宣言します。



A DECLARATION FOR THE BUILDING OF A PEACEFUL CITY IN WHICH THE CONSTITUTION IS OBSERVED AND HUMAN BEINGS ARE RESPECTED

We Japanese pledge in our Constitution that we forever renounce war and contribute to the realization of lasting peace in the world.

However, with armed conflicts breaking out repeatedly in many parts of the world, the steady development of unclear weapons in recent years has increased the danger of a unclear holocaust, posing a serious threat to peace and human survival.

At a time when a new order and stability in international society are sought more strongly than ever before, it is the earnest hope of all mankind that their right to live in peace and pursue human dignity and happiness is fully respected.

Determined to vigorously pursue our undertaking to create a lively, affluent and comfortable society in cooperation with all peace-loving people in and outside Japan, we of Settsu City hereby declare that we will build a peaceful city in which our Constitution is faithfully observed and human beings are respected as such.

昭和 58 年 3 月 30 日

摂津市

March 30, 1983

Settsu City



市長公室人権女性政策課
平成 27 年 12 月 発行